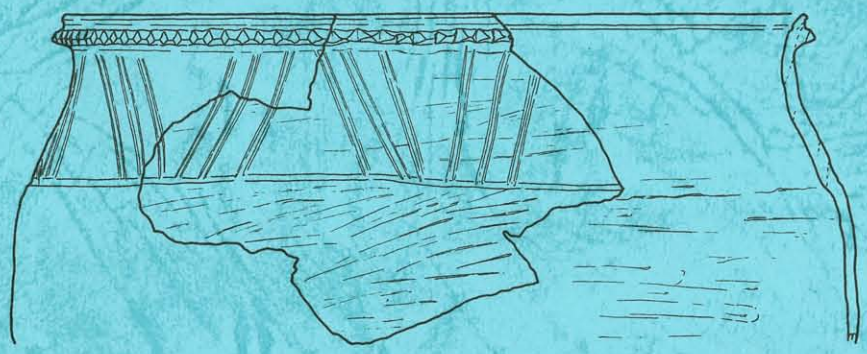
高松市埋蔵文化財調査報告 第70集

都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第二冊

東中筋遺跡

－第2次調査－



２００４．３

高松市教育委員会

赤色顔料付着土器①

赤色顔料付着土器②

例　言

1　本書は，都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で，高松市桜町二丁目に所在する東中筋遺跡－第２次調査－の調査報告を収録した。

2　発掘調査及び整理作業については，高松市教育委員会が実施した。

3　調査から報告書に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財センター　讃岐文化遺産研究会

4　東中筋遺跡－第２次調査－の調査は，平成12年度に文化振興課文化財専門員小川賢が行い，中西克也（讃岐文化遺産研究会）の補佐を得た。整理作業は小川が行った。

5　報告書掲載の遺物写真撮影は，杉本和樹氏（西大寺フォト）に委託した。

6　本書の執筆は，第４章以外を小川が行い，編集も小川が行うとともに，同課文化財専門員川畑聰が補佐した。

7　第４章自然科学的分析のうち，第１節プラント・オパール分析を株式会社パレオ・ラボに委託し，第２節赤色顔料分析を魚島純一氏（徳島県立博物館学芸員）に依頼した。第３節^{14}Ｃ年代測定については，小林謙一氏（総合研究大学院大学）の好意により玉稿をいただいた。なお，文中の用語・句読点等については，執筆者の意思を尊重し統一していない。

8　本文の挿図として，国土地理院発行２万５千分の１地形図「高松南部」及び高松市都市計画図２千５百分の１「高松市街南部」を一部改変して使用した。

9　発掘調査で得られた資料は，高松市教育委員会で保管している。

10　本報告書の高度値は海抜高を表し，方位は座標北を表す。

11　本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。

SK：土坑　SD：溝　SR：旧河道　SX：性格不明遺構

12　土壌及び土器観察の色調表現は，新版 標準土色帖（農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）による。

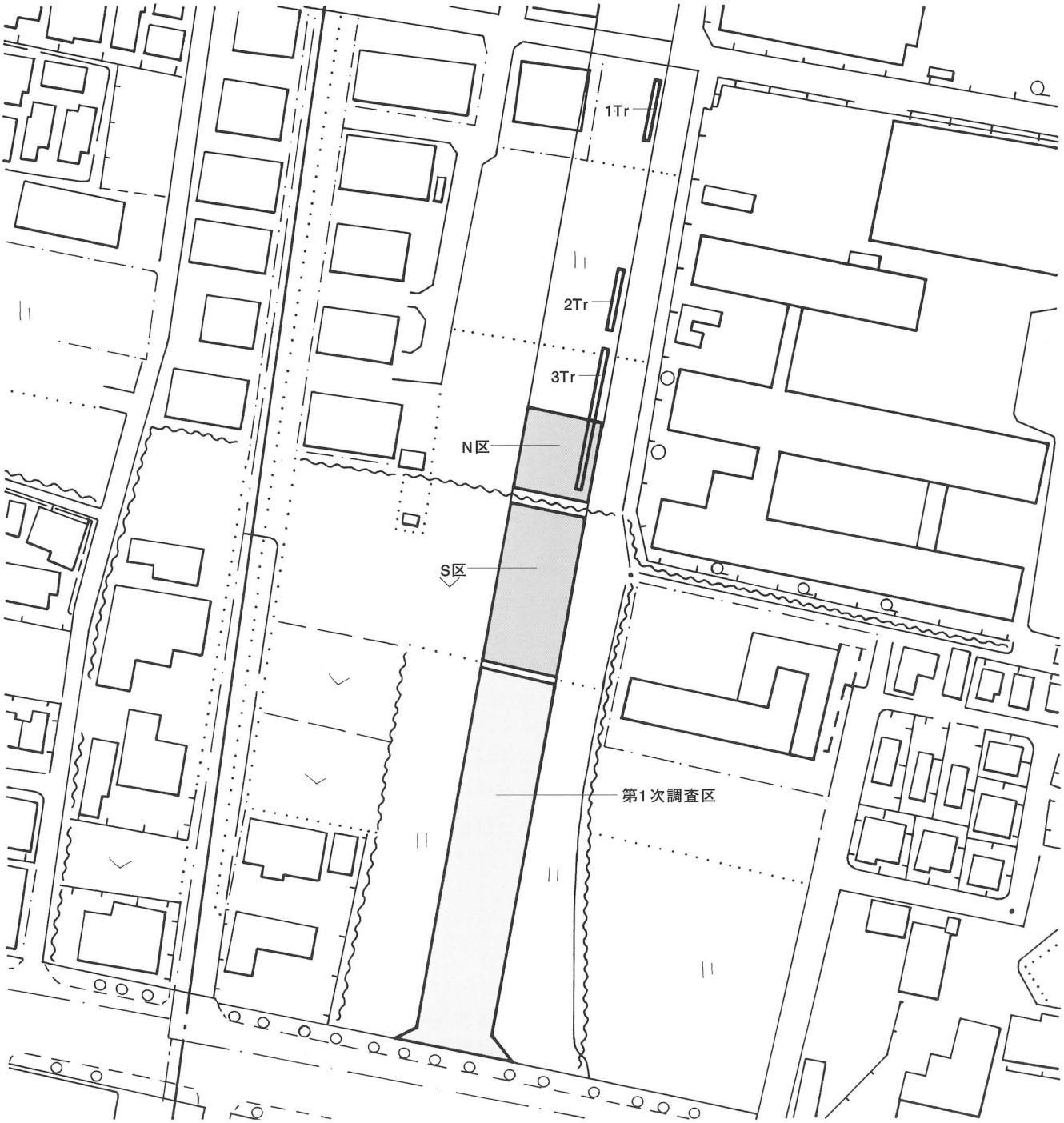
目　次

例言・目次 …… 1
第１章　調査の経緯と経過 …… 2
第２章　地理的環境・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の成果
　第１節　調査区の設定と遺構番号 …… 9
　第２節　遺跡の概要と基本層序 …… 9
　第３節　縄文時代晩期の遺構・遺物 …… 10
　第４節　縄文時代晩期末～弥生時代の遺構・遺物 …… 28
　第５節　古代～中世の遺構・遺物 …… 37
　第６節　近世以降および不明遺構等 …… 40
第４章　自然科学的分析
　第１節　高松市東中筋遺跡のプラント・オパール …… 42
　第２節　高松市東中筋遺跡出土赤色顔料付着遺物の蛍光Ｘ線分析について …… 46
　第３節　香川県高松市東中筋遺跡出土縄紋晩期土器付着物の^{14}Ｃ年代測定 …… 49
第５章　まとめ …… 56

第１章 調査の経緯と経過

東中筋遺跡は，都市計画道路室町新田線と高松港（東浜港）を南北に結ぶ都市計画道路東浜港花ノ宮線の予定地内で確認された遺跡である。すでに南半分の1,245㎡ついては，平成11年度に第１次調査として発掘調査を行い，翌12年度に報告書を刊行済である。

残る北半分については，平成11年度に試掘調査を実施した。その結果，旧地形は第１・２トレンチでは深さ約２ｍ以上を測る旧河道が存在し，第３トレンチでは旧河道から微高地となることが確認された。一方，埋蔵文化財としては，第３トレンチ南半分で畦畔状遺構を確認するとともに，弥生土器片が出土した。なお，第３トレンチ南端から第１次調査区までの間については，用地買収交渉の条件で試掘調査が行えなかったが，試掘調査及び第１次調査の結果より，本調査を実施することで事業課である都市計画課と合意した。本調査は，第３トレンチ南半分から第１次調査区までの約700㎡を対象とし，平成12年７月５日～９月28日にかけて実施した。

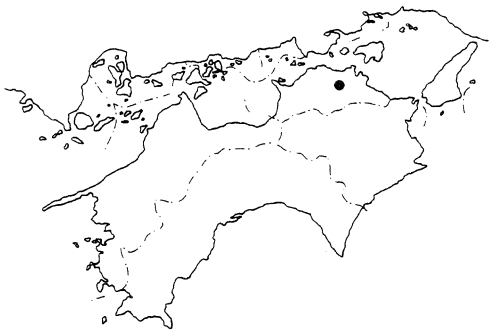


第１図　調査区位置図（縮尺1/1,250）

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央部に，低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって囲まれた東西20ｋｍ，南北16ｋｍの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食の受けにくい安山岩がギャロップと呼ばれる形でかぶさっており，そのため平野周囲の山塊のように侵食解析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ），あるいは平野内部に見られる由良山等の孤立丘（ビュート）となっており，高松平野の自然環境を特徴付けている。



第２図　遺跡位置図

高松平野は，完新世に入ってから形成されたものである。讃岐山脈から流下し，瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ，本津川，春日川，新川などによって搬出された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。現在石清尾山山塊の西を直線に北流する香東川は，17世紀に人工的に固定されたもので，それ以前には石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流する流路も存在していた。

本遺跡が所在する高松市街の中心に近づくにしたがい傾斜が緩やかになっており，ここには海岸線に沿って東西方向に延びる微高地の砂堆が形成されており，海の影響を受けていたと考えられる。ボーリングデータによれば，栗林公園付近から松縄町，久米池より北側では海成層の存在が確認されている。高松市街地付近では，現地表面下10～12ｍ以浅が最終氷河期以降の堆積物であると推測できる。本遺跡に東隣する桜町中学校でのボーリングデータでは，現地表面下３ｍまではシルト質砂，３～７ｍは粘土，７～８ｍはシルト質砂，８ｍ以下は礫となっている。この現地表面下８ｍが沖積層と洪積層の境であり，これより上が最終氷河期末以降の堆積物である。

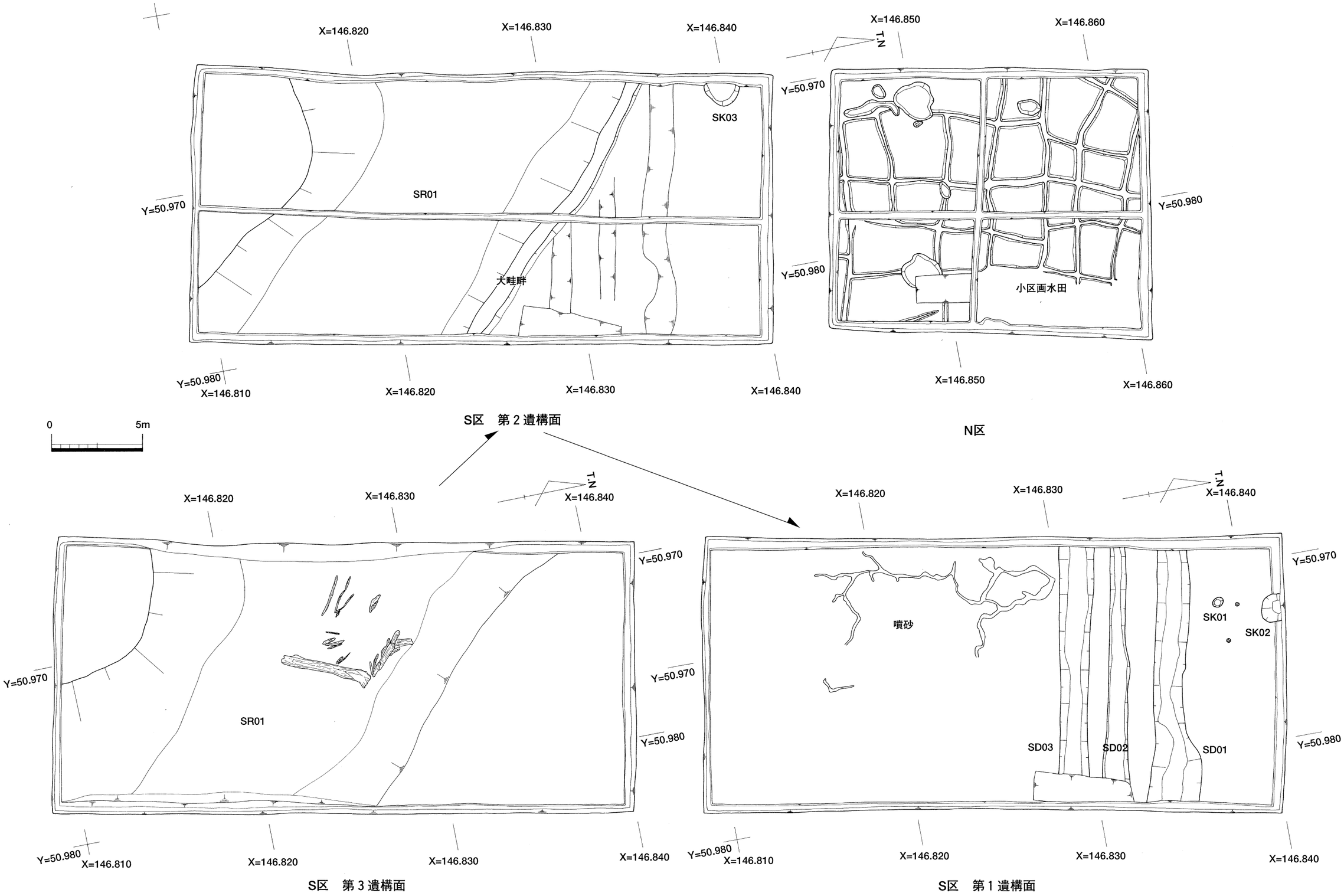
第２節 歴史的環境

周辺部に位置する最古の遺跡として，縄文時代晩期中葉頃の居石遺跡がある。旧河道から突帯文以前の土器及び土掘り具を中心とした石器，伐採具と考えられる木製品が出土しており，安定した平野部においては既に開墾・農耕の初現が見られる。弥生時代では海岸により近い遺跡として，環濠集落が確認された天満・宮西遺跡，弥生時代末～古墳時代の掘立柱建物跡等が検出された木太中村遺跡が挙げられる。近年では，海岸に位置する高松城跡下層の調査で，弥生時代後期の土器が海抜０ｍよりやや上位の砂堆から磨滅を受けずに出土する事例が認められ，今後の調査において海浜部でも遺跡が確認される可能性が高い。平野部では弥生時代後期の集落が多く確認されており，古墳時代になると石清尾山山頂や尾根において鶴尾神社４号墳等の積石塚古墳群が造営される。なお，古墳時代の集落については，調査事例の多い平野部においても明確ではない。 古代においては，屋島で古代山城が築かれ，平野部では松縄下所遺跡で見られるような条里区画が認められるようになる。 古代末～中世では石清尾山の北東部から旧市街地に至る地域が野原庄に比定されており，その海浜部にあたる高松城跡（丸の内地区）では，９～10世紀代の生活痕が確認され集落の所在が明らかとなっている。さらに高松城跡（西の丸地区）では，12～13世紀代の湊と考えられる礫敷きの港湾遺構が検出されている。周辺部の調査においても中世以前に遡る遺構の検出例が増えており，今後，中世以前においても高松平野の拠点となるような港町の姿が想定できるようになるかもしれない。このように大半が海に属する地形，あるいは海浜部の不安定な立地条件と考えられていた本遺跡以北の砂堆において，近世城下町の整備より遡る遺跡の所在が明確となったが，この砂堆へと向かう旧沖積地の縁辺に位置する本遺跡において縄文時代～中世に至る遺構・遺物が存在することは示唆に富むものである。

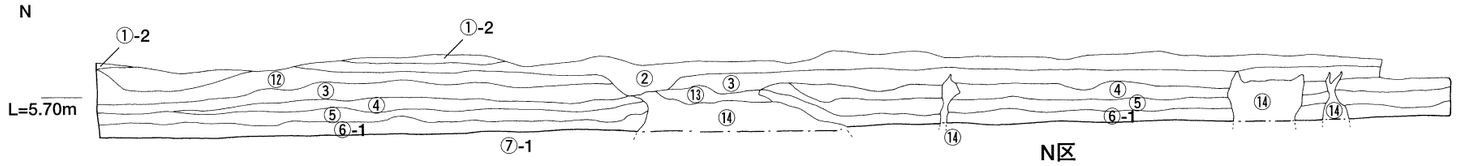
参考文献　香川県教育委員会「高松城跡（西の丸地区）Ⅱ」「高松城跡（丸の内地区）」
高松市教育委員会「東中筋遺跡―第１次調査―」「讃岐国弘福寺領の調査，同Ⅱ」「木太中村遺跡」

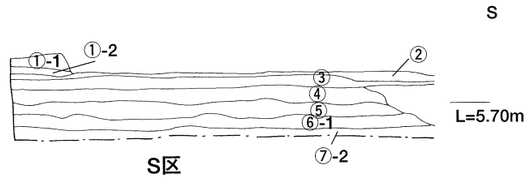
1 東中筋遺跡　2 稲荷山姫塚　3 西ハゼ土居遺跡　4 松並・中所遺跡　5 キモンドー遺跡
6 天満・宮西遺跡　7 松縄下所遺跡　8 境目・下西原遺跡　9 上西原遺跡　10 弘福寺領田図比定地
11 大池遺跡　12 上天神遺跡　13 太田下・須川遺跡　14 蛙股遺跡　15 居石遺跡
16 井手東Ⅱ遺跡　17 紺屋町遺跡　18 高松城跡（丸の内地区）　19 高松城跡（西の丸町）　20 高松城跡（東の丸跡）

第３図　東中筋遺跡周辺主要遺跡分図（縮尺1/25,000）

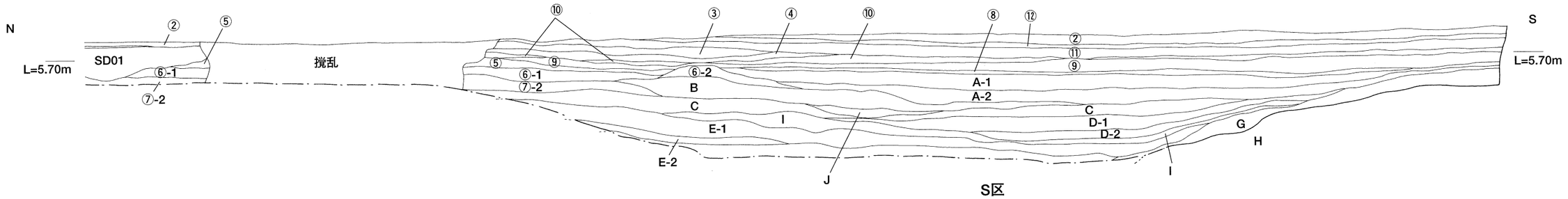


第4図　東中筋遺跡（第2次調査）平面図（縮尺1/200）





①-1：現耕作土
①-2：2-5Y5/1 黄灰色極細砂（Fe：沈着）
②　：5Y6/4 オリーブ黄色シルト質極細砂
③　：2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～シルト質極細砂
④　：2.5Y5/3 黄褐色シルト質極細砂（Fe沈着）
⑤　：10YR4/1 褐灰色極細砂（Fe沈着）
⑥-1：7.5YR5/1 黒褐色シルト質極細砂～シルト質粘土（土壌化）
⑥-2：7.5YR1-7/1 黒色シルト質粘土（かたくしまる遺物包含）
⑦-1：2-5Y6/3 にぶい黄色細砂
⑦-2：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
⑧　：5Y6/4 オリーブ黄色シルト
⑨　：7.5YR4/2 灰褐色シルト（Fe沈着）
⑩　：10YR6/1 褐灰色シルト
⑪　：5Y7/4 浅黄色シルト質極細砂
⑫　：2.5Y6/2 灰黄色シルト～シルト質粘土
⑬　：2.5Y 黄褐色細砂（⑥-1層混じる，しまる，噴砂）
⑭　：2.5Y6/2 灰黄色細砂（噴砂）



A-1：7.5YR4/2 灰褐色シルト～シルト質粘土
A-2：7.5YR4/1 褐灰色シルト
B　：7.5YR2/1 黒色シルト（やや粘質）≒⑥-2
C　：2.5Y6/2 灰黄色細砂（7.5YR3/1 黒褐色シルト質細砂をラミナ状に含む）≒⑦-2
D-1：7.5YR3/1 黒褐色～4/1褐灰色シルト質細砂（ラミナ状堆積）
D-2：10YR4/1 褐灰色細砂
E-1：N3/0 暗灰色シルト
E-2：N4/0 灰色細砂（植物遺体が混じる）
F　：7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト（流木，植物遺体を含む）
G　：5GY6/1 オリーブ灰色細砂（かたくしまる）
H　：N5/0 灰色砂礫
I　：7.5GY6/1 緑灰色細砂（しまらない）
J　：2.5Y4/1 黄灰色シルト

第5図　調査区東壁土層図（縮尺1/80）

第３章 調査の成果

第１節 調査区の設定と遺構番号

東中筋遺跡－第２次調査－の調査区設定にあたっては，対象地がコンクリート壁により南北に分断されていることに加え，このコンクリート壁に沿って現有の農道が設けられていることから，コンクリート壁を挟み南北に各２ｍずつ控えをとり，計４ｍ間を調査対象から除いた。これにより分割される，北側の調査区をＮ区，南側の調査区をＳ区と呼称して調査を実施し，本報告においてもこの調査区名を使用する。また，調査時と報告にあたっての遺構番号の変更は行っていない。

第２節 遺跡の概要と基本層序

概要（第４図）

調査開始時は，第１次調査および試掘結果から，遺構面１面のみを想定していた。これは，前述のとおりＳ区については試掘調査が行えなかったことと，第１次調査で確認した旧河道がＳ区へ続いていることが予想できなかったためである。ところが，調査の結果，Ｎ区は遺構面が１面のみだが，Ｓ区では３面の遺構面を確認し，Ｎ区の遺構面がS区の第２遺構面に相当することが明らかになった。そして，Ｓ区第２遺構面完掘後，第３遺構面の調査に着手したところ，旧河道下層部に遺物がまとまって埋蔵されていることが判明したが，街路本体事業工程との関係で調査期間が限られていたことなどから，調査最終段階にトレンチ確認を行った結果，Ｓ区のほぼ全域が旧河道であることが分かった。しかし，堆積土層が不安定な砂ばかりであったため，北岸の正確な位置は判明しなかった。

以下は確認した遺構・遺物の概要である。

Ｎ区では，小区画水田に伴う畦畔を検出した。自然科学的な分析によって追証を行うため，土壌サンプルを採取しプラント・オパール分析を依頼した。他には，地震の噴砂痕と想定される不明遺構（SX01～08）を確認した。

Ｓ区第１遺構面では，古代～中世の条里地割に伴う坪界溝を検出したほか，近世以降の土坑やピットを確認した。また，噴砂と考えられる地面の亀裂痕を検出している。

Ｓ区第２遺構面では，埋没流路と北岸に沿って大畦畔を検出している。大畦畔を構成する土壌層から，遺存の状態は良くないが，縄文土器・弥生土器・石器がまとまって出土している。

Ｓ区第３遺構面では，旧河道の掘削で，縄文時代晩期でも突帯文期の遺物がまとまって出土した。また，最下層付近で流木等の木片が集中して認められた。

基本層序（第５図）

①～⑫層までは，微高地上の堆積層，⑬・⑭層は噴砂痕と考えられる。Ａ～Ｊ層までを旧河道の堆積層とした。⑦－１・２層は黄色系の安定した砂層で，微高地を構成する堆積層である。ただし，⑦層については弥生時代以降の地山であるが，Ｃ層に近似した連続する堆積層であり，本来は河川による沖積層と考えられる。⑥－１層は，土壌化しており耕作土層と想定され，Ｎ区では凸状に隆起した箇所を小畦畔として検出した。⑥－２層は，大きな凸状の高まりとなる個所で遺物を包含するもので，Ｓ区第２遺構面で大畦畔を検出している。Ｂ層・⑥－１・２層は黒～黒褐色土で近似した一連の堆積層であり，上下関係から低湿地状の堆積（Ｂ層）に人為的造作（⑥－２層）が加わり，耕作土化（⑥－１層）したものと考えられる。Ｃ層より下位は砂質土層であり，旧河道による盛んな堆積作用がうかがえる。縄文土器包含層（Ｅ－１層），木片集中層（Ｆ層）は，シルト質で，河川の流れがやや滞留する時期を示すものと考えられる。

以下は遺構確認面の概要である。

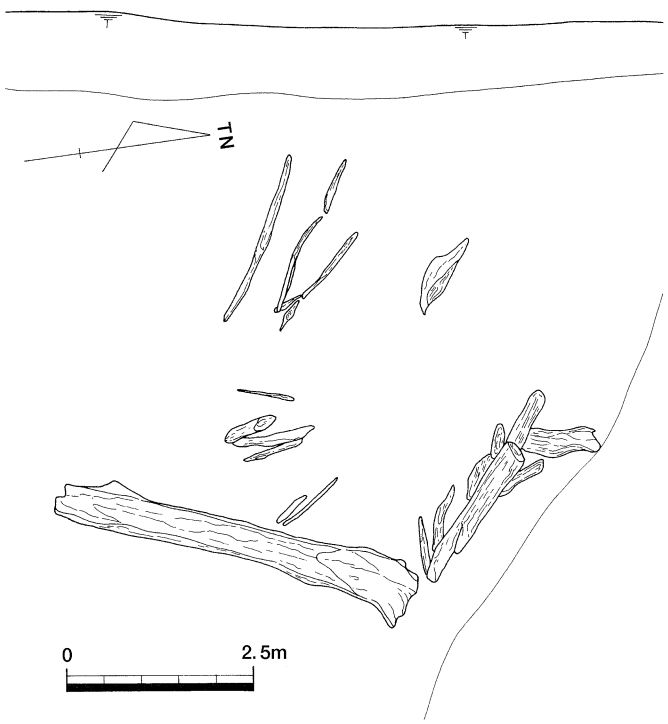
Ｓ区第１遺構面は④層上面である。Ｎ区およびＳ区第２遺構面は，⑥－１・２層上面であり，埋没流路部分ではＡ－２層下面までを掘削した。第３遺構面であるＳ区旧河道の掘り下げはＦ層上部まで行い，南岸では河床と考えられる砂礫層を確認できたが，北岸では調査の都合上河床まで確認できなかった。

第３節 縄文時代晩期の遺構・遺物

旧河道ＳＲ０１

Ｓ区を北西方向に斜めに横断している。調査時は，Ｓ区の第２遺構面を最終面とし，当流路を第１次調査で確認された旧河道とは別のものと考えていた。第２遺構面完掘時に，流路の下位に縄文時代晩期の遺物包含層（Ｅ層）および木片の集中層（Ｆ層）が確認されたため，更なる掘削を行った。南岸では第１次調査区に繋がる河床（砂礫層：Ｈ層）を確認できたが，北岸では調査の都合上完掘できなかった。このため，旧河道全体を明確にはできなかったが，第１次調査およびＮ区北の平成11年度試掘結果から，Ｓ区において大きく北西に蛇行し，さらにＮ区の北で北東方向へ蛇行するものと思われる。

さて，掘削にあたっては，Ｃ層以下が複雑な堆積状況だったため，縄文土器を層位的に認識するのは困難であったが，遺物の出土レベルが木片集中層（Ｆ層）の上部であること，暗灰色シルトおよび砂層の間で発見されることから，調査区東壁土層のＥ層が遺物包含層と考えられる。出土した土器片は，赤色顔料や炭化物が付着しており，さらに風化・磨滅が少ない良好な状態であった。最下層部と考えられるＦ層については，流木や木片が集中して見られたが，記録作業中の降雨により調査区西壁が崩落し埋没したため，取り上げ作業は行えなかった。



第６図　旧河道SR01　Ｆ層流木等出土状況図（縮尺1/100）

旧河道ＳＲ０１Ｅ層出土土器（第７～16図，第１～３表）

１～19は縄文土器深鉢の口頸部で，１～17の口縁部には貼付突帯文が見られる。このうち，１～９・14・16が頸部を境に口縁部が外傾する屈曲型と考えられるが，他のものは明確でない。色調は，大半が黒～暗灰黄色を呈するが，６～９のように，にぶい黄色や灰黄色を呈するものがある。調整は内外面ともナデ整形で，接合痕・条痕を残すものもある。

１は，面取りした口縁端部から下がり厚い突帯を貼付け，大きなＤ形の刻目を施す。口縁部内面には，明瞭な沈線が施される。また，条痕も見られることから古相を呈している。４の内面には，ミガキ（黒色研磨）調整が認められる。５～７の口縁端部には，上端より刻目が施される。８は淡い灰黄色を呈し，ケズリ調整の後，口頸部をナデにより仕上げている。外面頸体部境，内面口頸部境上に各々沈線が認められ，頸部外面には２×３条を単位とする斜行沈線文が施される。９はにぶい黄色を呈し，頸部外面に縦方向の多条沈線文が施され，口縁端部からやや下がる位置に突帯の貼付け痕が残る。10～12は，突帯を口縁端部に近接して貼付け，大きなD形の刻目を施すもので，10・11の胎土には，金雲母が目立つ。14・15は小形のもので，15は器形が砲弾型となる可能性がある。16は，口径40㎝を超える大形品に復元できる。口頸部は大きく外傾し，外面には横方向の強いナデが認められる。断面三角形の突帯は，やや下がった位置に貼り付けられている。18・19は口縁部が無文のものである。18は，器形より浅鉢もしくは大形壺の口縁部とも考えられるが，器面が他と同様に粗製であることから深鉢とした。口縁部の外面には，内傾接合によると思われる低い段と沈線が見られる。19は，口縁部が外反し端部に刻目を施す。頸部は条痕状のケズリ調整が見られ，突帯文期以前からの形態を引き継ぐ。他の遺物に比べ磨滅・風化の度合いが大きい。

20～25は，縄文土器深鉢等の頸体部である。

20は，頸体部境に刻目突帯文が施され，二条突帯を有する深鉢と考えられる。21～23は，外面の頸体部境付近に沈線を施す。21は金雲母を多く含み，体部の外面には20と同様にケズリ調整が見られる。24・25は体部直径が

50㎝以上となる大形品である。25は，38の浅鉢に近接して出土しているため，土器棺の可能性が考えられる。24は外面頸体部境にやや弱い沈線を施している。体部外面に研磨もしくは丹念なナデの調整痕が見られることから壺形として図化した。25は外面を粗いケズリ，内面を板状工具によりナデもしくは研磨されており，器壁は薄く仕上げられている。

26～32は，縄文土器深鉢等の口縁部である。

26は口径が小さいもので，壺形になる可能性がある。27は波状の口縁部で，頂部には口縁部の上端より刻目が3ヶ所見られ，内面には段状となる沈線が施される。28は口縁部上端に刻目，頸部に斜行沈線文が施される。30は幅広の突帯に大きな刻目が施されるが，断面の形状からすれば砲弾型，あるいは他と異なる屈曲型になると思われる。31は内面に沈線が施され，口縁が内傾する屈曲型と考えられる。32は口縁が波状形と考えられるもので，突帯も湾曲して貼り付けられているようである。頸部には刻目を施した際の工具痕と条痕が見られる。

33は縄文土器小片で，磨滅著しいが，外面には沈線施文以前に縄文が施されている。後期の所産と考えられる。

34～58は，縄文土器浅鉢である。34・35・38・47～51・56～58に赤色顔料が付着する。

34～43は口縁から頸部にかけて内傾し，口縁が外反するもの。34は，外面頸体境付近に施された2条の沈線に赤色顔料が付着する。また，口頸部境では器壁が厚くなるが，内面の段状となる沈線部分とその外面に赤色顔料が僅かに見られる。外面を黒色研磨，内面をナデにより仕上げる。35～37は厚い器壁で，内外の器面は黒色に研磨される。36の体部外面は，荒い研磨（ケズリ）調整となっている。37・38は波状口縁となるもので，復元口径より4ヶ所の頂部をもつものと考えられる。頂部には3ヶ所の刻目が施されている。38は器壁が薄く，内外面を黒色に研磨されている。刻目・沈線部に赤色顔料が認められる。39～42は器壁の薄いもので，色調および器面の研磨状態がほぼ同一である。また，口頸部内面には沈線が見られない。43は口縁部の外反の度合いが少なく，ほぼ直立して復元される。内外面に煤が付着している。

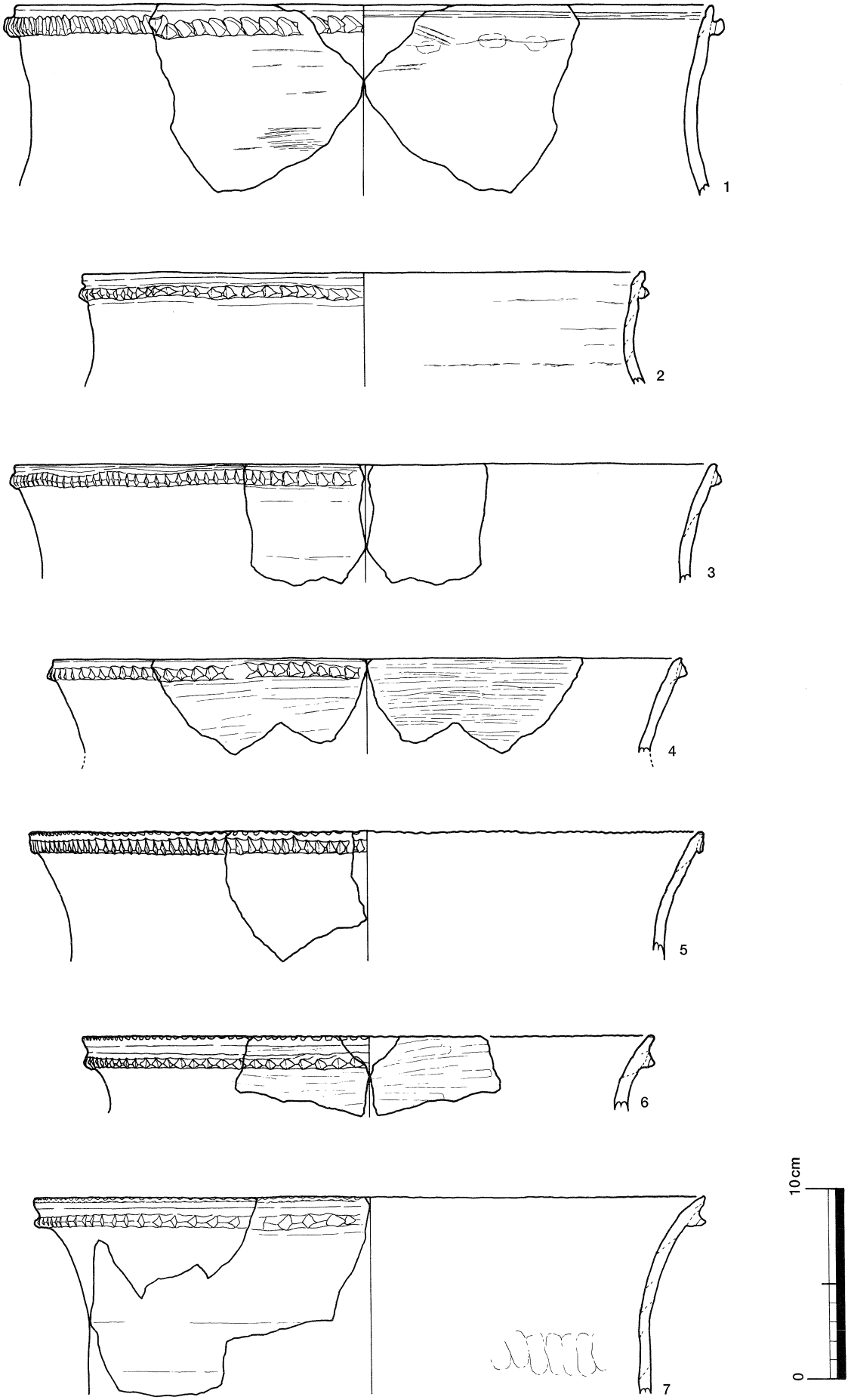
44～56は，頸体部で一旦屈曲し，口頸部が外反するもの。44～46・52は，突帯文期以前よりみられる形態で，口縁端部を摘み上げるもの(44)，内面を肥厚させるもの(45)，そのまま外反するもの(52)がある。47～51・56は，口頸部が短めに外反し波状の口縁を有する。外面口頸部をナデ，体部を荒い研磨，内面は黒色磨研によって調整されている。47は，復元口径より頂部が12ヶ所と想定され，類例として津島岡山大学遺跡のものと同法量・形態に復元される。50は口縁頂部に沈線が施され，赤色顔料が付着している。また外面頸体部境にも赤色顔料が付着している。53は頸体部境の屈曲がほとんどなく，外面に小さな段，内面に沈線が見られる。外面は，口頸部がナデ，体部が丹念なナデか研磨，内面は黒色研磨が施される。浅鉢としたが，器形が直立する鉢形の土器とも考えられる。54は，小形のもので，残存する上端部からすれば口縁部は外反もしくは直立するものと思われる。57は精製の浅鉢である。58は，その同一個体と考えられる。頸部は内傾し，口縁部は緩やかに外反する。器面は丹念な研磨・ミガキ調整が見られ，上面に赤色顔料が付着している。外面の赤色顔料付着部分が膜状に見られ，漆を使用していると考えられる。

59～64は壺形土器。

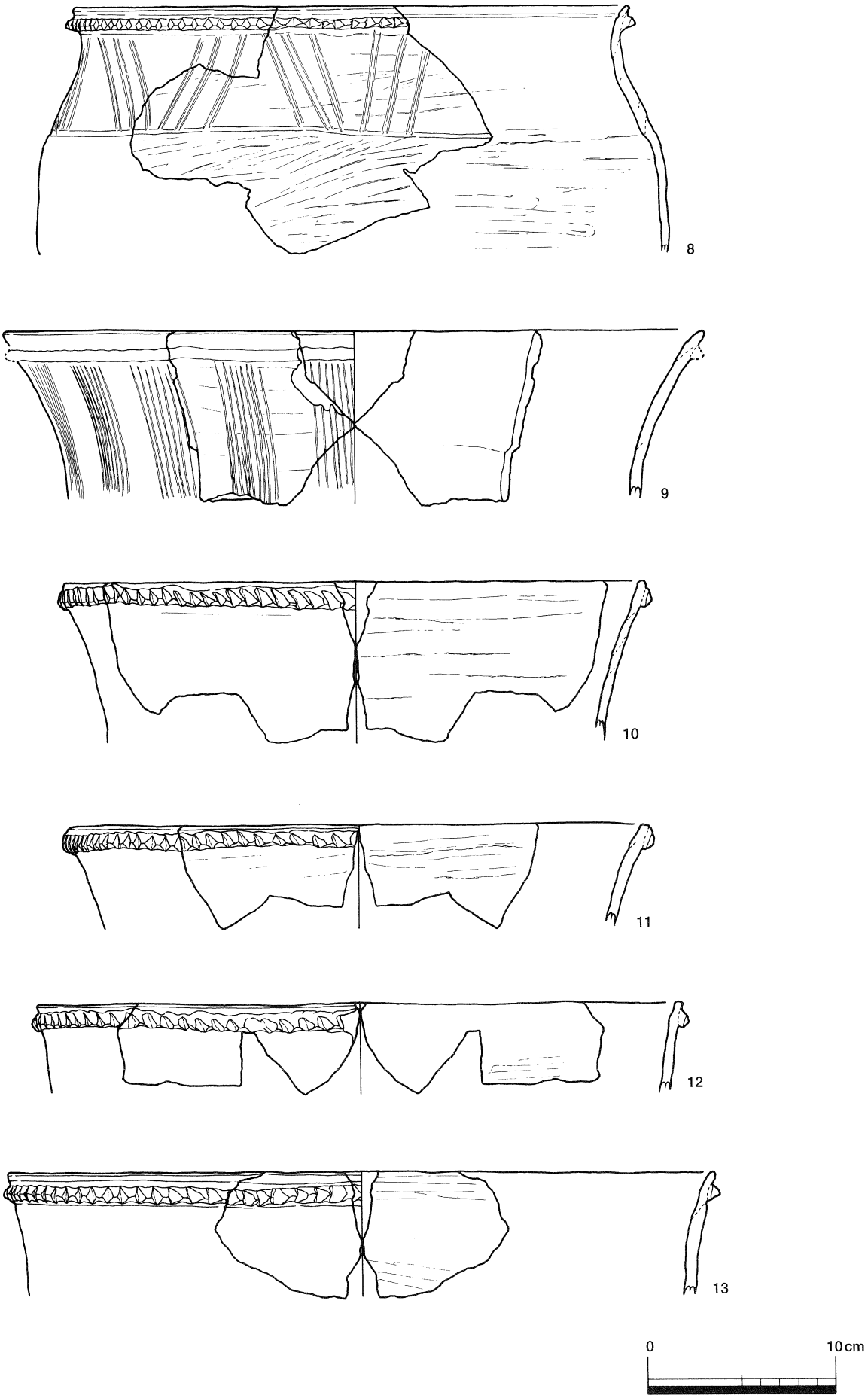
59は，57と同様に赤色顔料が付着した精製の土器で，壺の形態を呈する。60は頸部が内傾し口縁部が短く外反するもので，浅鉢の変容系と考えられる。角閃石が目立つ精緻な胎土を用い，丁寧なナデにより仕上げる。口頸部境には，焼成後と考えられる穿孔が1ヶ所見られる。61は，内傾する頸部から短い口縁部にやや大きく外反する。器面は黒色研磨で，頸部外面を縦方向，口縁部内面を横方向に研磨されている。62・63は壺の頸体部。62は，頸部外面を縦方向，体部を横方向に研磨されている。64はやや粗製のもので，外面の研磨は散漫であり，内面には接合痕が明瞭に残る。

65～73は椀形の浅鉢である。

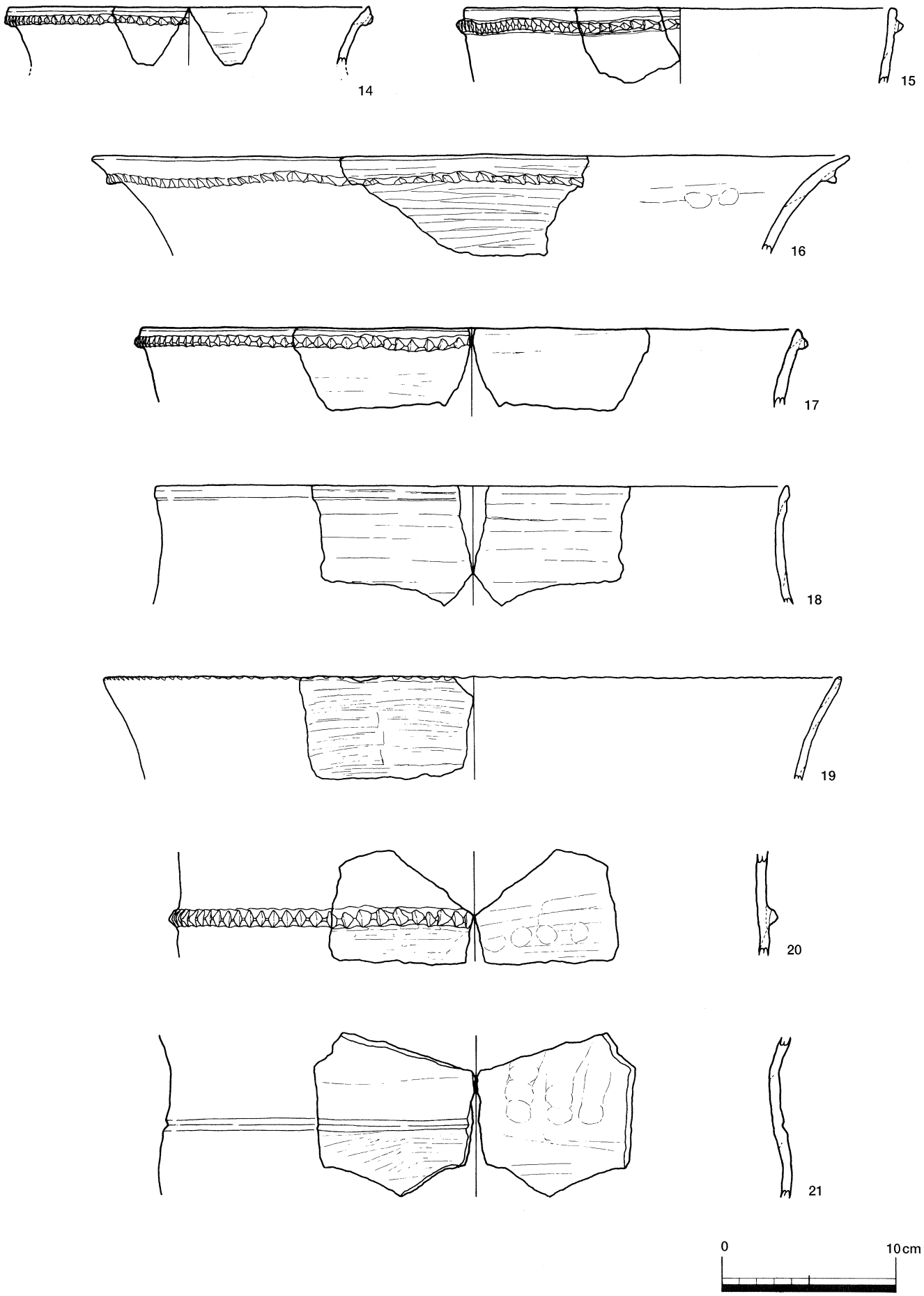
65～68は口径の大きな浅鉢である。66～68の口縁部内面には沈線が施され，67には赤色顔料が付着する。器面調整は，65～67が内外とも黒色研磨である。68は外面に煤が吸着している。69～70は椀形のもの。69の外面には元来全面に塗られていたと思われる赤色顔料が散在して付着している。70は灰黄～にぶい黄色を呈する精製のものである。71は波状口縁を有する精製品で，小形の椀と考えられる。72・73は粗製の椀形である。74は，大形の粗製鉢である。外面に条痕状のケズリ調整を行い，口縁部をなでて仕上げる。内面は板状工具によりなでているが，接合痕を残す。75・76は，74とほぼ同形と思われる口縁部片である。77～81は底部である。78～80は外面を荒い研磨，内面を黒色に研磨されており，36・39・47等のような浅鉢の底部と考えられる。



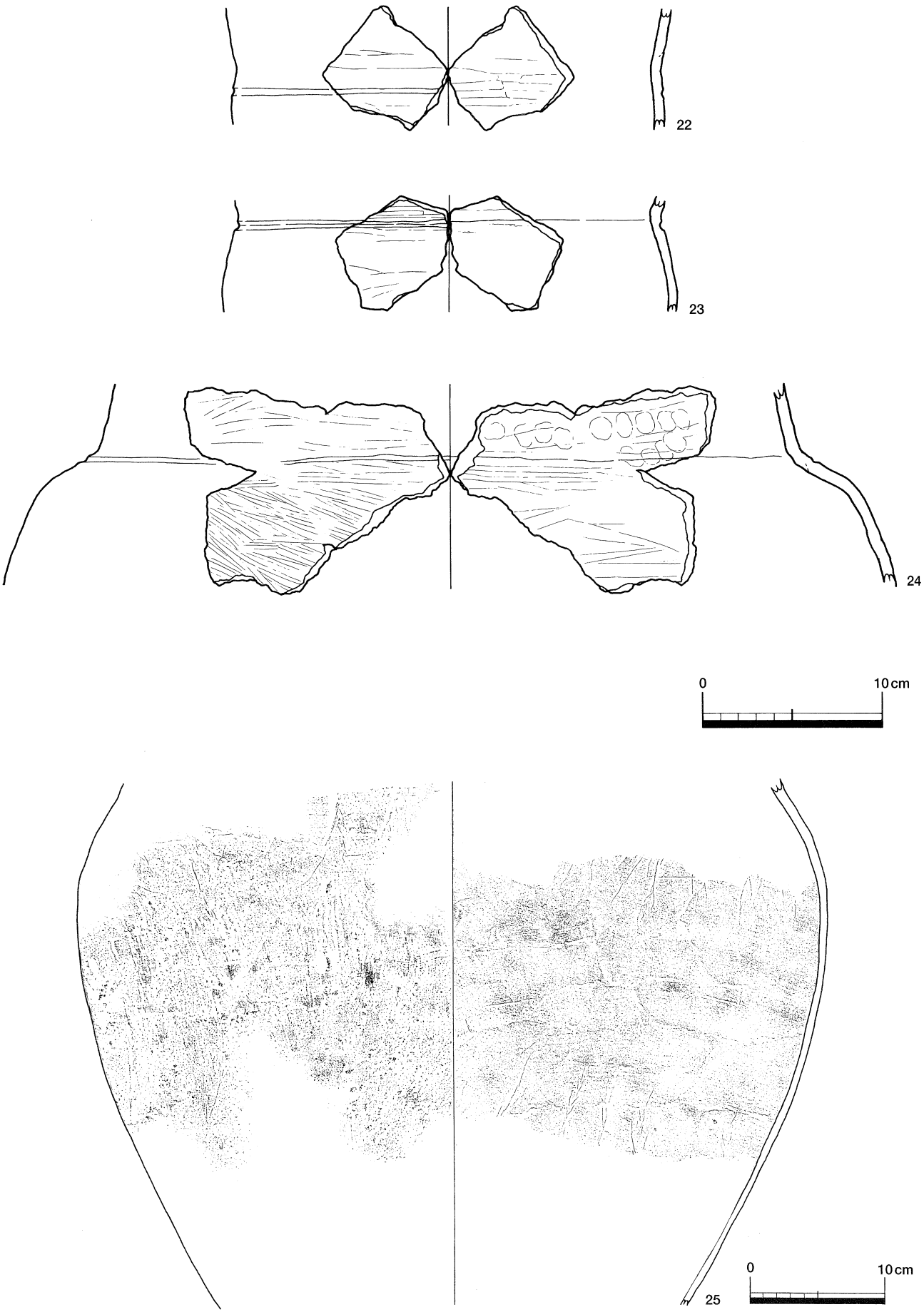
第７図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図①（縮尺1/3）



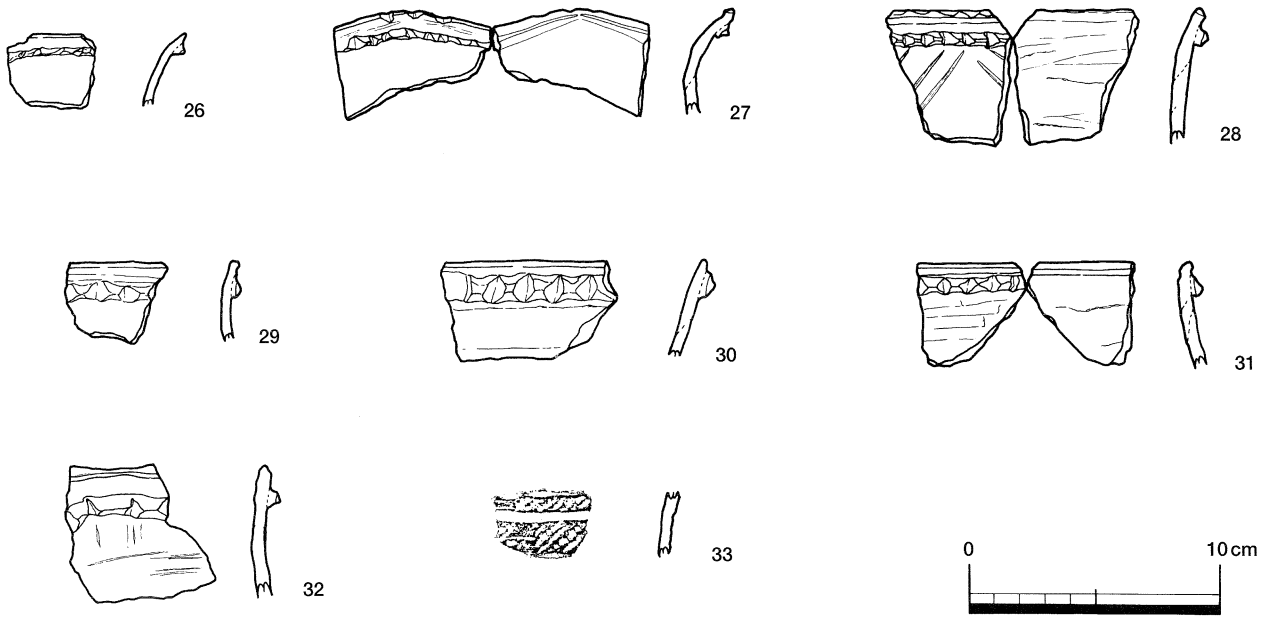
第８図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図②（縮尺1/3）



第９図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図③（縮尺1/3）



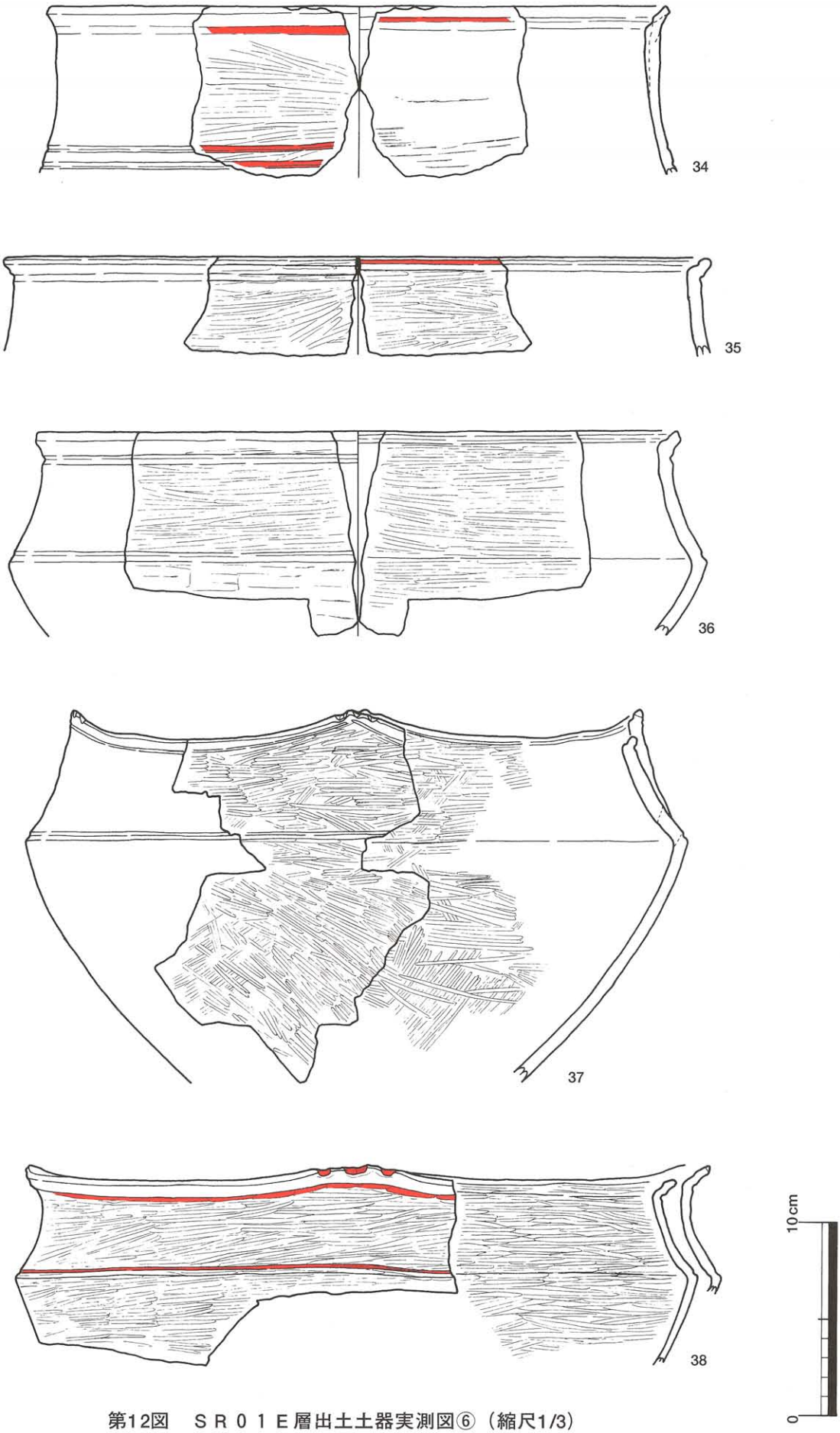
第10図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図④（縮尺1/3，25のみ縮尺1/4）



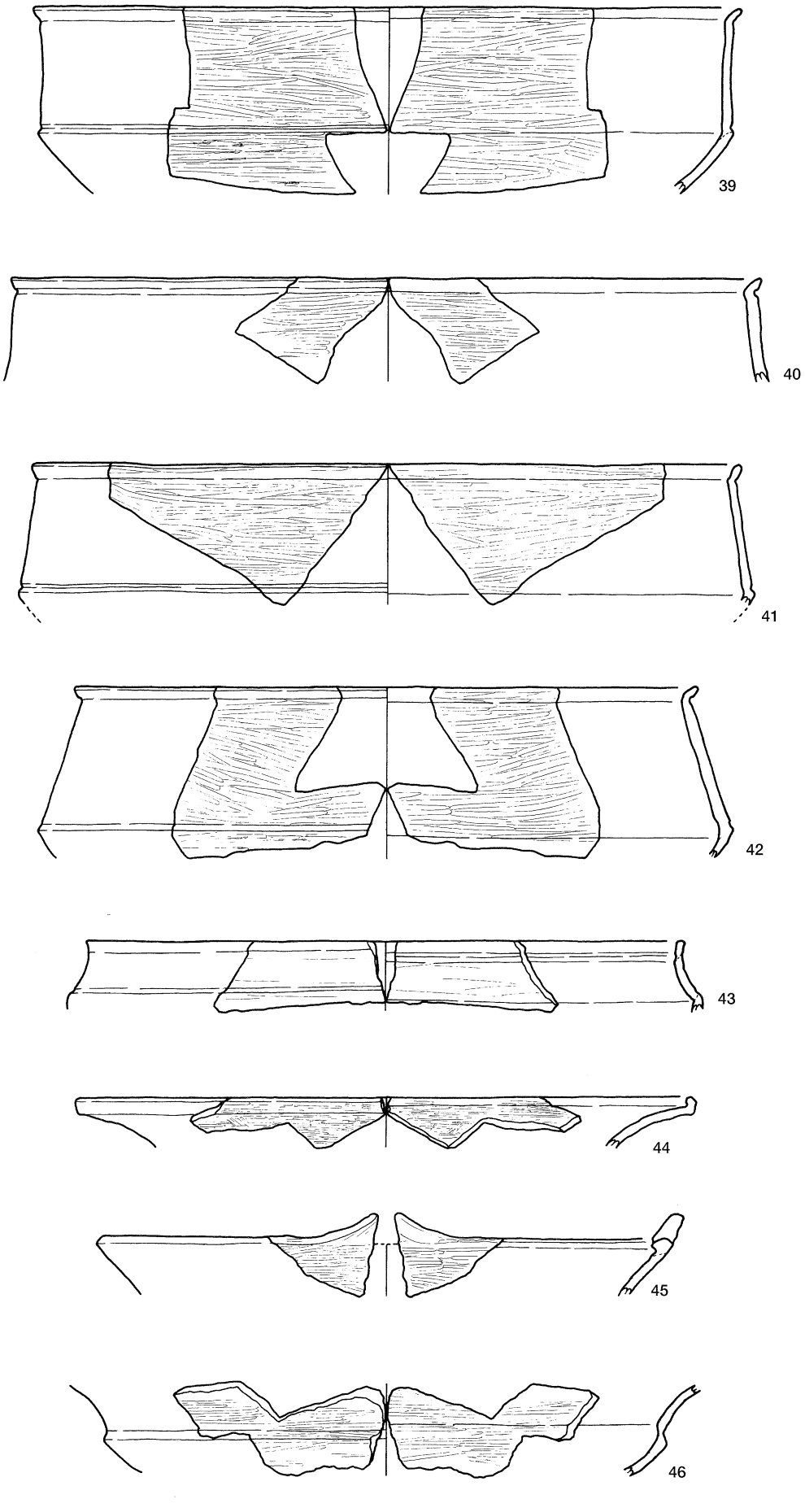
第11図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図⑤（縮尺1/3）

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土
1	縄文土器　深鉢	36.0		(9.9)	外面:煤付着, 条痕, ナデ 内面:条痕, ナデ, 指おさえ, 口縁部沈線1条	外面:N2/0黒色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:5Y5/1灰色～N2/0黒色	2mm以下の長石、石英を含む
2	縄文土器　深鉢	29.5		(6.0)	外面:煤付着, ナデ 内面:ナデ, 接合痕	外面:2.5Y5/2暗灰黄色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色	3mm以下の長石, 石英, 少量の金雲母を含む
3	縄文土器　深鉢	36.8		(6.3)	外面:ナデ 内面:ナデ, 黒斑	外面:10YR7/2にぶい黄橙色～2.5Y6/2灰黄色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色～N2/0黒色	2mm以下の長石, 少量の雲母, 角閃石を含む
4	縄文土器　深鉢	33.0		(5.0)	外面:煤付着, ナデ 内面:ミガキ, (黒色研磨)	外面:N2/0黒色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:5Y5/2灰オリーブ色～7.5YR2/1黒色	3mm以下の長石, 石英を少量含む
5	縄文土器　深鉢	35.2		(6.8)	外面:煤付着, ナデ, 口縁端部:刻目 内面:ナデ	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色	2mm以下の長石, 石英を少量含む
6	縄文土器　深鉢	30.0		(4.0)	外面:ナデ, 口縁端部:刻目 内面:ナデ	外面:2.5Y6/2灰黄色 内面:2.5Y6/2灰黄色	2mm以下の長石、石英を含む
7	縄文土器　深鉢	35.0		(10.3)	外面:ナデ, 口縁端部:刻目, 頸体部:煤付着 内面:ナデ, 頸体部境:指おさえ	外面:N2/0黒色～2.5Y6/3にぶい黄色 内面:2.5Y6/3にぶい黄色	2mm以下の長石を少量含む
8	縄文土器　深鉢	29.0		(13.0)	外面:口縁部:接合痕, 頸部:ケズリ後ナデ, 斜行沈線文, 頸体部境:沈線1条、体部:煤付着, ケズリ内面:口縁部:沈線1条, 口頸部:ナデ, 体部:ケズリ, 接合痕	外面:2.5Y7/2灰黄色 内面:5Y6/2灰オリーブ色	3mm以下の長石, 石英を含む
9	縄文土器　深鉢	36.6		(8.8)	外面:縦方向多条沈線文, ナデ 内面:ナデ, 接合痕, 黒斑	外面:2.5Y6/3にぶい黄色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色～N2/0黒色	2mm以下の長石, 角閃石を少量含む
10	縄文土器　深鉢	30.6		(8.4)	外面:煤付着, ナデ 内面:ナデ, 接合痕	外面:2.5Y7/2灰黄色～N2/0黒色 内面:10Y2/1黒色	2mm以下の長石, 石英, 金雲母を含む
11	縄文土器　深鉢	29.8		(5.4)	外面:煤付着, ナデ 内面:ナデ, 接合痕	外面:N2/0黒色～2.5Y6/2灰黄色 内面:10Y2/1黒色	2mm以下の長石, 石英, 金雲母を含む
12	縄文土器　深鉢	34.0		(4.8)	外面:煤付着, ナデ 内面:煤付着, ナデ	外面:N2/0黒色 内面:N2/0黒色	2mm以下の長石を少量含む
13	縄文土器　深鉢	37.0		(6.5)	外面:煤付着, ナデ 内面:煤付着, ナデ	外面:N2/0黒色～2.5Y7/2灰黄色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色～N2/0黒色	3mm以下の長石, 石英を含む
14	縄文土器　深鉢	20.4		(3.3)	外面:煤付着 内面:ナデ	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y3/1黒褐色	2mm以下の長石を少量含む
15	縄文土器　深鉢	24.4		(4.2)	外面:煤付着, ナデ 内面:煤付着, ナデ	外面:N2/0黒色 内面:N2/0黒色	3mm以下の長石を含む
16	縄文土器　深鉢	43.0		(5.6)	外面:強いナデ 内面:ナデ, 指おさえ	外面:N2/0黒色～2.5Y6/2灰黄色 内面:N2/0黒色	2mm以下の長石、石英を少量含む
17	縄文土器　深鉢	37.2		(4.7)	外面:ナデ 内面:ナデ, 接合痕	外面:2.5Y4/1黄灰色～N2/0黒色 内面:N2/0黒色	2mm以下の長石, 石英, 少量の金雲母を含む
18	縄文土器　深鉢	35.8		(6.7)	外面:ナデ, 口縁部:接合痕 内面:ナデ, 接合痕	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y3/1黒褐色～5/2暗灰黄色	3mm以下の長石, 石英を含む
19	縄文土器　深鉢	42.0		(5.8)	外面:ケズリ(条痕), 接合痕, 摩滅, 口縁端部:刻目 内面:磨滅	外面:10YR7/2にぶい黄橙色～N2/0黒色 内面:2.5Y7/2灰黄色～N2/0黒色	2mm以下の長石, 石英を含む
20	縄文土器　深鉢 体部	34.8		(6.4)	外面:頸部:ナデ, 体部:煤付着, ケズリ, 頸体部境:貼付突帯 内面:ナデ	外面:2.5Y5/2暗灰黄色～7.5Y2/1黒色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色	3mm以下の長石, 石英を少量含む
21	縄文土器　深鉢 体部	35.6		(9.1)	外面:煤付着, 頸部:ナデ, 体部:ケズリ, 頸体部境:沈線1条 内面:ナデ	外面:2.5Y6/3にぶい黄色～N2/0黒色 内面:2.5Y3/1黒褐色	2mm以下の長石, 石英, 金雲母を含む
22	縄文土器　深鉢 体部	24.0		(6.6)	外面:煤付着, ナデ, 頸体部境:沈線1条 内面:ナデ, 接合痕	外面:N2/0黒色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色～4/1黄灰色	2mm以下の長石, 石英を含む

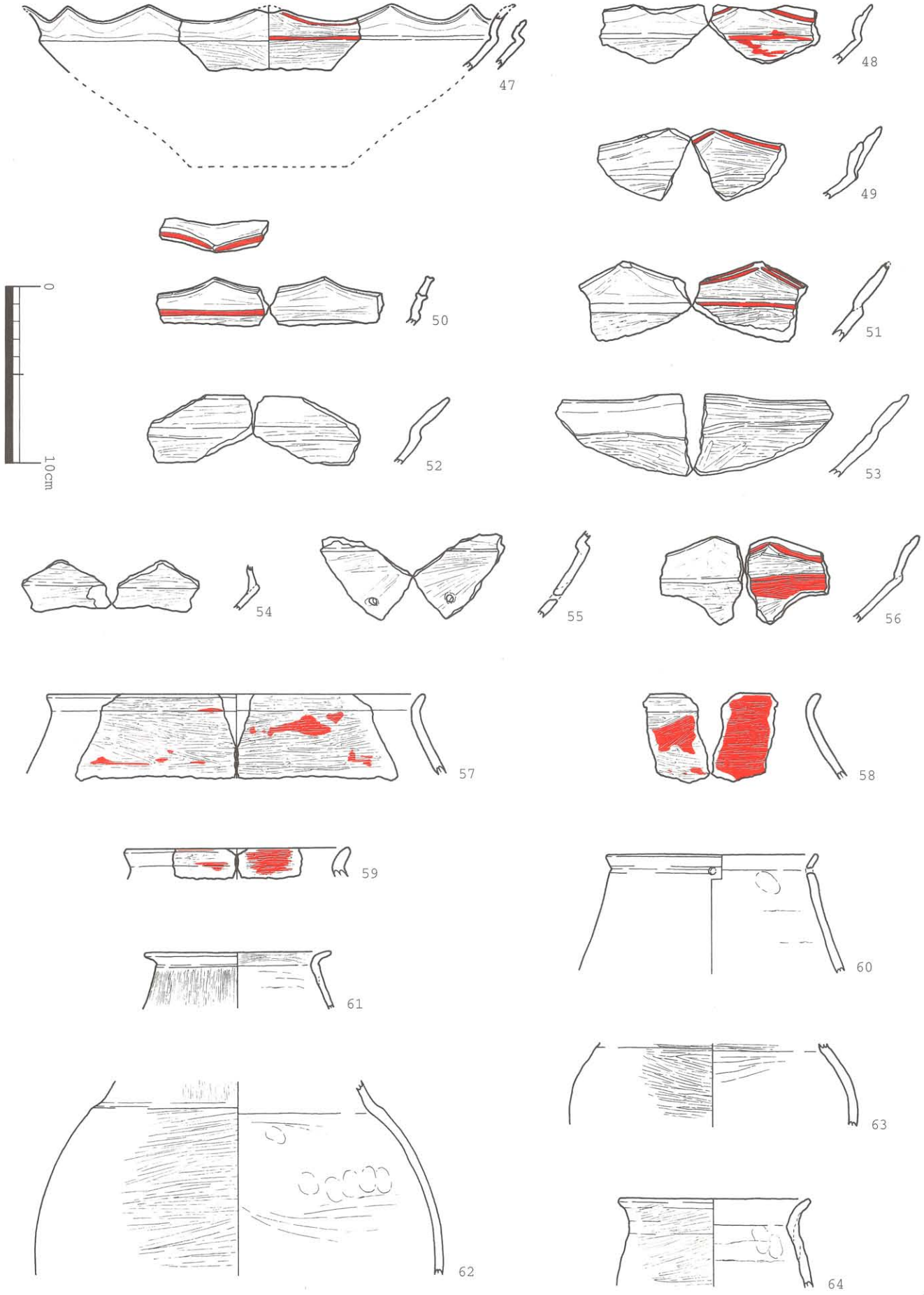
第１表　ＳＲ０１Ｅ層出土土器観察表①



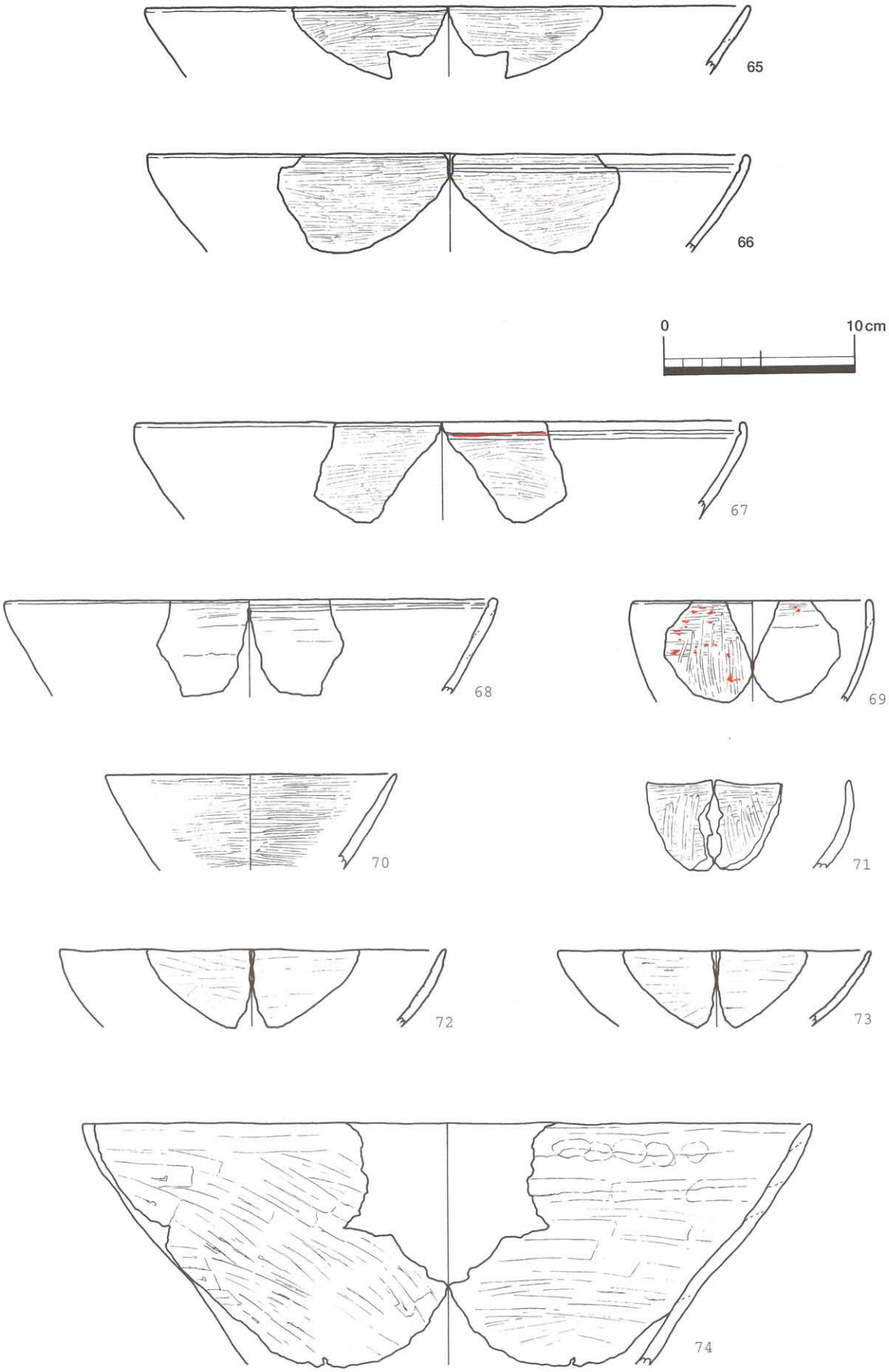
第12図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図⑥（縮尺1/3）



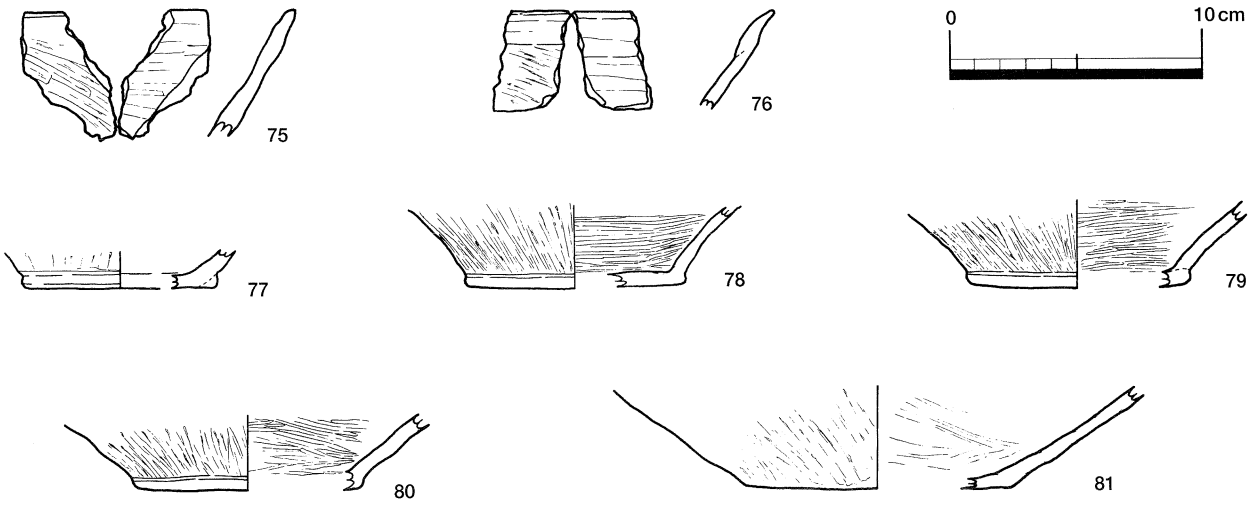
第13図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図⑦（縮尺1/3）



第14図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図⑧（縮尺1/3）



第15図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図⑨（縮尺1/3）



第16図　ＳＲ０１Ｅ層出土土器実測図⑩（縮尺1/3）

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土
23	縄文土器　深鉢 体部	25.4		(6.4)	外面:煤付着，ナデ，頸体部境:沈線1条 内面:ナデ	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y3/1黒褐色	2mm以下の長石，石英を含む
24	縄文土器　壺？ 体部	49.0		(13.2)	外面:煤付着，頸部:ナデ，体部:細かいナデ 内面:ナデ，頸体部境:指おさえ	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y7/2灰黄色～5/2暗灰黄色	3mm以下の長石，石英を含む
25	縄文土器　深鉢？体部	55.2		(39.0)	外面:ケズリ(条痕) 内面:ナデ	外面:N2/0黒色～2.5Y6/3にぶい黄色 内面:7.5YR2/1黒色	3mm以下の長石，石英，少量の金雲母を含む
26	縄文土器　深鉢			(3.9)	外面:煤付着 内面:ナデ	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y3/1黒褐色	3mm以下の長石を少量含む
27	縄文土器　深鉢？			(4.2)	外面:ナデ，煤付着，波状口縁頂部に3カ所の刻目 内面:ナデ，口縁部沈線1条	外面:N2/0黒色 内面:7.5Y2/1黒色	1mm以下の長石，石英を少量含む
28	縄文土器　深鉢			(5.3)	外面:ナデ，口縁端部:刻目，頸部:斜行沈線文 内面:ナデ，接合痕，黒斑	外面:2.5Y2/1黒色 内面:2.5Y7/1灰黄色～2/1黒色	2mm以下の長石，石英を含む
29	縄文土器　深鉢			(3.2)	外面:煤付着，ナデ 内面:ナデ	外面:N2/0黒色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色	2mm以下の長石，石英を少量含む
30	縄文土器　深鉢			(3.8)	外面:煤付着，ナデ，接合痕 内面:ナデ	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y3/1黒褐色	2mm以下の長石，石英を含む
31	縄文土器　深鉢			(4.0)	外面:煤付着，ナデ 内面:口縁部:沈線1条，ナデ，接合痕	外面:2.5Y4/1黄灰色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色	2mm以下の長石，石英を含む
32	縄文土器　深鉢			(5.2)	波状口縁，外面:口頸部:ナデ，頸部:工具痕，体部:条痕 内面:ナデ	外面:2.5Y5/2暗灰黄色 内面:2.5Y3/1黒褐色	2mm以下の長石，少量の雲母，角閃石を含む
33	縄文土器片			(2.6)	外面:沈線，縄文 内面:磨滅	外面:2.5Y6/2灰黄色 内面:5Y3/1オリーブ黒色	2mm以下の長石，石英を含む
34	縄文土器　浅鉢	31.6		(8.8)	外面:口頸部境:赤色顔料付着，頸部:ミガキ(黒色研磨)，頸体部境:沈線2条，赤色顔料付着　内面:口頸部境:沈線に赤色顔料付着，ナデ，条痕，接合痕	外面:2.5Y3/1黒褐色　顔料色:7.5R4/6赤色 内面:7.5Y2/1黒色～2.5Y5/2暗灰黄色	2mm以下の長石，石英を少量含む
35	縄文土器　浅鉢	36.0		(5.1)	外面:口縁部:ナデ，頸部:ミガキ(黒色研磨)，口頸部境:弱い沈線(段状) 内面:ミガキ(黒色研磨)，口頸部境:沈線，赤色顔料付着	外面:N2/0黒色 内面:N2/0黒色　顔料色:7.5R4/6赤色	2mm以下の長石，石英を少量含む
36	縄文土器　浅鉢	33.0		(10.6)	外面:口縁部:ナデ，頸部:ミガキ(黒色研磨)，体部:荒いミガキ(黒色研磨)口頸部，頸体部境:弱い沈線(段状)　内面:ミガキ(黒色研磨)，口頸部境:沈線	外面:N2/0黒色～2.5Y3/1黒褐色 内面:N2/0黒色	2mm以下の長石，石英を含む
37	縄文土器　浅鉢	29.0		(19.5)	外面:ミガキ(黒色研磨)，口頸部，頸体部境:沈線，波状口縁頂部に刻目3カ所 内面:ミガキ(黒色研磨)，口頸部境:沈線	外面:5Y2/1黒色～2.5Y4/1黄灰色 内面:5Y2/1黒色～2.5Y4/1黄灰色	やや密，1mm以下の長石，石英を少量含む
38	縄文土器　浅鉢	34.9		(9.7)	外面:ミガキ(黒色研磨)，口頸部，頸体部境沈線及び波状口縁頂部刻目3カ所に赤色顔料付着 内面:ミガキ(黒色研磨)，口頸部境沈線に赤色顔料付着	外面:5Y2/1黒色～2.5Y6/2灰黄色 内面:5Y2/1黒色　顔料色:7.5R4/6赤色	やや密，1mm以下の長石，石英を少量含む
39	縄文土器　浅鉢	34.0		(9.0)	外面:口頸部:ミガキ(やや弱い黒色研磨)，頸体部境:沈線，体部:荒い研磨 内面:ミガキ(やや弱い黒色研磨)	外面:5Y2/1黒色～2.5Y6/2灰黄色 内面:5Y2/1黒色～2.5Y6/2灰黄色	1mm以下の長石を少量含む
40	縄文土器　浅鉢	35.0		(5.0)	外面:ミガキ(やや弱い黒色研磨)，口頸部境:弱い沈線 内面:ミガキ(やや弱い黒色研磨)	外面:5Y2/1黒色～5Y6/2灰オリーブ色 内面:5Y2/1黒色～5Y6/2灰オリーブ色	2mm以下の長石，石英を少量含む
41	縄文土器　浅鉢	34.0		(6.8)	外面:ミガキ(やや弱い黒色研磨)，頸体部境:沈線 内面:ミガキ(やや弱い黒色研磨)	外面:5Y2/1黒色～2.5Y6/2灰黄色 内面:5Y2/1黒色～2.5Y6/2灰黄色	1mm以下の長石を少量含む
42	縄文土器　浅鉢	30.0		(8.3)	外面:ミガキ(やや弱い黒色研磨)，頸体部境:弱い沈線，体部:荒い研磨 内面:ミガキ(やや弱い黒色研磨)	外面:5Y2/1黒色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:5Y2/1黒色～5Y3/2灰オリーブ黒色	1mm以下の長石を少量含む
43	縄文土器　浅鉢	29.2		(3.8)	外面:煤付着，頸体部境:沈線 内面:煤付着，口頸部境:沈線	外面:N2/0黒色 内面:N2/0黒色	1mm以下の長石を少量含む
44	縄文土器　浅鉢	29.2		(2.4)	外面:ミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨)	外面:2.5Y2/1黒色～5/2暗灰黄色 内面:2.5Y2/1黒色	1mm以下の長石を少量含む
45	縄文土器　浅鉢	28.0		(4.0)	外面:ナデ，ミガキ 内面:ミガキ，口縁部:肥厚，沈線1条	外面:5Y4/1灰色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:5Y4/1灰色～3/1オリーブ黒色	1mm以下の長石，石英を含む
46	縄文土器　浅鉢 体部	体径 27.2		(4.5)	外面:ミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨)	外面:5Y2/1黒色 内面:N2/0黒色	1mm以下の長石を少量含む

第２表　ＳＲ０１Ｅ層出土土器観察表②

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土
		口径	底径	器高			
47	縄文土器 浅鉢	28.0		(3.5)	外面:口頸部:ナデ, 体部:荒いミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨), 口頸部境, 頸体部境に沈線, 赤色顔料付着	外面:N2/0黒色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:N2/0黒色, 顔料色:7.5R4/6赤色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
48	縄文土器 浅鉢			(3.4)	外面:口頸部:ナデ, 体部:荒いミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨), 口頸部境の沈線と体部に赤色顔料付着	外面:N2/0黒色 内面:2.5YR5/1黄灰色～2/1黒色, 顔料色:10R5/6赤色	1mm以下の長石を少量含む
49	縄文土器 浅鉢			(4.0)	外面:口頸部:ナデ, 体部:荒いミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨), 口頸部境, 頸体部境に沈線, 赤色顔料付着	外面:2.5Y3/1黒褐色～2/1黒色 内面:2.5Y2/1黒色, 顔料色:7.5R4/6赤色	1mm以下の長石を少量含む
50	縄文土器 浅鉢			(2.8)	外面:口頸部境, 頸体部境に沈線, 赤色顔料付着, ナデ, 煤付着 内面:ナデ, 黒斑	外面:2.5Y3/1黒褐色 内面:2.5Y5/1黄灰色, 顔料色:7.5R4/6赤色	1mm以下の長石を少量含む
51	縄文土器 浅鉢			(4.5)	外面:口頸部:ナデ, 体部:荒いミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨), 口頸部境, 頸体部境に沈線, 赤色顔料付着	外面:2.5Y3/1黒褐色 内面:2.5Y3/1黒褐色, 顔料色:7.5R4/6赤色	2mm以下の長石, 石英を含む
52	縄文土器 浅鉢			(3.8)	外面:ミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨)	外面:N2/0黒色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:5Y2/1黒色	2mm以下の長石, 石英, 角閃石を少量含む
53	縄文土器 鉢			(4.6)	外面:口頸部:ナデ, 煤付着, 体部:細かいナデあるいは黒色研磨 内面:ミガキ(黒色研磨), 口頸部, 頸体部境:沈線	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y2/1黒色～4/1黄灰色	4mm以下の長石, 長石を少量含む
54	縄文土器 浅鉢 体部片			(2.7)	外面:ミガキ 内面:ミガキ	外面:2.5Y5/1黄灰色 内面:5Y4/1灰色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
55	縄文土器 浅鉢 体部片			(4.8)	外面:ミガキ 内面:ミガキ　穿孔1カ所	外面:5Y5/1灰色～2.5Y7/3浅黄色 内面:2.5Y5/1黄灰色～6/3にぶい黄色	やや密, 1mm以下の長石, 石英, 雲母を少量含む
56	縄文土器 浅鉢			(4.8)	外面:口頸部:ナデ, 体部:荒いミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨), 口頸部境の沈線と体部に赤色顔料付着	外面:N2/0黒色～2.5Y3/1黒褐色 内面:2.5Y3/1黒褐色, 顔料色:7.5R4/6赤色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
57	縄文土器 浅鉢	21.5		(4.5)	外面:ミガキ(黒色研磨), 赤色顔料付着 内面:ミガキ(黒色研磨), 赤色顔料付着	内, 外面:7.5Y3/1オリーブ黒色～10Y2/1黒色 顔料色:外:2.5YR4/6赤褐色, 内:10Y4/6赤色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
58	縄文土器 浅鉢			(4.8)	外面:ミガキ(黒色研磨), 赤色顔料付着 内面:ミガキ(黒色研磨), 赤色顔料付着	内, 外面:7.5Y3/1オリーブ黒色～10Y2/1黒色 顔料色:外:2.5YR4/6赤褐色, 内:10Y4/6赤色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
59	縄文土器 壺	12.7		(1.7)	外面:ミガキ(黒色研磨), 赤色顔料付着 内面:ミガキ(黒色研磨), 赤色顔料付着	内, 外面:10Y2/1黒色 顔料色:外:2.5YR4/6赤褐色, 内:10Y4/6赤色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
60	縄文土器 壺	11.8		6.7	外面:ナデ 内面:ナデ, 指おさえ, 接合痕　口頸部境:穿孔1カ所	外面:2.5Y6/2灰黄色 内面:5Y6/2灰オリーブ色	やや密, 雲母, 角閃石を少量含む
61	縄文土器 壺	10.6		(3.2)	外面:口縁部:ナデ, 頸部:縦方向ミガキ(黒色研磨) 内面:口縁部:ミガキ(黒色研磨), 頸部:ナデ, 接合痕	外面:2.5Y3/1黒褐色～N2/0黒色 内面:2.5Y3/1黒褐色～N2/0黒色	やや密, 1mm以下の長石, 石英を少量含む
62	縄文土器 壺 体部片	体径 23.0		(11.0)	外面:頸部:縦方向ミガキ(黒色研磨), 体部:横方向ミガキ(やや弱い黒色研磨) 内面:ナデ, 指おさえ	外面:2.5Y5/1黄灰色～N2/0黒色 内面:2.5Y4/3オリーブ褐色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
63	縄文土器 壺 体部片	体径 16.4		(4.7)	外面:横方向ミガキ(やや弱い黒色研磨) 内面:ナデ	外面:2.5Y5/2暗灰黄色 内面:2.5Y3/1黒褐色	1mm以下の長石を少量含む
64	縄文土器 壺	10.6		(5.0)	外面:ナデ, 荒いミガキ 内面:ナデ, 指おさえ, 接合痕, 黒斑	外面:2.5Y3/1黒褐色～ 5/1黄灰色 内面:2.5Y7/2灰黄色～3/1黒褐色	4mm以下の長石, 石英, 少量の角閃石を含む
65	縄文土器 浅鉢	31.0		(3.5)	外面:ミガキ(弱い黒色研磨), 接合痕 内面:ミガキ(弱い黒色研磨)	外面:2.5Y5/1黄灰色～N2/0黒色 内面:2.5Y4/1黄灰色～2.5Y6/2灰黄色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
66	縄文土器 浅鉢	31.2		(5.0)	外面:ミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨), 口縁部:沈線	外面:5Y6/1灰色～N2/0黒色 内面:5Y2/1黒色～N2/0黒色	1mm以下の長石を少量含む
67	縄文土器 浅鉢	31.4		(5.1)	外面:ミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨), 口縁部沈線に赤色顔料付着	外面:N2/0黒色 内面:5Y2/1黒色～N2/0黒色　顔料色:10R4/6赤色	1mm以下の長石, 金雲母, 角閃石を少量含む
68	縄文土器 浅鉢	25.0		(4.9)	外面:磨滅, ナデ, 接合痕, 炭素吸着 内面:磨滅, ナデ	外面:N2/0黒色～2.5Y5/2暗灰黄色 内面:2.5Y4/1黄灰色	2mm以下の長石, 雲母, 角閃石を含む
69	縄文土器 鉢	12.0		(5.2)	外面:ミガキ(黒色研磨), 赤色顔料付着 内面:磨滅, 接合痕	外面:2.5Y3/1黒褐色～N2/0黒色 内面:2.5Y3/1黒褐色 顔料色:10R5/6赤色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
70	縄文土器 鉢	15.0		(4.9)	外面:ミガキ 内面:ミガキ	外面:2.5Y6/2灰黄色～4/1黄灰色 内面:2.5Y6/3にぶい黄色～6/2灰黄色	1mm以下の長石, 石英, 雲母, 角閃石を含む
71	縄文土器 鉢			(4.5)	外面:ミガキ(黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨)	外面:N2/0黒色～2.5Y4/1黄灰色 内面:N2/0黒色	やや密, 1mm以下の長石を少量含む
72	縄文土器 鉢	20.0		(4.0)	外面:ナデ, ケズリ 内面:ナデ	外面:2.5Y6/3にぶい黄色 内面:2.5Y6/3にぶい黄色～5/2暗灰黄色	1mm以下の長石を少量含む
73	縄文土器 鉢	16.2		(4.0)	外面:ナデ, ケズリ 内面:ナデ	外面:2.5Y5/2暗灰黄色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色	1mm以下の長石を含む
74	縄文土器 鉢	37.8		(12.5)	外面:口縁部:煤付着, ナデ, 体部:ケズリ(条痕) 内面:口縁部:ナデ, 指おさえ, 体部:煤付着, 板状工具によるナデ	外面:2.5Y5/4にぶい黄色～N2/0黒色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色～2.5Y4/1黄灰色	5mm以下の長石を含む
75	縄文土器 鉢			(5.1)	外面:煤付着, 口縁部:ナデ, 体部:ケズリ 内面:ナデ	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色～2.5Y4/1黄灰色	3mm以下の長石, 石英を含む
76	縄文土器 鉢			(3.8)	外面:煤付着, 口縁部:ナデ, 体部:ケズリ 内面:ナデ, 接合痕	外面:N2/0黒色 内面:2.5Y5/2暗灰黄色～2.5Y3/1黒褐色	3mm以下の長石, 石英を含む
77	縄文土器 底部		7.6	(1.5)	外面:ケズリ～ミガキ(荒い黒色研磨) 内面:煤付着	外面:N2/0黒色～2.5Y6/1黄灰色 内面:N2/0黒色	2mm以下の長石, 石英を含む
78	縄文土器 底部		8.4	(3.1)	外面:ケズリ～ミガキ(荒い黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨)	外面:2.5Y 3/1黒褐色 内面:N2/0黒色 ～2.5Y6/3にぶい黄色	2mm以下の長石, 石英を少量含む
79	縄文土器 底部		8.8	(3.4)	外面:ケズリ～ミガキ(荒い黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨)	外面:2.5Y6/3にぶい黄色 ～5/1黄灰色 内面:2.5Y6/2灰黄色～3/1黒褐色	2mm以下の長石, 石英を少量含む
80	縄文土器 底部		9.2	(3.0)	外面:ケズリ～ミガキ(荒い黒色研磨) 内面:ミガキ(黒色研磨)	外面:5Y3/1オリーブ黒色～2.5Y6/3にぶい黄色 内面:N2/0黒色	1mm以下の長石を少量含む
81	縄文土器 底部		10.6	(4.1)	外面:ケズリ 内面:煤付着, ナデ	外面:2.5Y4/1黄灰色～10YR6/3にぶい黄橙色 内面:2.5Y4/1黄灰色～N2/0黒色	2mm以下の長石, 長石, 少量の角閃石を含む

第３表　ＳＲ０１Ｅ層出土土器観察表③

旧河道ＳＲ０１Ｅ層出土石器（第17～20図，第４表）

Ｓ１は，結晶片岩製の石棒で，横断面はやや偏平な楕円形である。Ｓ２は磨石である。Ｓ３は石錘で，両端部に窪み状の切目がある。

Ｓ４～S14は，打製石斧または石鍬である。

Ｓ４は大形の打製石斧で，先端部が欠損したもの。基部の先端には，自然面が残る。両側縁部に敲打痕が見られるが，片側は抉り状となり，その上面に弱い磨滅が見られる。Ｓ５はやや小形の完形品で，基部先端が切断され形状が台形となっている。両側縁部は潰されるが，背面の左側面に自然面が一部残り，敲打痕が顕著に見られる。先端部は両面に剥離痕が見られ，磨耗した刃部を再生したものと考えられる。Ｓ７の先端部片もＳ６同様と考えられる。Ｓ８も完形品で，両面の刃部先端付近が磨滅しているが，腹面側は線条痕を伴い磨滅が著しい。

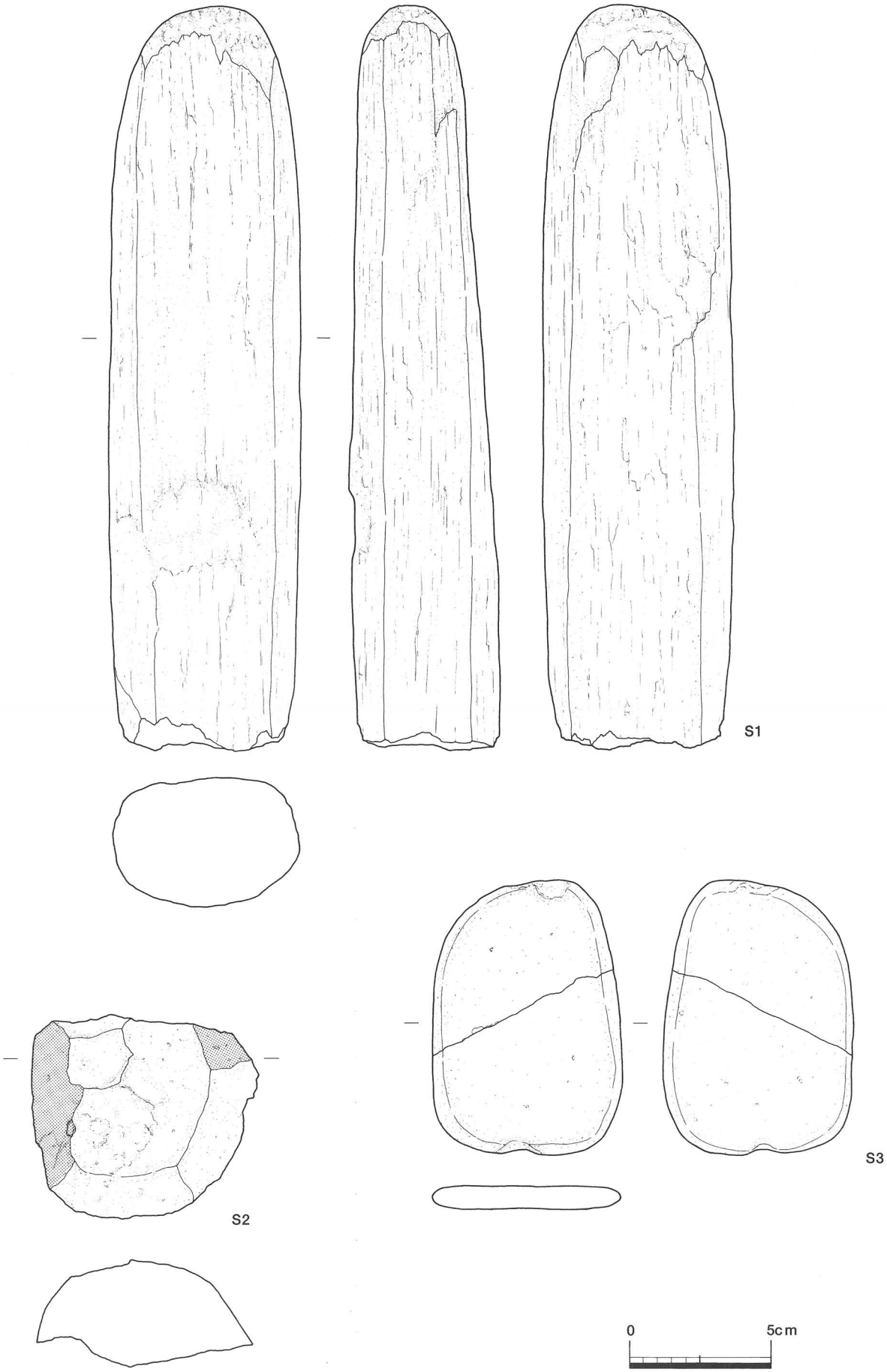
Ｓ９は，Ｓ６同様の形態をもつもので，S10と接合する。Ｓ９＋S10の背面側は，ほぼ一面に自然面を残すが，S10先端部の剥離痕が磨滅していることから，Ｓ９より一回り大きな石鍬であったと考えられる。S10は，背面の左側面からほぼ石の目に沿って剥離されている。この剥離後もＳ９の刃部に線条痕・磨滅痕が両面に見られることから，石鍬として使用されており，本遺跡近辺で使用と破棄が行われたと考えられる。Ｓ８も先端部が磨滅，腹面に大きな左方向からの剥離痕が見られることから，S10と同様の刃部再生片と考えられる。

S11～S14は，形態から打製石斧の基部と考えたが，S14は薄手で箆状の形をするもので，側縁部から裁断されている。S15は楔形石器である。S16は元来，打製石斧の基部と考えられるが，片方の側縁が裁断され，またその面が打面として敲打されている。

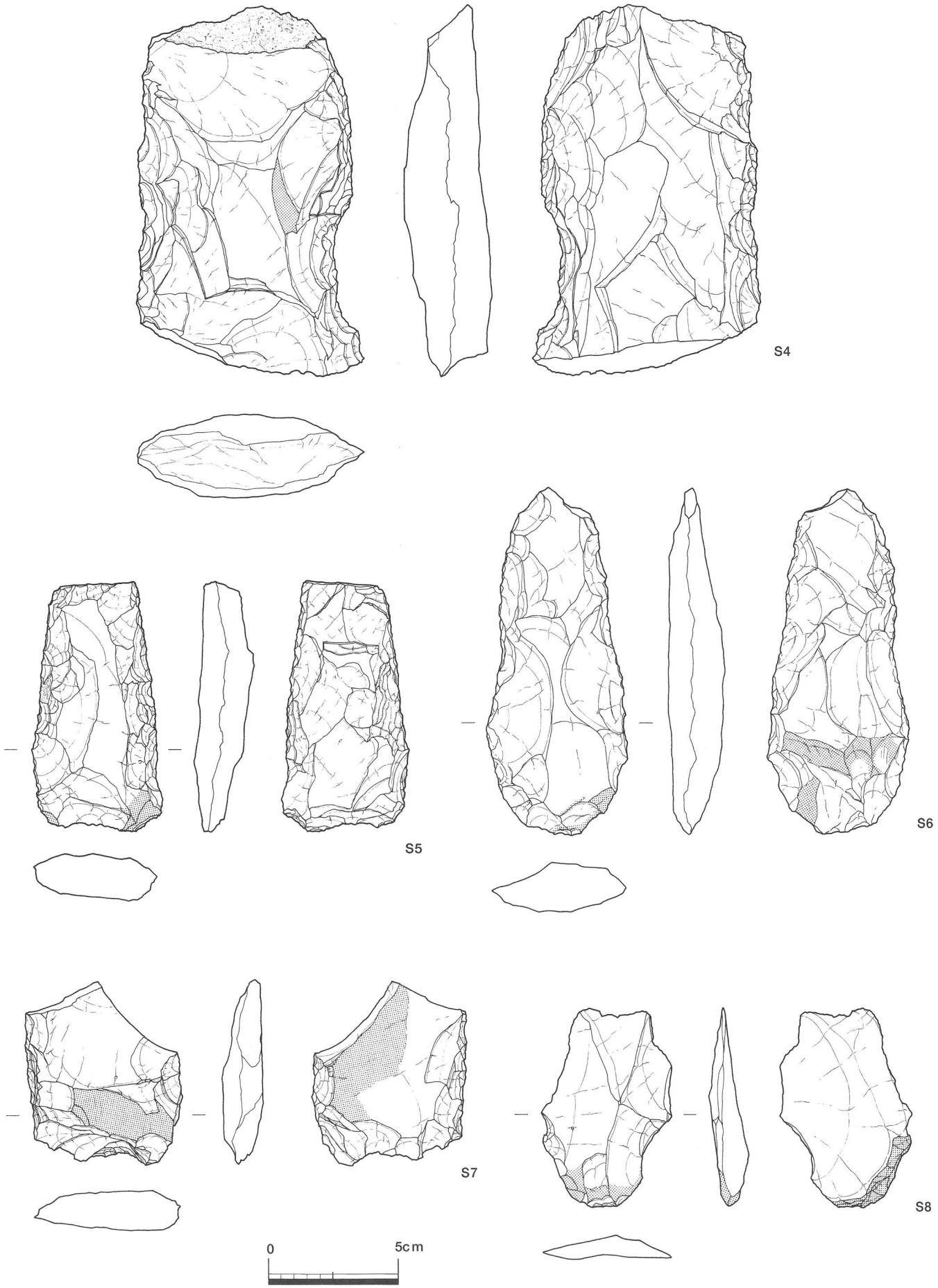
S17・18はスクレイパーである。S18は，刃部と上端部の両面に調整痕が見られ，打製石斧の転用品と考えられる。S19は大形の横長剥片で，背面に自然面と横長及び縦長の剥離痕が認められる。縁部には微細な剥離が一部見られる。S20は縦長のサイドスクレイパーで，背面ほぼ一面に自然面を残し，縁部両面に連続した調整痕が認められる。

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考
S1	石棒	26.3	6.7	4.6	約1,620	結晶片岩	基部欠損。横断面:偏平。
S2	磨石	7.2	8.0	3.7	284.9	砂岩	側面部が磨滅。
S3	石錘	9.7	6.7	0.8	99.3	火山岩？	両端部に切目。
S4	打製石斧 基部	14.1	8.6	3.1	475.2	サヌカイト	基部:自然面を残す，先端部:折れ，側縁部:抉り，上面に弱い磨耗。
S5	打製石斧	9.6	4.9	2.0	118.9	サヌカイト	刃部先端が抉り状に剥離。先端部:折損。
S6	打製石斧	13.3	5.3	2.1	149.5	サヌカイト	先端部:線条痕・磨耗
S7	打製石斧 先端部	7.0	5.7	1.5	67.3	サヌカイト	線条痕・磨耗
S8	打製石斧 先端部	7.6	5.1	0.9	29.5	サヌカイト	線条痕・磨耗，刃部再生剥片？
S9	打製石斧	11.0	5.5	1.6	99.4	サヌカイト	S10と接合。先端部:線条痕・磨耗，基部:自然面を残す。
S10	打製石斧 刃部	5.3	9.2	0.7	34.5	サヌカイト	S9と接合，刃部再生剥片。背面:自然面を残す，磨耗。
S11	打製石斧 基部	7.1	5.4	1.4	76.2	サヌカイト	自然面を残す，先端部:折損。
S12	打製石斧 基部	7.4	4.6	1.5	55.0	サヌカイト	先端部:折損。
S13	打製石斧 基部	10.4	5.9	2.0	13.5	サヌカイト	先端部:折損。
S14	打製石斧 基部？	8.1	6.6	1.0	80.9	サヌカイト	薄手，自然面を残す，先端部:裁断
S15	楔形石器	5.0	6.2	1.5	58.9	サヌカイト	自然面を残す。
S16	楔形石器	6.4	6.4	2.0	134.3	サヌカイト	裁断面に敲打痕あり。
S17	スクレイパー	8.1	4.5	0.6	27.6	サヌカイト	側縁部:自然面を残す。
S18	スクレイパー	11.2	6.7	1.6	147.6	サヌカイト	両側縁部:折損，打製石斧から転用？
S19	横長剥片	5.2	12.5	1.2	92.2	サヌカイト	背面:自然面を残す，縦，横方向の剥離痕。
S20	スクレイパー	15.2	4.2	0.8	64.7	サヌカイト	縦長剥片，縁部に微細な剥離痕，背面:自然面を残す。

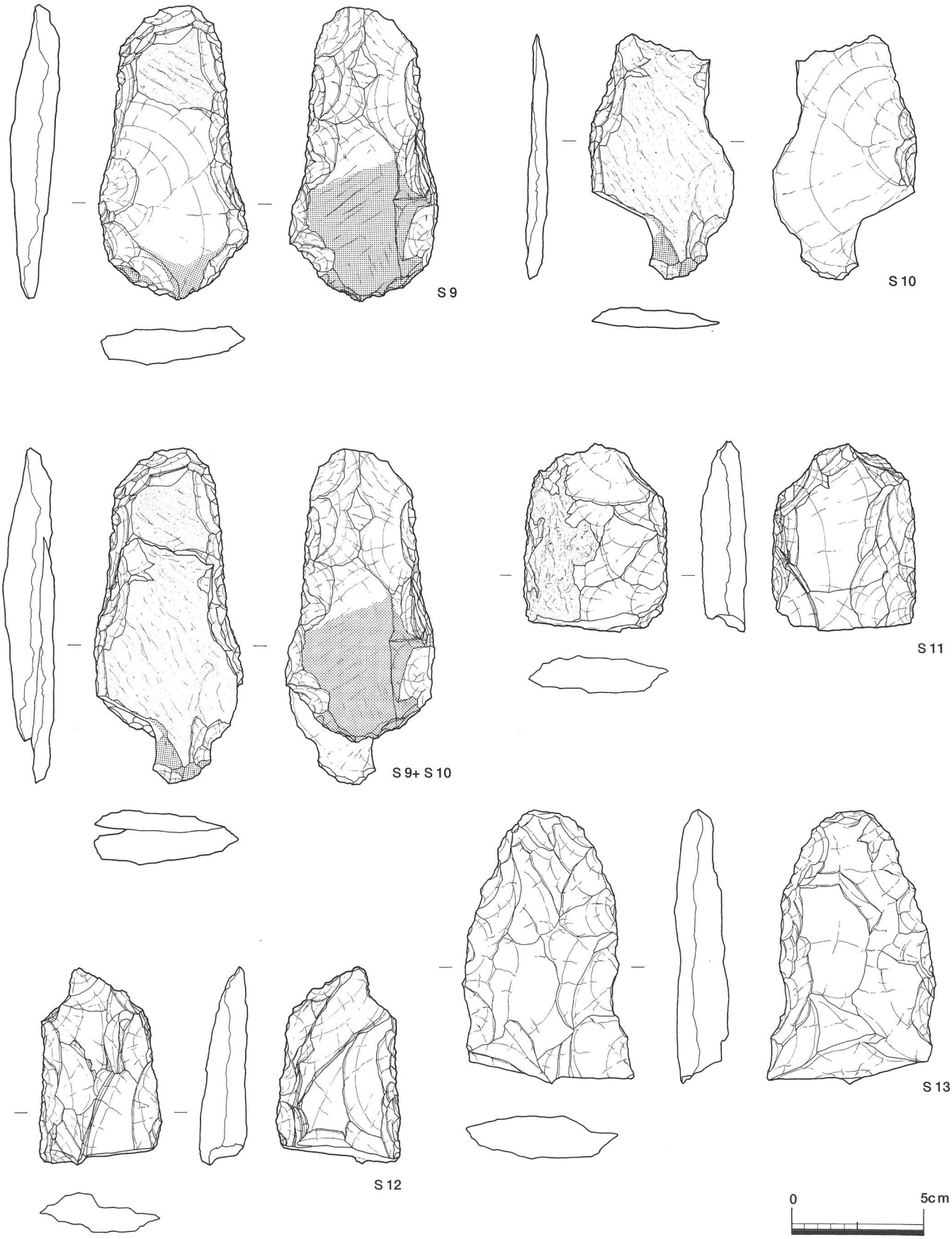
第４表　ＳＲ０１Ｅ層出土石器観察表



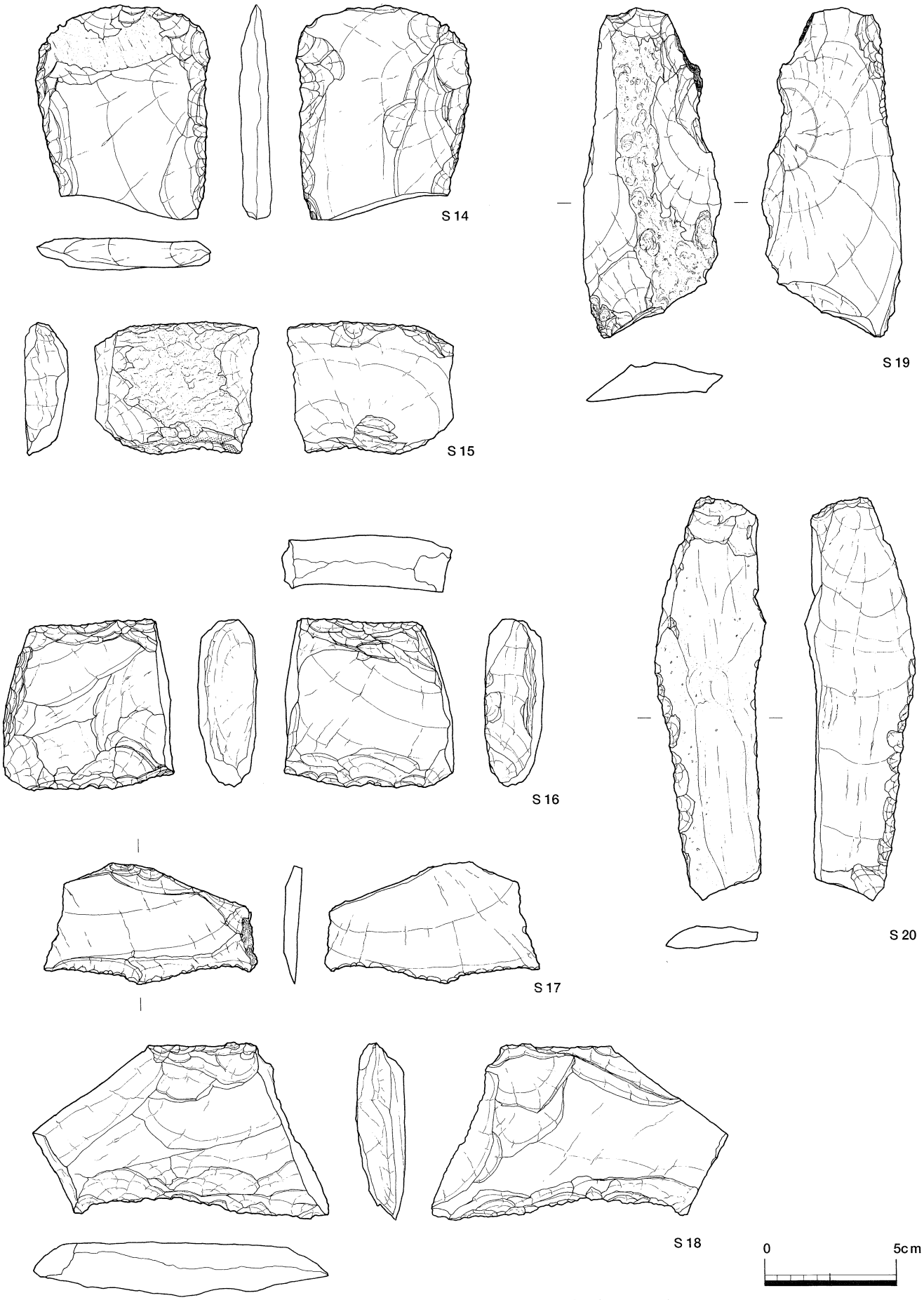
第17図　ＳＲ０１Ｅ層出土石器実測図①（縮尺1/2）



第18図　ＳＲ０１Ｅ層出土石器実測図②（縮尺1/2）



第19図　ＳＲ０１Ｅ層出土石器実測図③（縮尺1/2）



第20図　ＳＲ０１Ｅ層出土石器実測図④（縮尺1/2）

第４節 縄文時代晩期末～弥生時代の遺構・遺物

大畦畔（第21・22図）

Ｓ区第２遺構面，流路の北岸に沿って検出された南北方向の畦畔である。幅0.7m前後の帯状に検出したもので，比較的規模の大きいものである。検出レベルは標高5.56～5.65mで，地形に沿って東側が低い。この畦畔は，湿地状の堆積層であるB層上部に見られ，耕作土層とした⑥－1層では10㎝程度の隆起が認められる。

大畦畔を構成する⑥－2層は，遺物を多く包含し固くしまった堆積層で，調査区の東壁では流路側に傾いている。なお，微高地上の⑥－1層や流路埋土A・B層において遺物の出土はほぼ皆無であるのに対し，大畦畔を構成する⑥－2層に遺物が集中する要因は，人が歩きやすいように畦畔を固めるのが目的だった可能性が指摘できる。

さらに，調査時において，畦畔北側に溝の存在を想定した。これは，大畦畔を築造した時や維持管理時に，溝さらえの排土を北側から畦畔上に盛ったものと推測したからであるが，溝北側の肩部付近は後世の撹乱等により遺構面の遺存状態が悪く，平・断面で溝跡を確認できなかった。

また，後述するN区で検出した小区画水田の畦畔とは繋がっておらず，その土質も若干異なるため，Ｓ区の大畦畔とＮ区の小畦畔が同時並存したかは不明である。土層の堆積状況から推察すれば，双方に⑤層が被覆しており，また層序では大畦畔が下位に位置することから，大畦畔に長期的な存続時期が考えられ，大畦畔の存続時期に小畦畔が存在した可能性も考えられる。

６－②層出土遺物

遺物はコンテナに２箱程度出土しているが，風化や磨滅が激しく図化できるものは少ない。土器は河川内堆積層のE層の出土品に比べ，橙色やにぶい黄色を呈するものが多い。突帯文も全体的に小さく，弥生土器も含まれることから縄文時代晩期末～弥生時代前期前葉のものと考えられる。石器は，打製石斧の破損品が目立つのは変わらないが，これに加え石鏃，石小刀，磨製石斧が見られる。スクレイパーとしたＳ５・６は，石庖丁とも考えられるが明確ではない。

６－②層出土土器（第23・24図，第５表）

１・２は縄文土器深鉢である。１は橙色を呈するもので，断面蒲鉾形の突帯にD形の刻目が施される。２はにぶい黄橙色を呈し，やや細長い突帯に小さな刻目を施す。

３・４は縄文土器浅鉢である。いずれも内面に口頸部境，頸体部境に沈線若しくは沈線状の段をもつ。

５は弥生土器壺である。橙色を呈し，粗い砂礫を多く含む。

６～９は底部である。６・９は精製のもので縄文土器浅鉢の底部と考えられる。７は黄橙色を呈する弥生土器壺の底部と考えられ，胎土には粗い砂礫を多く含む。

10～13は縄文土器深鉢の口縁部である。10は口縁部に近接して突帯が貼り付けられ，浅いD形の刻目を施す。11は頸部から口縁部へと外反するもので，突帯は下がった位置に貼付けられており，その刻目は小さい。12の口縁端部には浅い刻目が施される。13は，内傾する頸部に沈線文が施される。14は，３・４と同系と考えられる縄文土器浅鉢の口縁部である。15は口縁部が波状となるが，胎土に砂礫を多く含み器面が粗製であることから縄文土器深鉢と考えられる。

16は弥生土器壺の頸部である。横方向の沈線と木葉文が認められる。

６－②層出土石器（第25・26図，第６表）

Ｓ１・２は，それぞれ凹基，平基無茎の石鏃である。Ｓ３は石小刀である。

Ｓ４～６は，スクレイパーである。Ｓ５は両側縁部が切断されているが，Ｓ６と同様に刃部・背部に両面からの剥離痕・調整痕が見られる。Ｓ８は楔形石器である。

Ｓ７は，小形の磨製石斧である。蛇文岩製で，基部の横断面は偏平な楕円形となる。基部先端が欠損しているが，刃部に対して幅の狭いものと推定される。

Ｓ9～Ｓ12は，摩耗が認められる打製石斧の先端部である。Ｓ11は，側縁部からの打撃によって裁断されている。

Ｓ13＋Ｓ14は，接合資料である。最初に背面の右側縁部であるＳ13の左側縁部から敲打した調整がある。腹面側を打面とし，Ｓ13を打ち剥がしている。背面の左側縁に加工を行った後，下部を折損している。Ｓ13＋Ｓ14は石核の可能性もあるが，形態からＳ12のような大形石斧と想定され，石斧の未製品と考えられる。

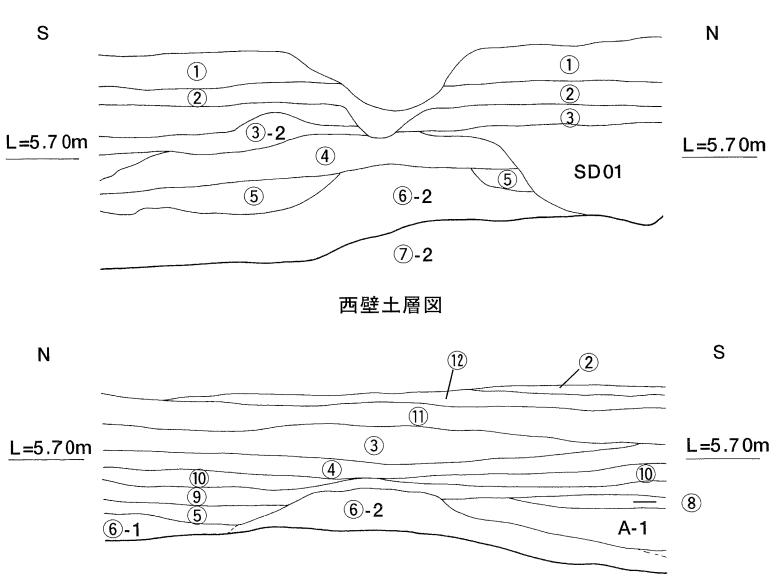
西壁土層図

0　2.5m

N

東壁土層図

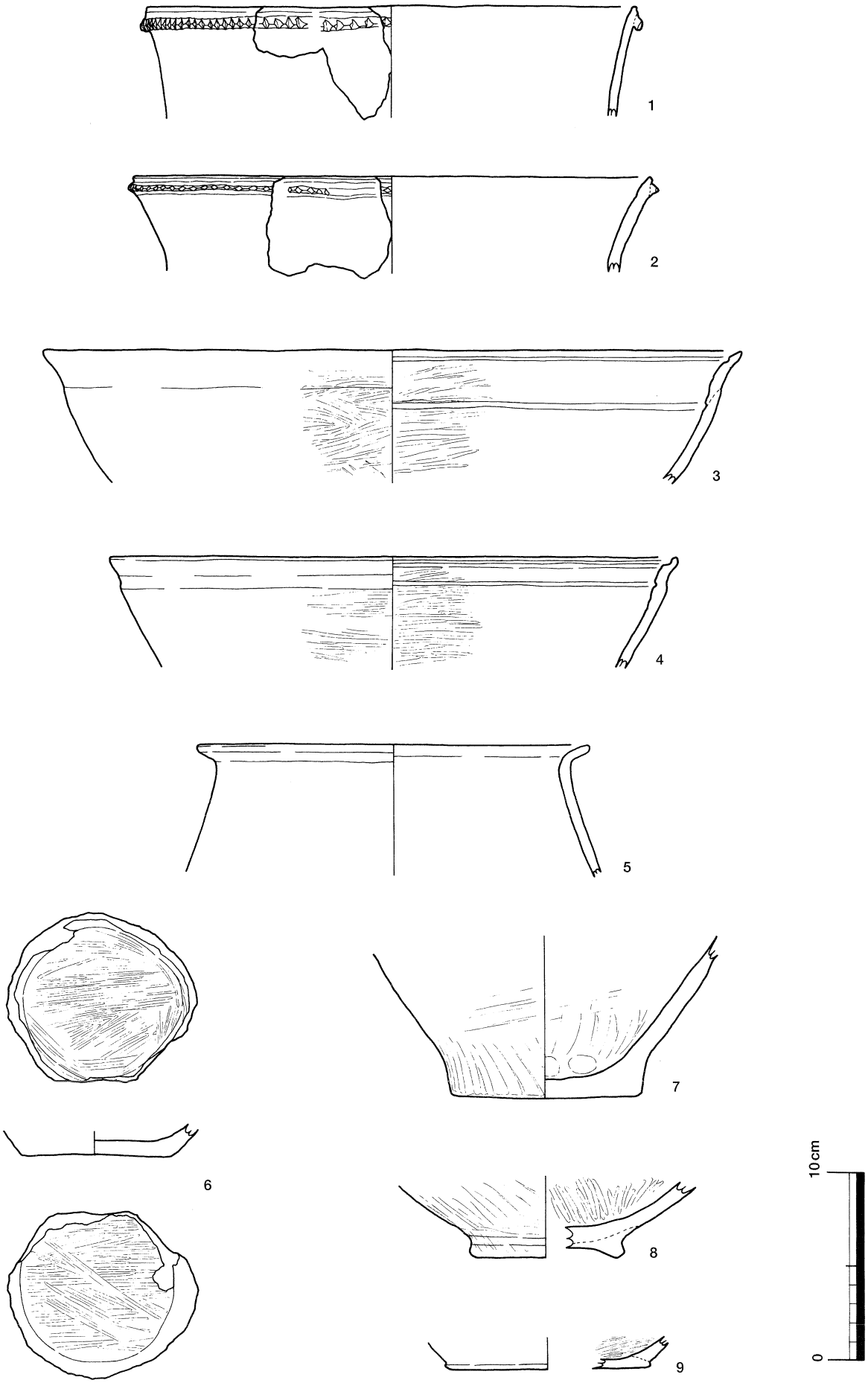
第21図　S区第2面畦畔平面図（縮尺1/100）



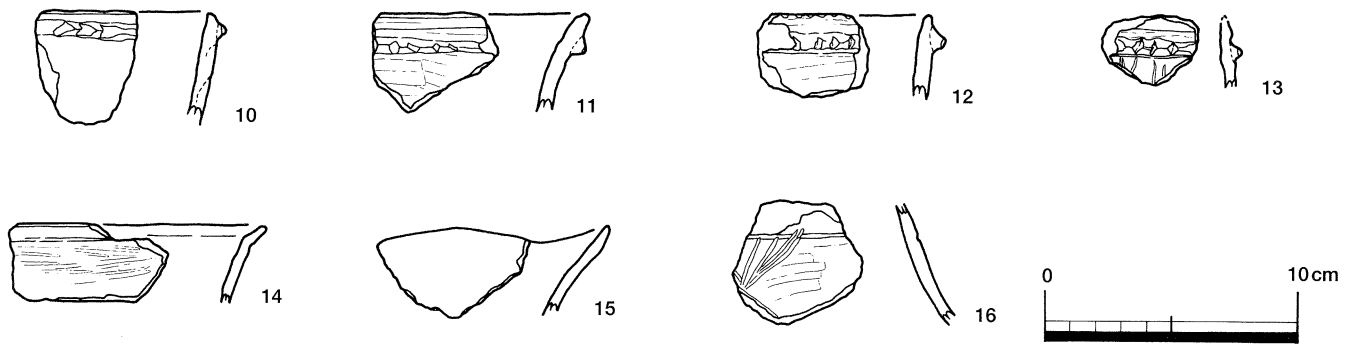
①：現耕作土
②：5Y6/4 オリーブ黄色シルト質極細砂
③：2.5Y5/2 暗灰黄色シルト～シルト質極細砂
③-2：2.5Y6/1 黄灰色シルト質極細砂
④：2.5Y5/3 黄褐色シルト質極細砂（Fe沈着）
⑤：10YR4/1 褐灰色極細砂（Fe沈着）
⑥-2：7.5YR 1.7黒色 シルト質粘土（かたくしまる遺物包含）
⑦-2：10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
⑧：5Y6/4 オリーブ黄色シルト
⑨：7.5YR4/2 灰褐色シルト（Fe沈着）
⑩：10YR6/1 褐灰色シルト
⑫：2.5Y6/2 灰黄色シルト～シルト質粘土
A-1：7.5YR4/2 灰褐色シルト～シルト粘質土
B：7.5YR2/1 黒色シルト（やや粘質）≒⑥-2

0　1m

第22図　S区西壁・東壁土層図（縮尺1/40）



第23図　S区6－②層出土土器実測図①（縮尺1/3）



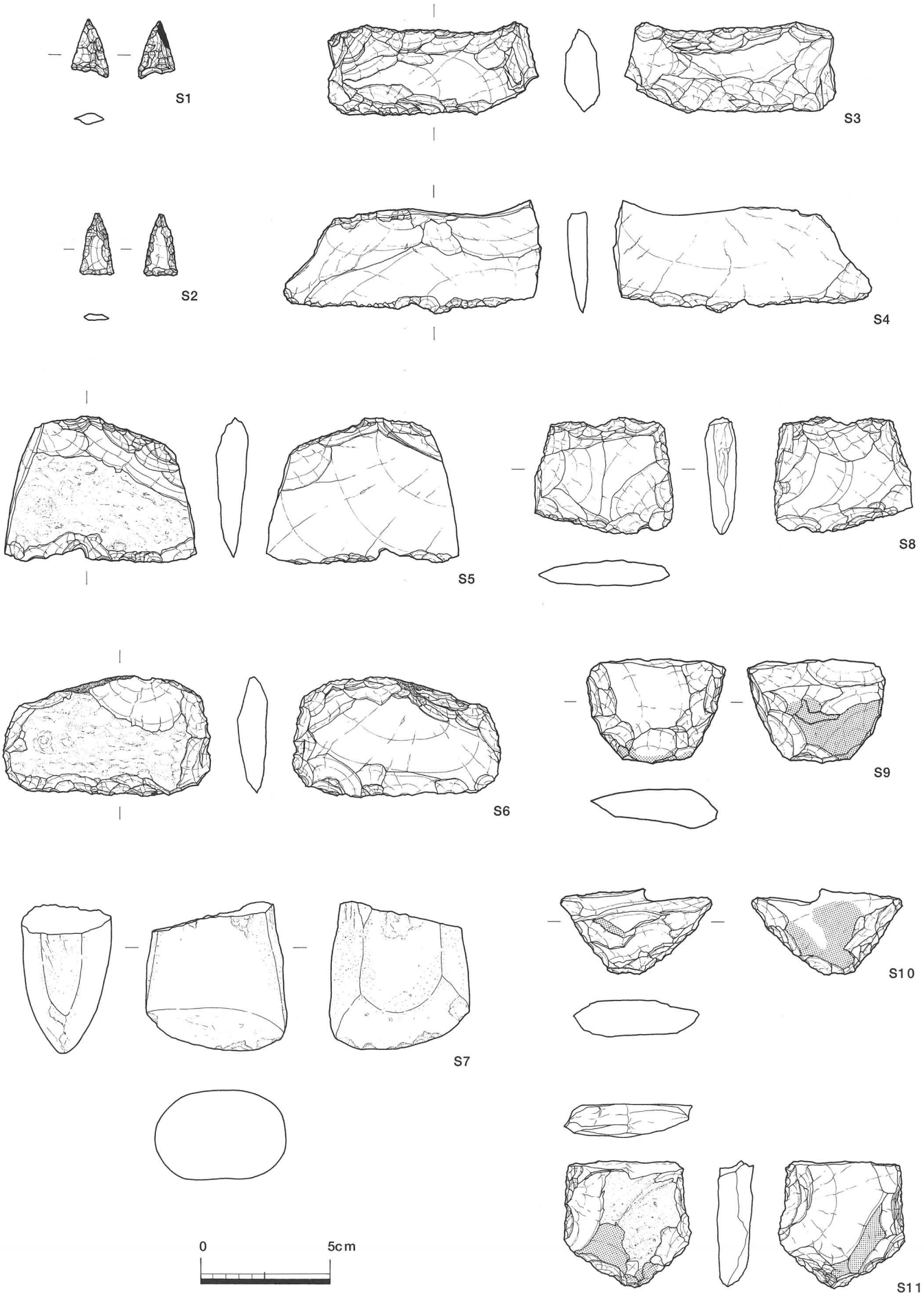
第24図　S区6－②層出土土器実測図②（縮尺1/3）

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土
1	縄文土器　深鉢	26.0		(5.8)	外面：磨滅，ナデ 内面：磨滅	外面：7.5YR6/6橙色 内面：2.5YR5/6明赤褐色	2mm以下の長石，石英を含む
2	縄文土器　深鉢	27.2		(5.0)	外面：ナデ 内面：磨滅	外面：10YR6/4にぶい黄橙色 内面：2.5Y4/1黄灰色	2mm以下の長石，石英を少量含む
3	縄文土器　浅鉢	37.0		(7.0)	外面：磨滅，ミガキ 内面：磨滅，ミガキ，口縁部，頸体部境：沈線	外面：10YR4/2灰黄褐色 内面：10YR5/2灰黄褐色	3mm以下の長石，石英を少量含む
4	縄文土器　浅鉢	30.0		(5.9)	外面：磨滅，口縁部：ナデ，体体部：ミガキ 内面：磨滅，ミガキ，口縁部，頸体部境：沈線	外面：10YR4/2灰黄褐色 内面：10YR4/2灰黄褐色	3mm以下の長石，石英を含む
5	弥生土器　壺	20.6		(7.0)	外面：磨滅 内面：磨滅	外面：7.5YR6/6橙色～10YR5/2灰黄褐色 内面：10YR4/1褐灰色	5mm以下の長石，石英を含む
6	縄文土器　浅鉢 底部		8.0	(1.7)	外面：ナデ，ミガキ 内面：ミガキ	外面：2.5Y5/1黄灰色 内面：2.5Y6/2灰黄色	3mm以下の長石，石英を少量含む
7	弥生土器　壺 底部		10.6	(8.6)	外面：磨滅，ナデ 内面：磨滅，ナデ，指おさえ	外面：10YR7/4にぶい黄橙色 内面：7.5YR7/6橙色	5mm以下の長石，石英を含む
8	縄文土器　底部		7.4	(4.0)	外面：磨滅，ナデ 内面：磨滅，工具ナデ	外面：5YR4/8赤褐色 内面：5YR4/4にぶい赤褐色	3mm以下の長石，石英を含む
9	縄文土器　浅鉢 底部		11.0	(1.7)	外面：ナデ 内面：ミガキ（弱い黒色磨研）	外面：2.5Y6/4にぶい黄橙色 内面：2.5Y3/1黒褐色	2mm以下の長石，石英を少量含む
10	縄文土器　深鉢			(4.5)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：2.5Y5/3黄褐色 内面：2.5Y4/2暗灰黄褐色	2mm以下の長石，石英，金雲母を少量含む
11	縄文土器　深鉢			(3.9)	外面：ナデ 内面：磨滅	外面：7.5YR7/4にぶい橙色 内面：7.5YR6/6橙色	2mm以下の長石，石英を含む
12	縄文土器　深鉢			(3.3)	外面：ナデ，口縁端部：刻目 内面：磨滅	外面：10YR4/2灰黄褐色 内面：10YR5/3にぶい黄褐色	2mm以下の長石，石英を含む
13	縄文土器　深鉢			(2.7)	外面：ナデ，頸部：沈線文 内面：磨滅	外面：10YR4/2灰黄褐色 内面：10YR6/4にぶい黄橙色	2mm以下の長石，石英を含む
14	縄文土器　浅鉢			(5.0)	外面：磨滅，ミガキ 内面：磨滅	外面：10YR4/2灰黄褐色 内面：10YR4/2灰黄褐色	やや密
15	縄文土器			(3.6)	外面：磨滅 内面：磨滅	外面：2.5Y3/1黒褐色 内面：10YR7/4にぶい黄橙色	3mm以下の長石，石英を含む
16	弥生土器　壺 頸体部片			(4.7)	外面：ナデ，篦描木葉文 内面：磨滅	外面：7.5YR4/2灰褐色 内面：10YR4/2灰黄褐色	2mm以下の長石，石英を少量含む

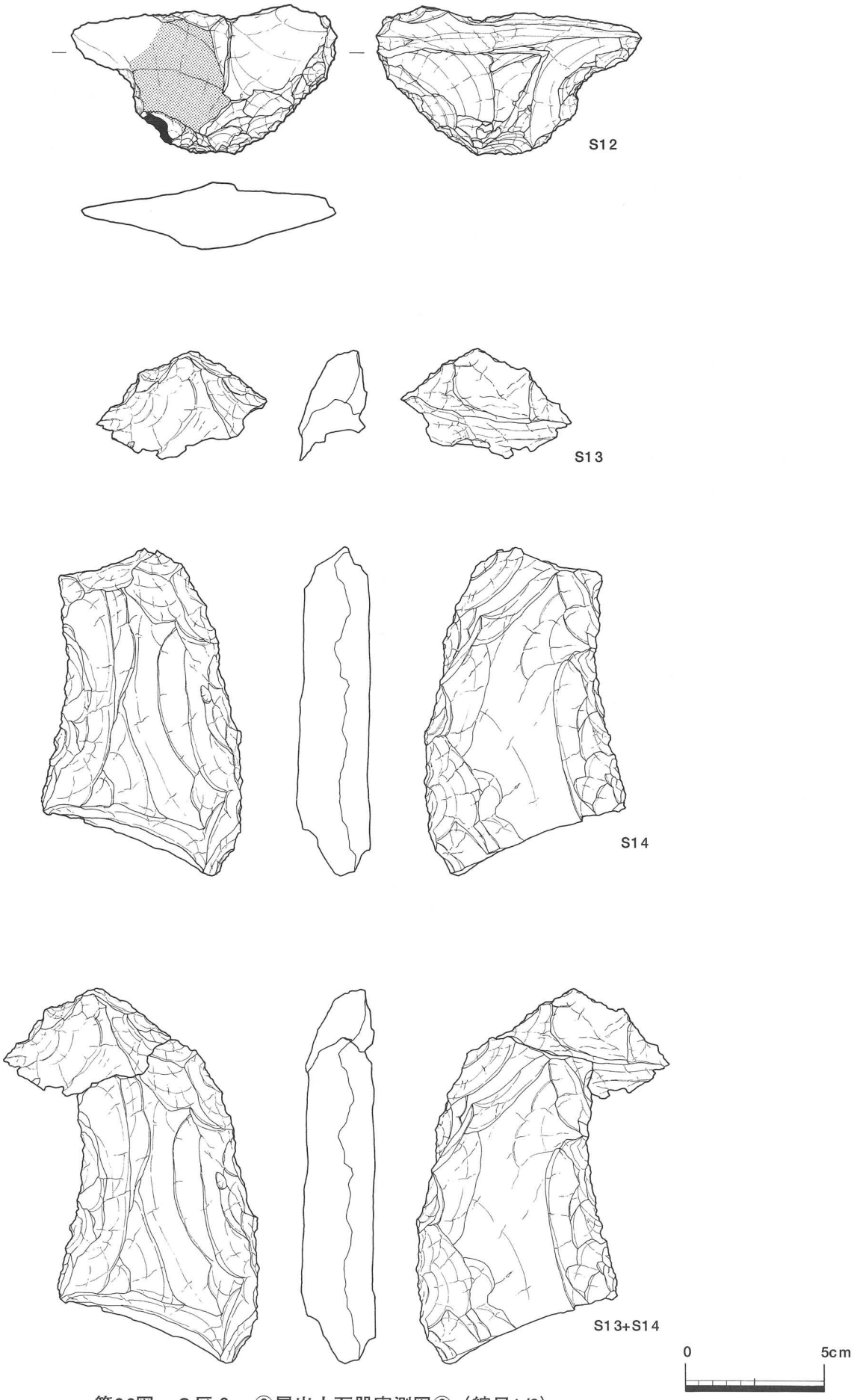
第５表　S区６－②層出土土器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考
S1	石鏃	2.3	1.4	0.4	0.8	サヌカイト	凹基無茎
S2	石鏃	2.4	1.3	0.3	0.8	サヌカイト	平基無茎
S3	石小刀	8.1	3.5	1.3	54.8	サヌカイト	先端部：折損
S4	スクレイパー	9.8	4.1	0.8	34.6	サヌカイト	
S5	スクレイパー	7.4	5.6	1.2	58.4	サヌカイト	背面に自然面を残す。
S6	スクレイパー	8.0	4.7	1.1	55.1	サヌカイト	背面に自然面を残す。
S7	磨製石斧	5.7	5.3	3.4	170.4	蛇文岩	基部横断面：偏平
S8	楔形石器	5.3	4.5	1.0	34.5	サヌカイト	
S9	打製石斧 先端部	3.9	5.3	1.5	35.8	サヌカイト	線条痕，磨耗
S10	打製石斧 先端部	3.2	5.8	1.4	16.5	サヌカイト	線条痕，磨耗
S11	打製石斧 先端部	4.8	4.9	1.2	39.6	サヌカイト	基部：裁断，先端部：線条痕，磨耗
S12	打製石斧 先端部	5.2	9.5	2.3	84.5	サヌカイト	片面先端部：弱い磨耗
S13	剥片	3.8	6.1	2.4	29.2	サヌカイト	S14と接合
S14	打製石斧 未製品	11.8	7.1	2.6	247.1	サヌカイト	背面右側から敲打（潰し），S13と分割後，左側面を加工，下端部を分割（折損）後，破棄。

第６表　S区６－②層出土石器観察表



第25図　S区6－②層出土石器実測図①（縮尺1/2）



第26図　S区6ー②層出土石器実測図②（縮尺1/2）

N区小区画水田（第27図，第７表）

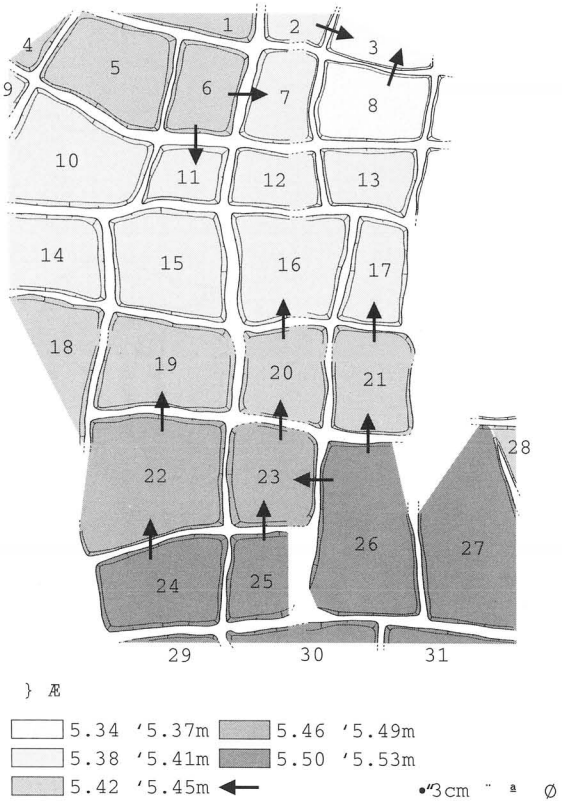
N区で検出した小区画水田である。検出した標高は5.40～5.55m前後で，土層では６－①層から５㎝程度凸状に隆起したものを畦畔として平面検出した。６－①層は，黒褐色シルト質極細砂～シルト質粘土の土壌化した堆積層で，約0.15～0.2mの厚さで認められる。この直下では砂層が存在し，水はけの比較的良い水田と考えられる。６－①層を被覆する⑤層は，褐灰色極細砂で洪水による堆積層とは考えにくく，水田は緩慢に埋没していったものと想定される。S区でも６－①層は見られるが，平面・断面ともに畦畔を検出していない。６－①層の南北方向の標高は，S区北端で5.58mと最も高く，0.25m前後の高低差でN区北端へ下る。東西方向にはほぼ平坦だが，N区北端とS区北西部では西端が東端より0.1m程度高くなり，下位に存在する旧河道の影響を受けた地形に由来すると想定される。詳細は下表のとおりだが，かなり小さな区画も認められ面積および想定される配水方向は一様ではない。地形を反映した結果と考えられるが，いずれにせよ検出範囲が狭く全体像は不明である。

N区小区画水田出土遺物（第28図，第８表）：６－①層から土器・石器数点が出土した。１は弥生土器甕で，砂礫を含む胎土に如意状の口縁をもち，弥生時代前期前半のものである。

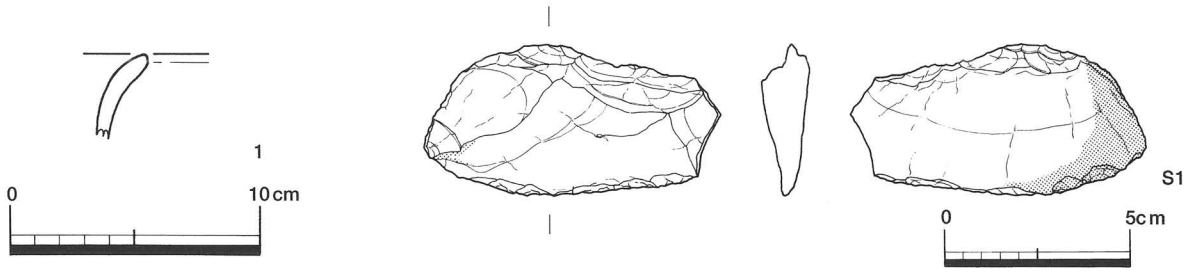
第７表　N区小区画水田一覧

区画番号	標高(m)	面積(㎡)	長辺(m)	短辺(m)	区画番号	標高(m)	面積(㎡)	長辺(m)	短辺(m)
1	5.42	—	—	—	17	5.39	4.34	2.82	1.54
2	5.38	—	—	—	18	5.43	—	—	—
3	5.34	—	—	—	19	5.43	8.10	3.49	2.32
4	5.41	—	—	—	20	5.44	5.59	2.45	2.28
5	5.42	7.38	3.10	2.38	21	5.44	4.68	2.23	2.10
6	5.42	4.24	2.38	1.78	22	5.46	(12.02)	(3.60)	3.34
7	5.39	4.02	2.48	1.62	23	5.48	6.58	2.72	2.42
8	5.37	5.71	2.93	1.95	24	5.50	7.52	3.34	2.25
9	5.41	—	—	—	25	5.51	(3.45)	2.27	(1.52)
10	5.40	9.46	3.64	2.60	26	5.51	11.65	4.55	2.56
11	5.39	3.01	1.97	1.53	27	5.52	—	—	—
12	5.39	3.55	2.32	1.53	28	5.44	—	—	—
13	5.38	4.03	2.52	1.60	29	5.52	—	—	—
14	5.40	—	—	2.20	30	5.53	—	4.00	—
15	5.40	8.54	3.05	2.80	31	5.53	—	—	—
16	5.39	8.35	2.90	2.88					

＊( )の数値は，残存値を示す。



第27図　N区小区画水田配水想定図

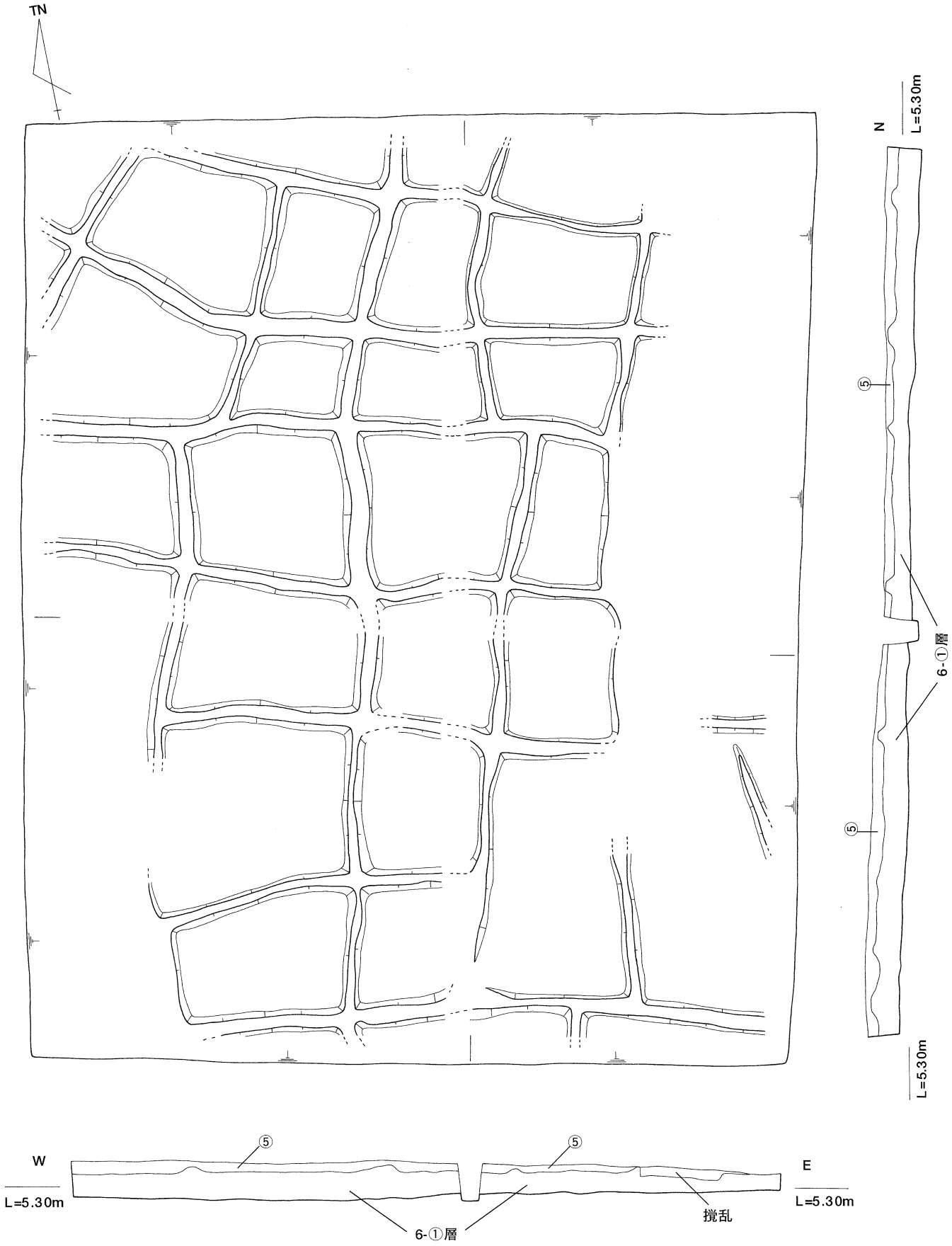


第28図　６－①層出土遺物実測図（縮尺：土器１/3，石器1/2）

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土
1	弥生土器 口縁部片			(3.4)	外面：磨滅 内面：磨滅	外面：7.5YR6/4にぶい橙色 内面：7.5YR6/4にぶい橙色	5㎜以下の長石を含む

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考
S1	打製石庖丁	7.7	4.0	1.2	34.6	サヌカイト	磨耗

第８表　６－①層出土遺物観察表



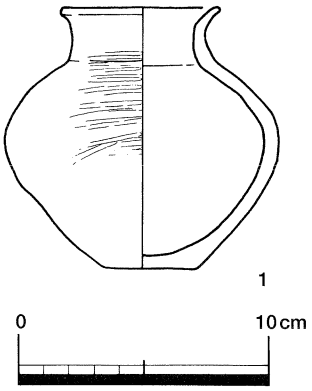
第29図　N区小区画水田平面図（縮尺1/100）・断面図（縮尺：高さ1/40，長さ1/100）

ＳＫ０３（第31図）：Ｓ区の北西部，第２遺構面で検出した。検出した標高5.59～5.64ｍ，最深部の底面標高5.37ｍを測る。平面形状は，調査区外へ続く部分も含めて，不整な円もしくは楕円形と考えられる。断面は緩やかな擂鉢状を呈し，埋土は炭化物を含む褐灰色シルトの単一層である。所属時期は，出土遺物および土層から弥生時代と考えられる。

ＳＫ０３出土遺物（第30図，第９表）：弥生土器壺（１）のみが出土した。器面調整は，頸体部外面が横方向のミガキ，内面はナデである。

遺物包含層⑤層：６－①・②層，ＳＫ０３を被覆する遺物包含層。出土した遺物は少量であるが，４点を図化した。

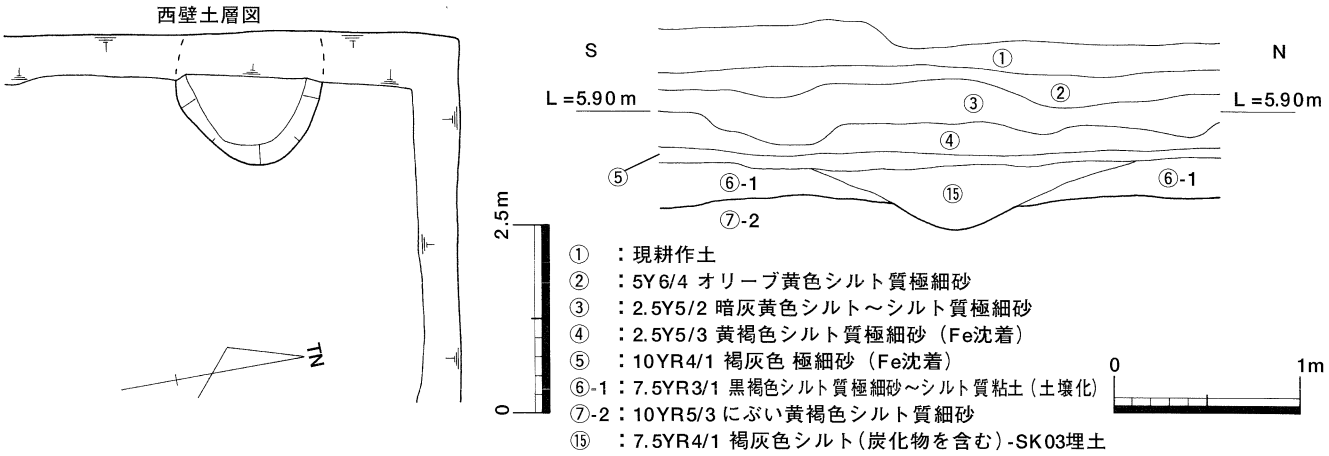
⑤層出土遺物（第32図，第10表）：弥生土器甕（１・２）は下川津Ｂ類土器で，３とともに弥生時代後期である。高坏の杯部とした４は，内面に削り痕を残さず，古相を呈し中期後半と考えられる。以上のことから，この堆積層は弥生時代中期後半～後期と考えられる。



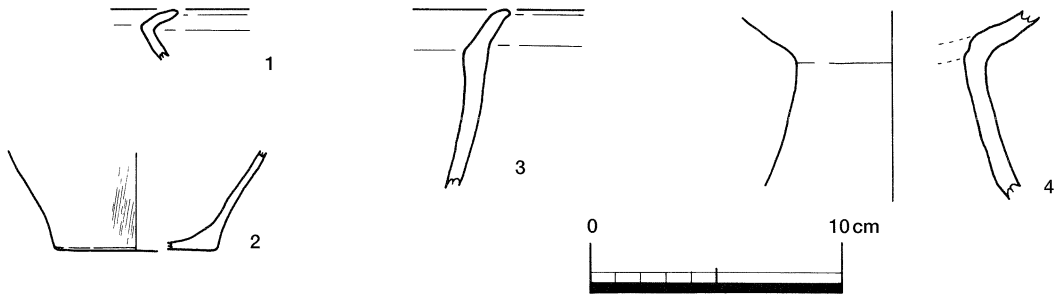
第30図　ＳＫ０３出土土器実測図（縮尺1/3）

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土
1	弥生土器 壺	6.2		10.3	外面:ミガキ，ナデ，黒斑 内面:ナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙色 内面:2.5YR6/3にぶい黄色	3mm以下の長石，石英を少量含む

第９表　ＳＫ０３出土土器観察表



第31図　ＳＫ０３平面図（縮尺1/100）・西壁土層図（縮尺1/40）



第32図　⑤層出土土器実測図（縮尺1/3）

番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土
1	弥生土器 甕 口縁部片			(2.0)	外面:磨滅 内面:磨滅	外面:7.5YR5/4にぶい褐色 内面:7.5YR5/6明褐色	2mm以下の長石，石英，角閃石を少量含む
2	弥生土器 甕 底部		6.4	(3.9)	外面:磨滅，ミガキ？ 内面:磨滅	外面:2.5Y6/3にぶい黄色 内面:10YR6/6明黄褐色	1mm以下の長石，雲母，角閃石を少量含む
3	弥生土器 鉢 口縁部片			(7.1)	外面:磨滅 内面:磨滅	外面:10YR6/3にぶい黄橙色 内面:10YR7/3にぶい黄橙色	5mm以下の長石，雲母，角閃石を少量含む
4	弥生土器 高坏 脚部片			(7.5)	外面:磨滅 内面:磨滅	外面:10YR5/4にぶい黄褐色 内面:2.5Y5/4黄褐色	2mm以下の長石，雲母，角閃石を含む

第10表　⑤層出土土器観察表

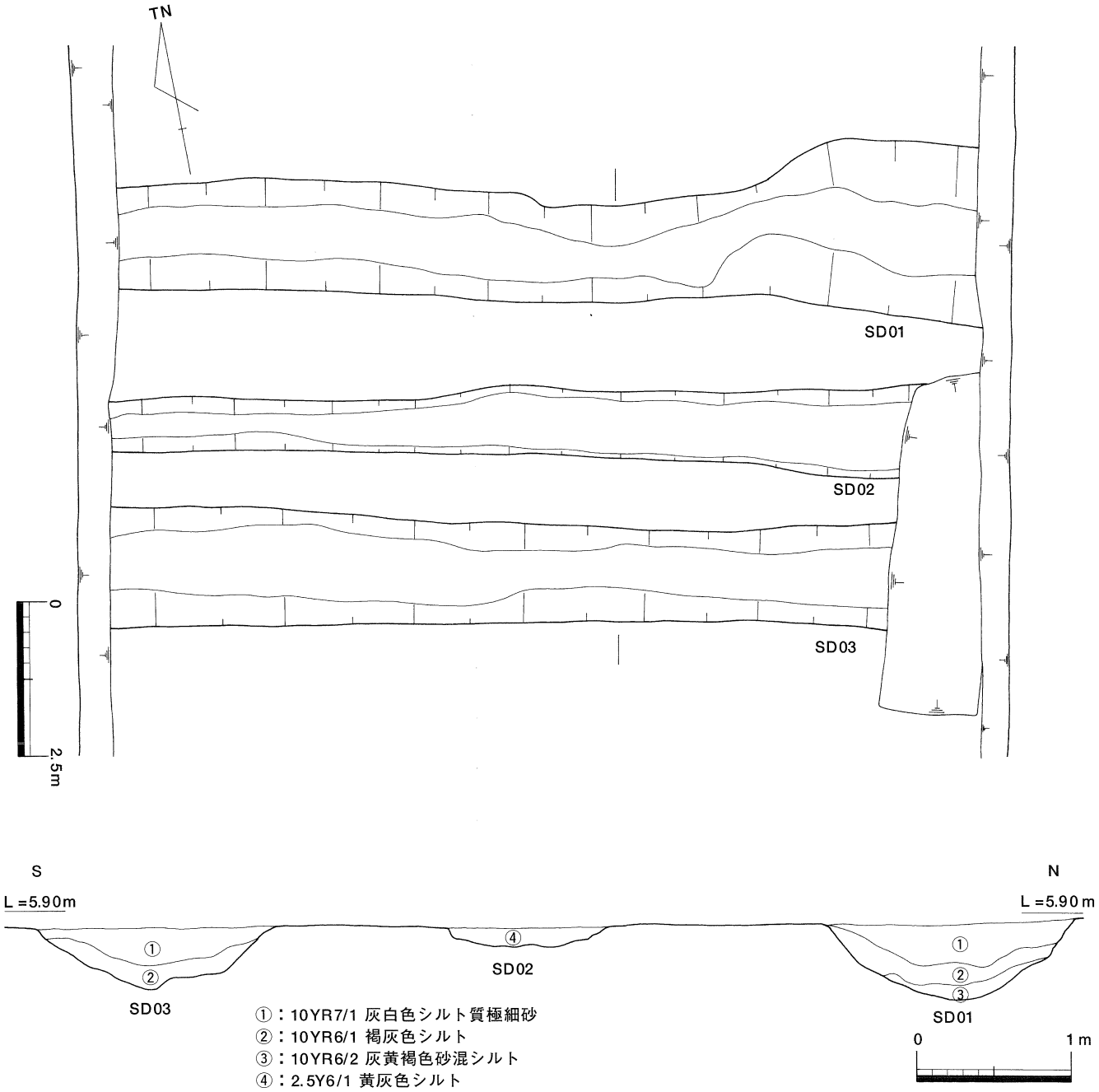
第５節 古代～中世の遺構・遺物

条里地割と合致する溝 （第33図）

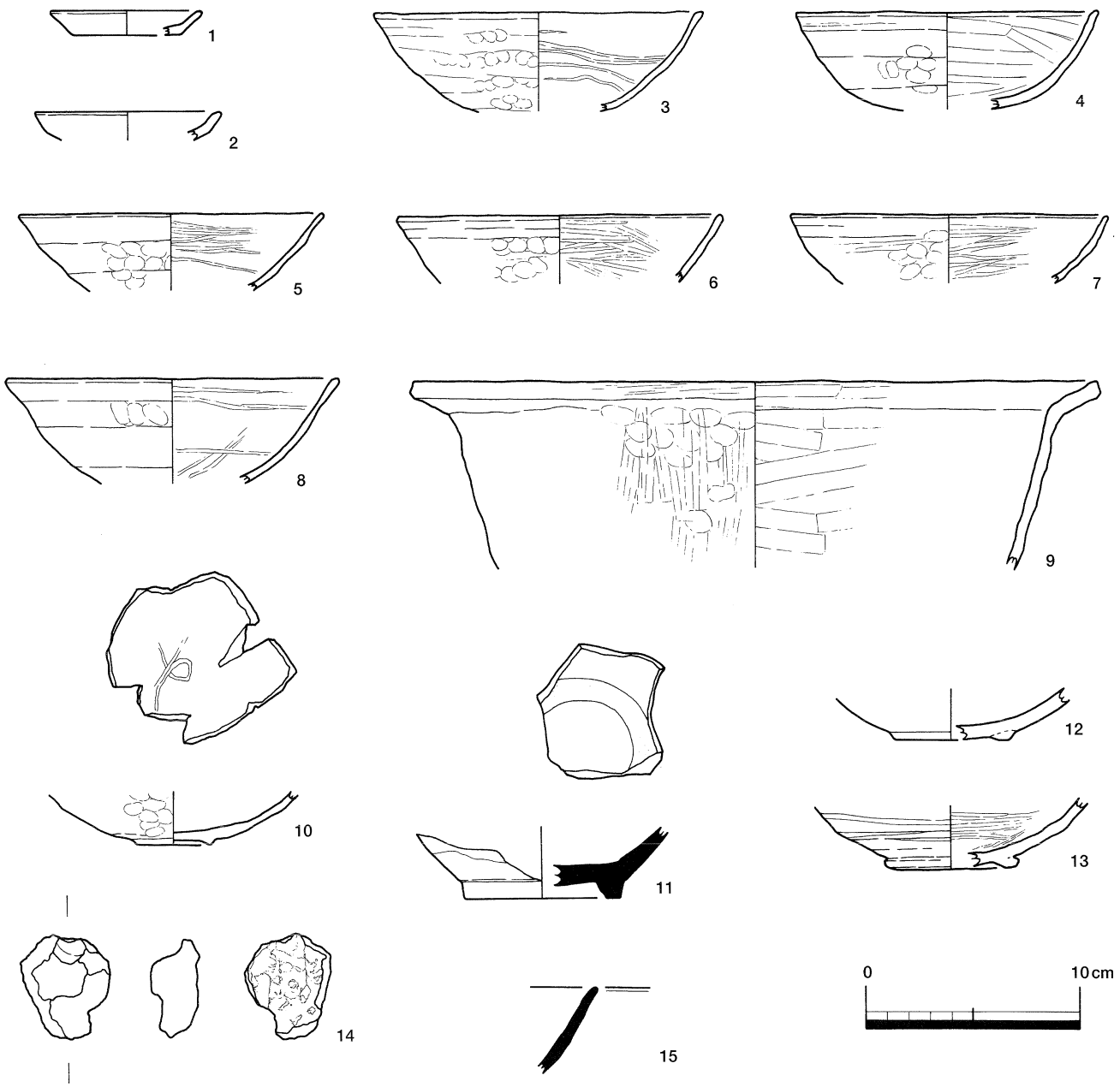
Ｓ区の北半分，第１遺構面で検出した３条の東西方向にのびる溝SD01～03である。３条とも現況の地割とほぼ一致する。推定条里地割では，香川郡三条十九里二・十一坪界線に位置する。SD01及びSD03の埋土は上層部（①・②層）がほぼ共通して見られることから，両溝が併存する時期があったと推測される。

ＳＤ０１ （第33・35図，第12表）

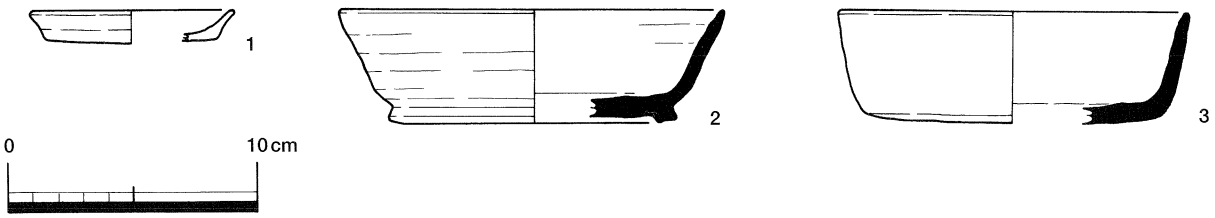
検出した標高は5.81～5.86ｍ，底面の標高は5.32～5.43ｍを測り，底面の標高にばらつきがあることから，明確な流路方向をもたない。平面は，西半分では直線的だが，東半分でやや屈曲し幅広となる箇所が認められる。断面は逆台形であり，埋土は３層に分層できる。第35図２・３の須恵器杯から８世紀前半頃に掘削され，１の土師質土器皿や埋土が共通するＳＤ０３上層出土遺物から，13世紀代まで存続していたと推測される。



第33図　ＳＤ０１～０３平面図（縮尺1/100）・断面図（縮尺1/40）



第34図　ＳＤ０３出土土器実測図（縮尺1/3）



第35図　ＳＤ０１出土土器実測図（縮尺1/3）

ＳＤ０２（第33図）

検出した標高は5.76～5.85m，底面の標高は5.56～5.70mを測り，緩やかに西へ下る。平面は直線的だが，東部でやや幅広となる。断面は舟底形となり，埋土は黄灰色シルト層の単一層である。出土遺物がなく所属時期は不明だが，埋土が近世的な様相を呈することから，SD01・03より後出するものと考えられる。

ＳＤ０３（第33・34図，第11表）

検出した標高は5.77～5.80m，底面の標高は5.38～5.45mを測り，緩やかに東へ下る。なお，図化しなかったが，西半分の底面には溝内を往来した足跡が認められた。平面は，ほぼ直線的である。断面は逆台形となり，埋土は２層に分層できる。

出土遺物は，上層からまとまって出土した。土師質土器皿（１・２），瓦器椀（３～８，10），土師質土器鍋（９），白磁碗底部（11），須恵質土器椀（12・13），須恵器杯（15），フイゴ羽口部（14）がある。出土遺物からは，13世紀の時期が考えられ，さらに15の須恵器から平安時代以前に掘削された可能性も考えられる。

和泉型と考えられる瓦器椀（３～８，10）は，外面口縁部にヨコナデ，体部下半に指おさえが共通してみられ，内面のミガキ調整が散漫なものが多い。白磁碗底部は，見込みに蛇ノ目釉剥ぎが見られ，森田分類のⅧ類に該当する。西村型と考えられる須恵質土器椀の底部には，内外面を磨くもの（13），ナデ調整で高台が矮小化したもの（12）がある。浅い洗面器状の器形と考えられる土師質土器鍋（９）は，外面を指おさえやハケで，内面を板ナデにより調整している。須恵器杯（15）は器形が明確ではないが，焼成具合等から平安時代以前と考えられる。

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質土器 小皿	7.0	5.0	1.1	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:7.5YR5/4にぶい褐色 内面:7.5YR4/1褐灰色	やや密
2	土師質土器 小皿	8.6		(1.3)	外面:磨滅 内面:磨滅	外面:10YR8/3浅黄橙色 内面:10YR8/3浅黄橙色	やや密
3	瓦器 椀	15.2		(4.5)	外面:ナデ，指おさえ 内面:ミガキ	外面:N3/1暗灰色 内面:N3/1暗灰色	やや密
4	瓦器 椀	14.0		(4.5)	外面:ナデ，指おさえ 内面:板ナデ	外面:N4/1灰色 内面:N4/1灰色	やや密
5	瓦器 椀	14.0		(3.5)	外面:ナデ，指おさえ 内面:ミガキ	外面:N3/1暗灰色 内面:N3/1暗灰色	やや密 4mm大の石英を少量含む。
6	瓦器 椀	14.8		(3.1)	外面:ナデ，指おさえ 内面:ミガキ	外面:N4/1灰色 内面:N4/1灰色	やや密
7	瓦器 椀	14.6		(3.1)	外面:ナデ，指おさえ 内面:ミガキ	外面:N3/1暗灰色 内面:N6/1灰色	やや密
8	瓦器 椀	15.4		(4.8)	外面:ナデ，指おさえ 内面:ミガキ	外面:N5/1灰色 内面:N5/1灰色	やや密
9	土師質土器 鍋	31.4		(8.5)	外面:煤化，ハケ，指おさえ 内面:板ナデ	外面:7.5YR5/6明褐色 内面:2.5Y6/4にぶい黄色	2mm以下の長石，石英を少量含む
10	瓦器 椀 底部		3.5	(2.5)	外面:ナデ，指おさえ 内面:ミガキ(連結輪状の暗文)	外面:N4/1灰色 内面:N4/1灰色	やや密
11	白磁 碗 底部		7.2	(3.3)	外面:回転ナデ，施釉 内面:施釉，蛇ノ目釉剥ぎ	外面:7.5Y7/1灰白色 釉色調:2.5GY8/1灰白色	密
12	須恵質土器 椀 底部		5.2	(2.4)	外面:磨滅，ナデ 内面:磨滅，ナデ	外面:N8/1灰白色 内面:N8/1灰白色	やや密
13	須恵質土器 椀 底部		6.2	(2.9)	外面:回転ナデ，ミガキ 内面:ミガキ	外面:5Y7/1灰白色 内面:5Y7/1灰白色	密
14	フイゴ羽口部 破片	－	－	－	外面:鉄犀溶着	外面:7.5YR8/6浅黄色 内面:2.5Y7/1灰白色	
15	須恵器 杯片			(4.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:N3/1暗灰色 内面:N7/1灰白色	密

第11表　ＳＤ０３出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質土器 小皿	8.0	6.8	1.3	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:10YR8/2灰白色 内面:10YR8/2灰白色	2mm以下の長石を少量含む
2	須恵器 杯	15.2	11.4	4.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:N7/1灰白色 内面:N7/1灰白色	密
3	須恵器 杯	14.0	11.6	4.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:N6/1灰色 内面:N6/1灰色	2mm以下の長石，石英を少量含む

第12表　ＳＤ０１出土土器観察表

第６節 近世以降および不明遺構等

ＳＫ０１（第36図）

Ｓ区北西部第１遺構面で検出した土坑である。検出した標高は5.88m前後，底面の標高は5.81m前後である。平面はほぼ円形で，長軸約0.6m，短軸約0.53mを測る。埋土は，灰白色シルト質極細砂の単一層。底面は平坦で，中央部からやや外れた位置に拳大の偏平な石が見られる。出土遺物はなく所属時期は不明だが，埋土の特徴からSK02と同じ時期と考えられる。

ＳＫ０２（第36図）

Ｓ区北西部第１遺構面で検出した土坑である。検出した標高は5.83m前後，底面の標高は最深部で4.97m前後である。平面は，直径約1.5mの円形もしくは隅丸方形と考えられる。断面は，上位が直立し，中位で段状となり，下位では擂鉢状にすぼむ。埋土は，２層に分層できる。井戸跡の可能性はあるが，湧水は認められなかった。

出土遺物は，弥生土器片，陶磁器片等が混在している。図化できなかったが，地元産と考えられる瓦質土器焙烙から近世後半以降の所属時期が考えられる。

ピット（第36図）

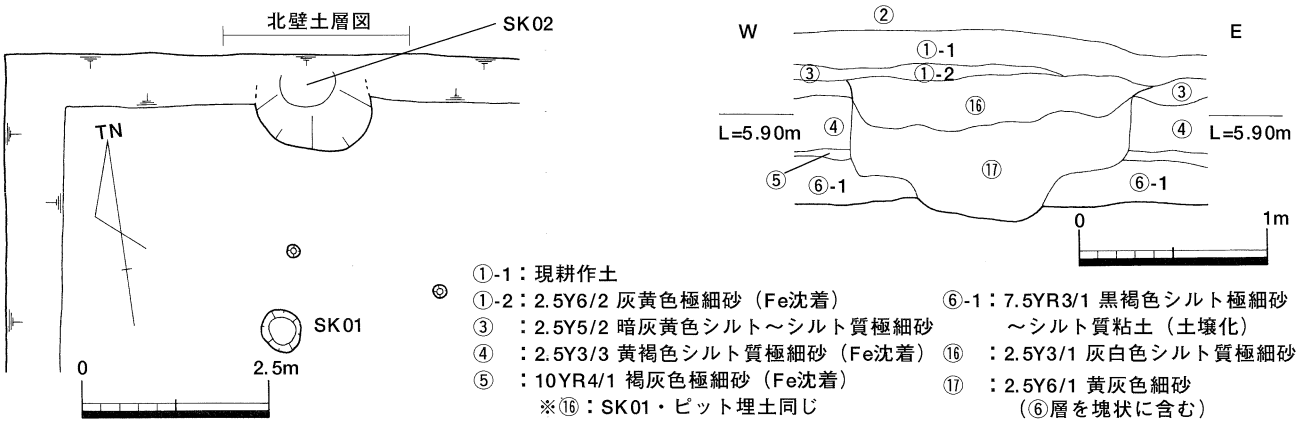
Ｓ区北西部第１遺構面で２ヶ所検出した。直径約0.15～0.2mを図る測る円形のもので，深さは約0.06mを測る。埋土はSK01・02と共通している。

ＳＸ０１～０８（第37図）

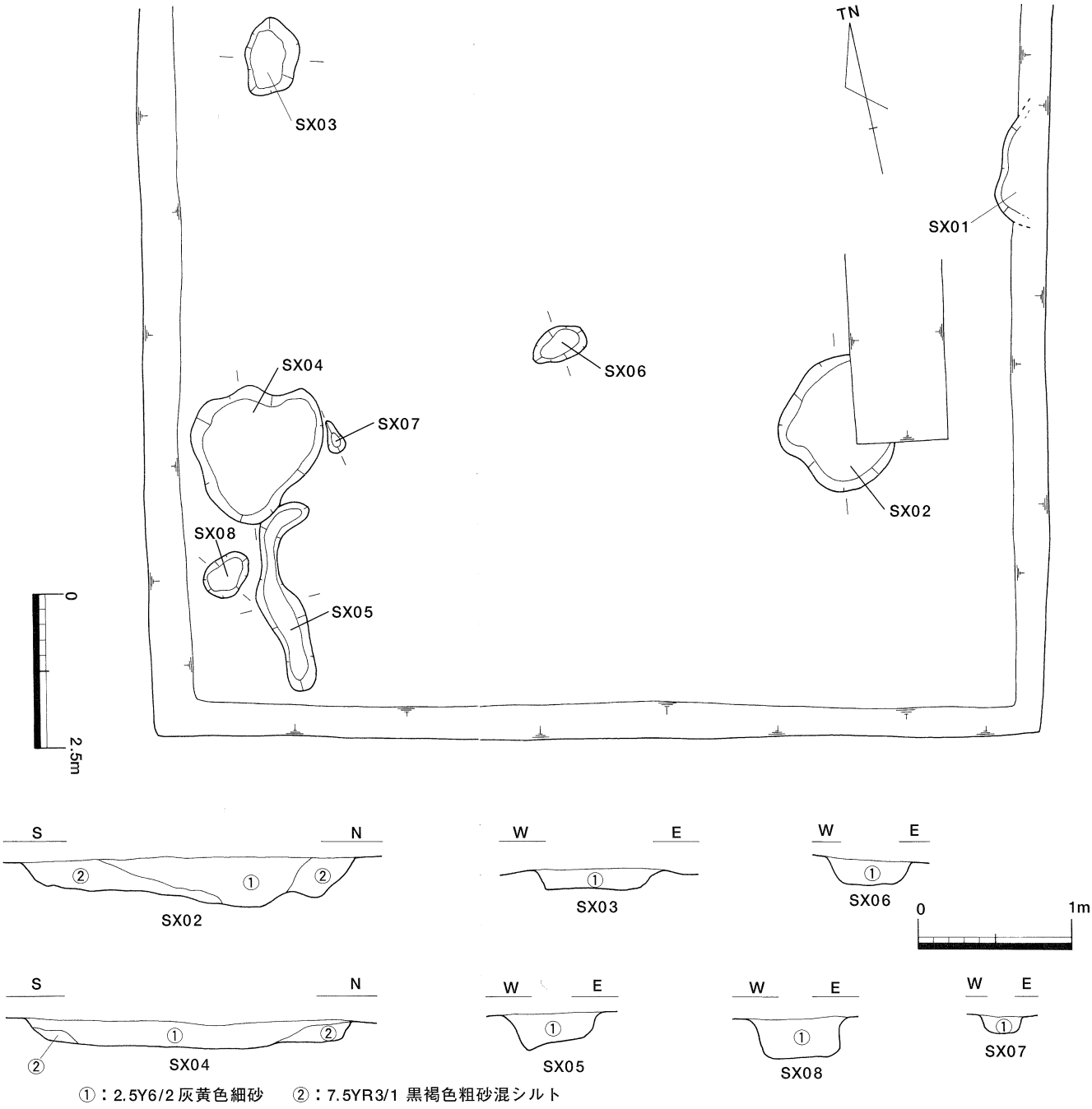
Ｎ区南半分で検出した性格不明遺構である。遺構検出は，小区画水田に伴い行ったが，機械および人力掘削時の上位面で不定形の帯状の砂が散在するのが見られた。東壁土層図（第５図）で示されるように，断面では⑦層より砂層が盛り上がって噴出しており，噴砂と考えられる。検出時に平面が円形状となるものがあることから，遺構の可能性を考え掘削した。しかしながら，埋土が⑦層に似た砂，もしくは砂と⑥－１層が混じったもので，⑦層以下との判別がつかなかった。出土遺物は皆無である。所属時期は明確でないが，断面で少なくとも③層中まで認められることから，③層の所属時期より中世～近世のものと考えられる。

噴砂（第４図第１遺構面）

Ｓ区第１遺構面で確認した。平面で見ると，砂が亀裂状に走っている。Ｓ区南西部の一部しか図化していないが，S区全域に散在して見られる。第１次調査およびＮ区SX01～08の事例から，これらとほぼ同じ時期と考えられる。



第36図　ＳＫ０１・０２平面図（縮尺1/100）・北壁土層図（縮尺1/40）



第37図　ＳＸ０１～０８平面図（縮尺1/100）・断面図（縮尺1/40）

第４章 自然科学的分析

第１節　高松市東中筋遺跡のプラント・オパール

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より大量の珪酸分を吸収することが知られている。こうして吸収された珪酸分は葉や茎の細胞内に沈積され植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）が形成される。この植物珪酸体が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものをプラント・オパールと言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。

このような研究成果から東中筋遺跡においては、検出された水田遺構についてプラント・オパール分析からの検証を目的に、また旧河道の土層断面試料から遺跡周辺のイネ科植物について機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールから検討した。

１．試料

１）遺構面試料（試料番号Ｐ１～Ｐ14）

試料は平成12年度調査において検出された水田遺構より採取された14点で、北半部８試料（Ｐ１～Ｐ８）と南半部６試料（Ｐ９～Ｐ14）である（第38図）。そのうちＰ１，Ｐ２，Ｐ４～Ｐ６，Ｐ８～Ｐ12が水田面試料、Ｐ３，Ｐ７，Ｐ13，Ｐ14が畦畔部試料である。土相について、Ｐ１～Ｐ10は黒～黒褐色のシルト、Ｐ11，P12は黒～黒褐色のシルト質粘土、Ｐ13，Ｐ14は黒褐色の粘土である。なお北半部より検出されている畦畔遺構は弥生時代後期以前と考えられている。

２）旧河道試料（試料番号１～10）

試料は平成11年度に調査された旧河道断面のほぼ中央部より採取された10点であるが、この土層断面については別報告～第１次調査～を参照して頂きたい。各試料について簡単に記すと、試料１（6a層）は黒灰褐色の砂質シルト、試料２（7a層）はやや粘土質の黒褐色砂質シルト、試料３，４（８層）は黒褐色の粘土で、３はややシルト質である。試料５（９層）は黒色の粘土、試料６（10層）は黒～黒褐色の粘土で、黄灰色のシルト小塊（結核？）が点在している。試料７（12層）も黒～黒褐色のシルト質粘土で、黄灰色のシルト小塊が少し認められる。試料８（13層上部）はやや泥炭質の黒～黒褐色粘土、試料９（13層下部）はやや泥炭質の黒色砂質粘土、試料10（14層）は黒色の砂質泥炭質粘土である。なお時代については出土遺物などから、試料１，２（6a層、7a層）が７世紀、試料３～６（８層～10層）が弥生時代後期、試料８，９（13層）が弥生時代前期～中期、試料10（14層）は弥生時代前期と考えられている。なお、８層～15層は旧河道の埋土である。

２．分析方法

プラント・オパール分析は上記した24試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約40μｍ）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

３．分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（第13表）、それらの分布を第39図（遺構面試料），第40図（旧河道試料）に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

１）遺構面試料

検境の結果、半数の７試料よりイネのプラント・オパールが得られたが検出数は少なく、5,000個を越えたのは２試料のみで、他は約1,000個または約2,000個である。また図表には示していないがＰ13よりイネの穎に形成される珪酸体の破片が少し検出されている。イネ以外ではネザサ節型が最も多く、多くの試料で200,000個前後

と多産している。次いでクマザサ属型が50,000個前後を示して多く得られており、ウシクサ族は15,000個前後検出されている。その他、個数的には2,000個前後とそれほど多くはないがヨシ属はほとんどの試料から産出しており、キビ族も半数を越える試料より得られている。

2）旧河道試料（図版9）

上位4試料よりイネが検出されており、最上部を除き約10,000個～20,000個を示している。イネ以外ではやはりネザサ節型が最も多く、上部の試料2，3では150,000個前後に達している。また産出傾向は上部に向かい減少し、試料5からは増加に転じ、最上部で再び減少している。次いでウシクサ族がほぼ10,000個～20,000個を示し多く、おおむね上部に向かい増加する傾向がみられる。クマザサ属型も10,000個前後得られており、産出傾向はネザサ節型と類似している。ヨシ属は下部より上部に向かい急増しており、中央部の試料5において約25,000個とヨシ属としては非常に高い検出個数を示し、その直上で急減している。その他、キビ族も多くの試料より得られ、試料4で最も多く約7,000個を示している。

4．水田遺構面試料について

上記したように、半数の7試料よりイネのプラント・オパールが若干検出されている。ここで検出個数の目安を示すと、イネのプラント・オパールが試料1ｇ当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。本遺跡においてはこの5,000個を越えているのは水田面試料Ｐ8と畦畔部試料Ｐ13の2試料のみで、半数の7試料ではまったく検出されていない。宮城県仙台市の富沢遺跡における水田跡（古墳時代）の検証例をみると、地点によって1,000～10,000個（平均3,000個）とかなりばらつきが見られ、まったく検出されない地点もあり、これは洪水によってプラント・オパール密度の高い水田層上部の土壌が部分的に流出し、層厚が薄くなるとともにプラント・オパール密度も低くなったものと推定されている（古環境研究所 1991）。このように同じ水田内においてもばらつきがみられるようであり、要因は不明であるが今回の分析においてはイネのプラント・オパール密度が低い部分を試料とした可能性が高いのではないかと思われる。

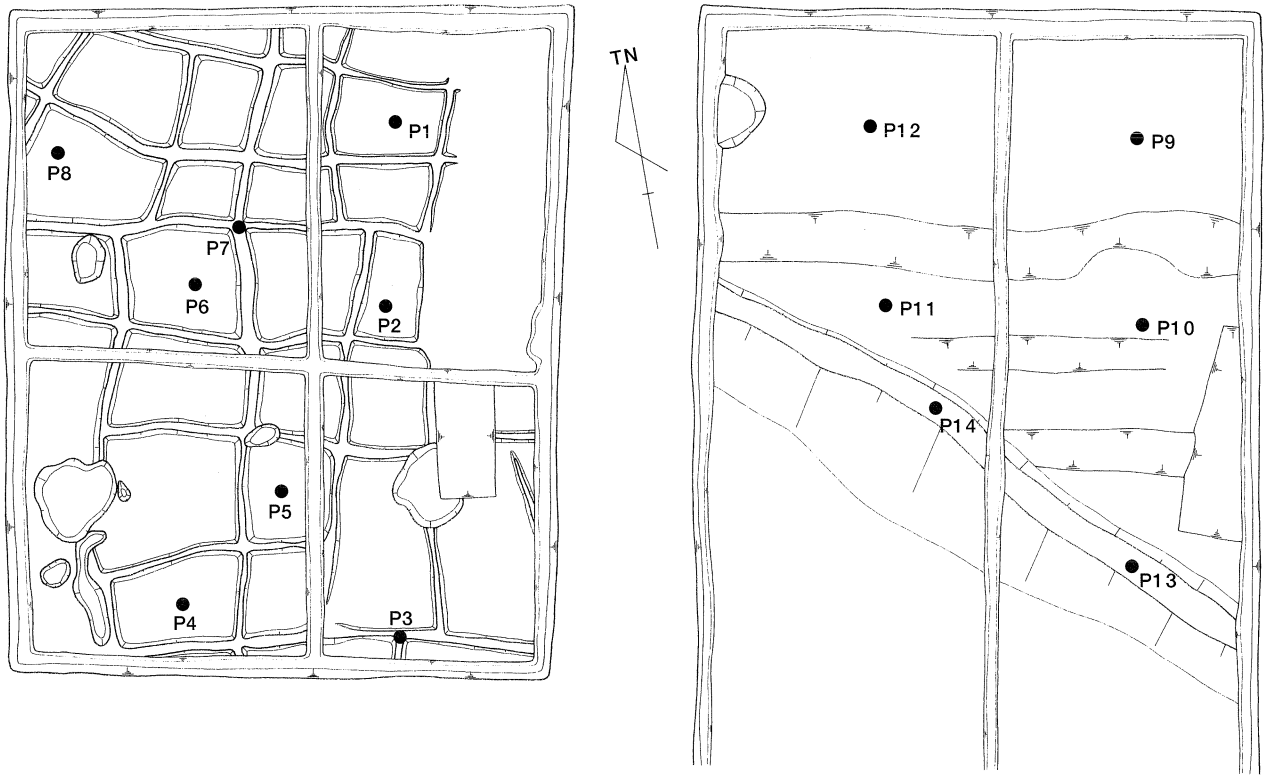
以上のようにイネのプラント・オパールの検出個数は少ないものの半数の地点より得られていることから、畦畔状の遺構から判断される水田遺構について今回の分析結果は少ないながらもこれを支持していると考えられよう。

5．遺跡周辺のイネ科植物

最も多く検出されているネザサ節型について、このネザサ節型のササ類はケネザサやゴキダケなどと考えられ、遺跡周辺丘陵部の空き地やそこに成立していた森林の林縁部、さらに河川周辺土手部などの開けたところに生育していたと推測される。ススキやチガヤなどと考えられるウシクサ族も同様のところでの生育が予想され、ネザサ節型のササ類とともにケネザサ－ススキ群落といったような草地を形成していたとみられる。一方、クマザサ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していた落葉広葉樹林の下草的存在で分布を広げていたと推測される。

ヨシ属が中央部試料において急増している。試料は旧河道部より採取されたものであり、層相はやや泥炭質の粘土が下部層において認められていることなどから、少なくとも試料採取地点付近は河川の影響が少なくなった湿地的な環境になったと推測される。こうしたところにヨシやツルヨシなどのヨシ属が分布を拡大し、弥生時代中期から後期にかけて大群落を形成するようになったのであろう。その後、弥生時代後期には先に示したように遺跡周辺では水田稲作が行われるようになったと考えられ、イネのプラント・オパールが大量に検出されている。これに呼応するようにヨシ属が急減しており、これはヨシ原を切り開き水田稲作を営むようになったことに起因していると推察される。

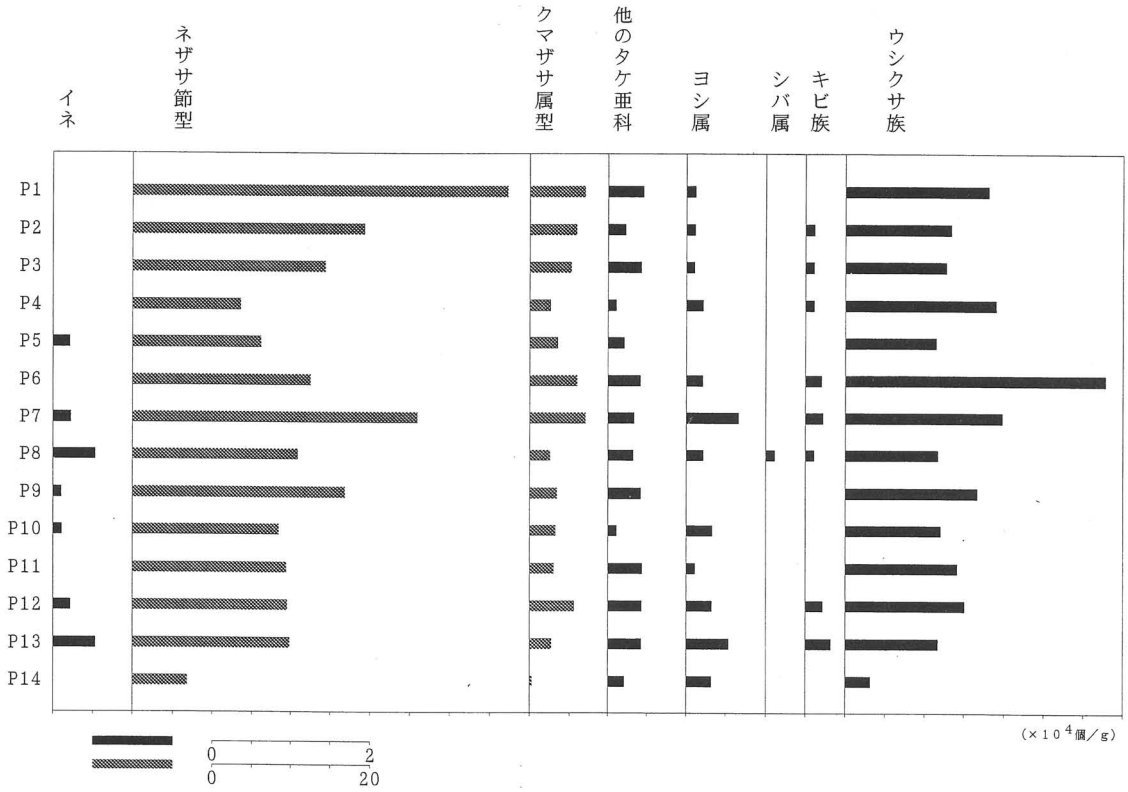
引用文献
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29．
藤原宏志（1984）プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－．　考古学ジャーナル，227，p.2-7．
藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－．考古学と自然科学，11，p.9-20．
古環境研究所（1991）仙台市富沢遺跡第30次調査におけるプラント・オパール分析．仙台市文化財調査報告書第149集 富沢遺跡-第30次調査報告書第Ⅰ分冊-縄文～近世編．仙台市教育委員会，p.389-404．



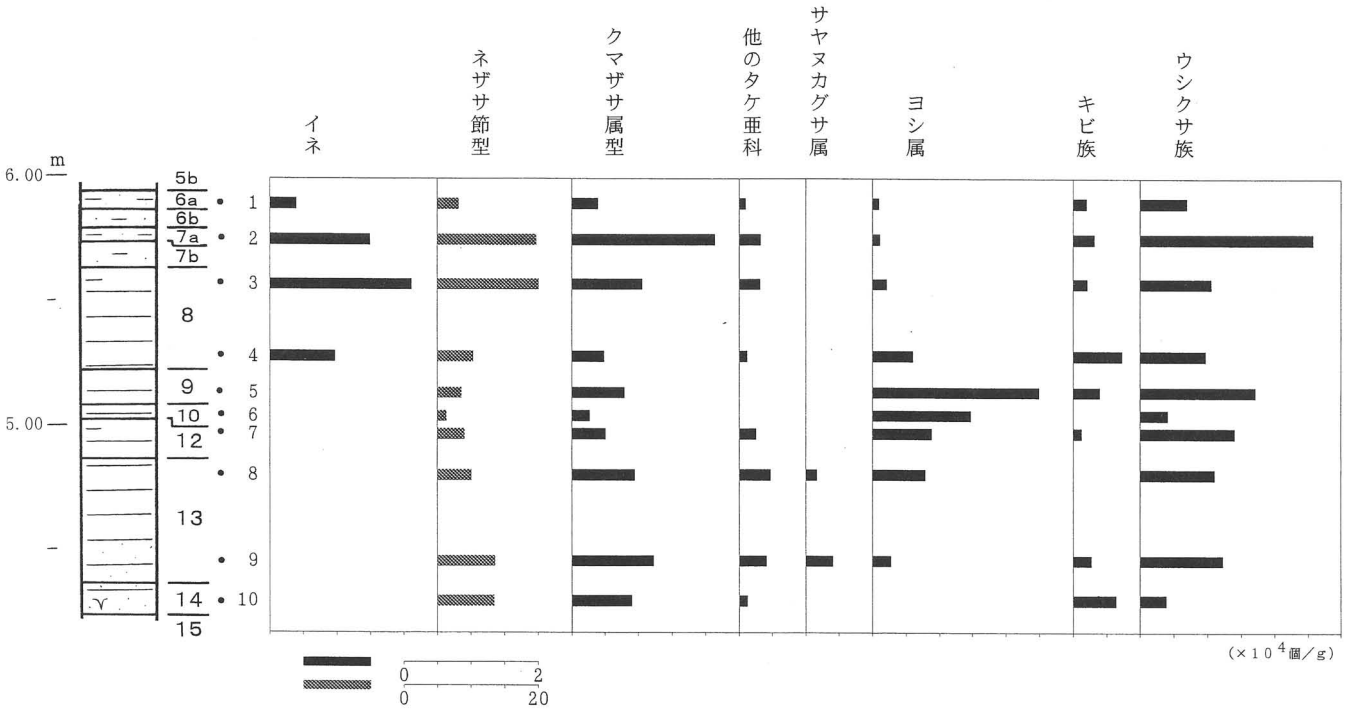
第38図　水田遺構面試料の採取位置図

試料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	サヤヌカグサ属 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
P1	0	472,100	69,900	4,500	0	1,100	0	0	18,000	25,900
P2	0	292,800	58,800	2,200	0	1,100	0	1,100	13,300	25,500
P3	0	244,200	51,800	4,200	0	1,100	0	1,100	12,700	30,700
P4	0	136,000	26,300	1,100	0	2,100	0	1,100	19,000	14,800
P5	2,100	161,500	35,400	2,100	0	0	0	0	11,500	21,900
P6	0	225,200	59,400	4,100	0	2,000	0	2,000	32,700	49,100
P7	2,200	359,500	70,400	3,300	0	6,600	0	2,200	19,800	41,800
P8	5,300	208,800	25,400	3,200	0	2,100	1,100	1,100	11,700	27,600
P9	1,000	268,400	34,300	4,200	0	0	0	0	16,600	25,000
P10	1,100	184,200	32,700	1,100	0	3,300	0	0	12,000	20,700
P11	0	194,400	30,400	4,300	0	1,100	0	0	14,100	22,800
P12	2,100	195,200	55,800	4,300	0	3,200	0	2,100	15,000	20,400
P13	5,300	198,400	27,600	4,200	0	5,300	0	3,200	11,700	28,700
P14	0	68,600	3,100	2,100	0	3,100	0	0	3,100	4,200
1	3,900	31,400	3,900	1,000	0	1,000	0	2,000	6,900	23,600
2	15,000	147,700	21,400	3,200	0	1,100	0	3,200	25,700	30,000
3	21,100	151,100	10,600	3,200	0	2,100	0	2,100	10,600	13,700
4	9,700	53,300	4,800	1,200	0	6,100	0	7,300	9,700	13,300
5	0	35,400	7,900	0	0	24,900	0	3,900	17,100	11,800
6	0	13,300	2,700	0	0	14,700	0	0	4,000	9,300
7	0	40,400	5,100	2,500	0	8,800	0	1,300	13,900	11,400
8	0	50,400	9,400	4,700	1,600	7,900	0	0	11,000	9,400
9	0	85,500	12,200	4,100	4,100	2,700	0	2,700	12,200	10,900
10	0	84,300	8,900	1,300	0	0	0	6,400	3,800	6,400

第13表　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数



第39図　水田遺構面試料のプラント・オパール分布図



第40図　断面試料のプラント・オパール分布図

第２節　高松市東中筋遺跡出土赤色顔料付着遺物の蛍光Ｘ線分析について

徳島県立博物館　魚島　純一

高松市教育委員会の依頼を受けて，東中筋遺跡出土遺物の表面に付着した赤色顔料の同定を目的とした定性分析を行ったのでその結果を報告する。

１．試料

東中筋遺跡出土　土器破片10点

詳細は第14表のとおり。

２．方法

蛍光Ｘ線分析装置を使って試料表面の非破壊定性分析を行い，試料に含まれる元素の種類を調べ，用いられた赤色顔料を推測することとした。

分析には徳島県立博物館に設置されたテクノス製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置TREX630Lを用いた。

測定の条件はつぎのとおり。

Ｘ　線　管	：　Ｍｏ	Ｘ線管電圧	：　５０ｋＶ
Ｘ線管電流	：　０．２ｍＡ	検　出　器	：　Ｓｉ(Ｌｉ)
測定時間	：　１００秒	測定雰囲気	：　大気

３．結果と考察

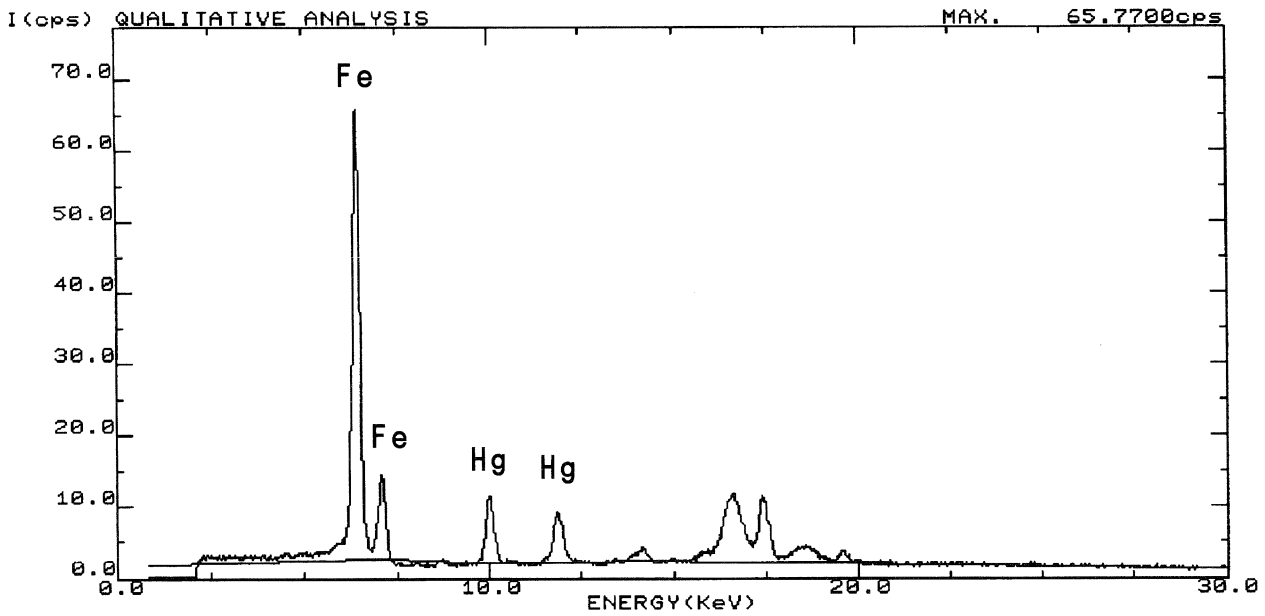
分析の結果，試料２・３の外面および試料５・６・８の内面に付着した赤色顔料部分からHg(水銀)が検出された(第41～45図)。このことから，これらの試料に付着した赤色顔料はHg(水銀)を主成分とする水銀朱(辰砂　HgS)であると考えられる。

その他の試料においては，赤色顔料付着部分の分析をおこなったが，いずれの部位からもHg(水銀)は検出できなかった。第46図にHgが検出できなかった試料の代表として，試料４の分析結果を掲げる。検出された元素のうち赤色顔料に関連する元素はFe(鉄)のみである。Feは土壌中にも多く含まれ，土器表面に付着した土壌はもとより，胎土そのものにも含まれることから，検出されたFeのピークがすべて赤色顔料に起因するものとは考えられない。ただし，いずれの試料にも表面に赤色顔料が付着していることが肉眼の観察によって確認されていることから，これらの試料に付着する赤色顔料はFe(鉄)を主成分とするベンガラ(酸化第二鉄　Fe_2O_3)であると推定される。

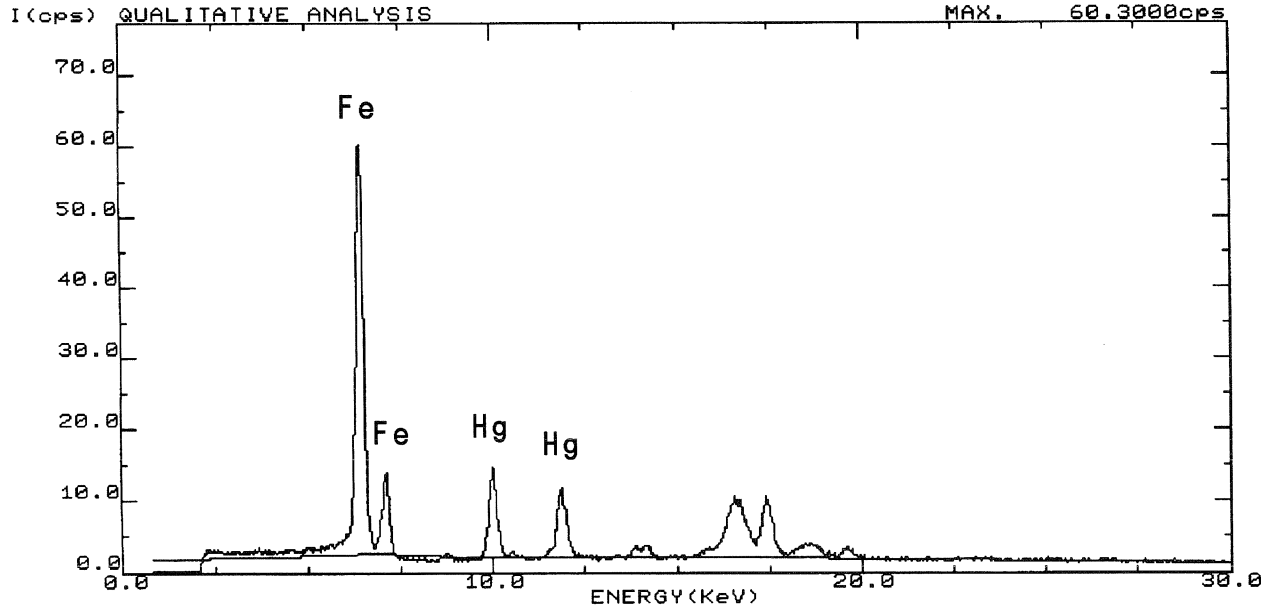
試料２・３・４は，漆の塗膜状の赤色物が付着しており，一見すると付着物は同一のもののようにも思える。しかし，分析の結果では試料２・３の外面からはHg(水銀)が検出されたものの，試料４からは検出できなかった。肉眼観察での判別の難しさを改めて感じた。

No.	遺物番号	器種	付着部位	遺構・層位	時期	赤色顔料
1	第12図38	浅鉢	内外面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	ベンガラ(内外面とも)
2	第14図57	浅鉢	内外面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	外面:水銀朱，内面:ベンガラ
3	第14図58	浅鉢	内外面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	外面:水銀朱，内面:ベンガラ
4	第14図59	壺形土器	内外面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	ベンガラ(内外面とも)
5	第14図47	浅鉢	内面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	水銀朱
6	第14図48	浅鉢	内面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	水銀朱
7	第15図69	浅鉢(椀形)	外面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	ベンガラ
8	第15図67	浅鉢(椀形)	内面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	水銀朱
9	第12図34	浅鉢	内外面	SR－E層	縄文時代晩期(突帯文期)	ベンガラ(内外面とも)
10	第1次調査 第25図108	蓋形土器	外面	SR1第7層	弥生時代後期	ベンガラ

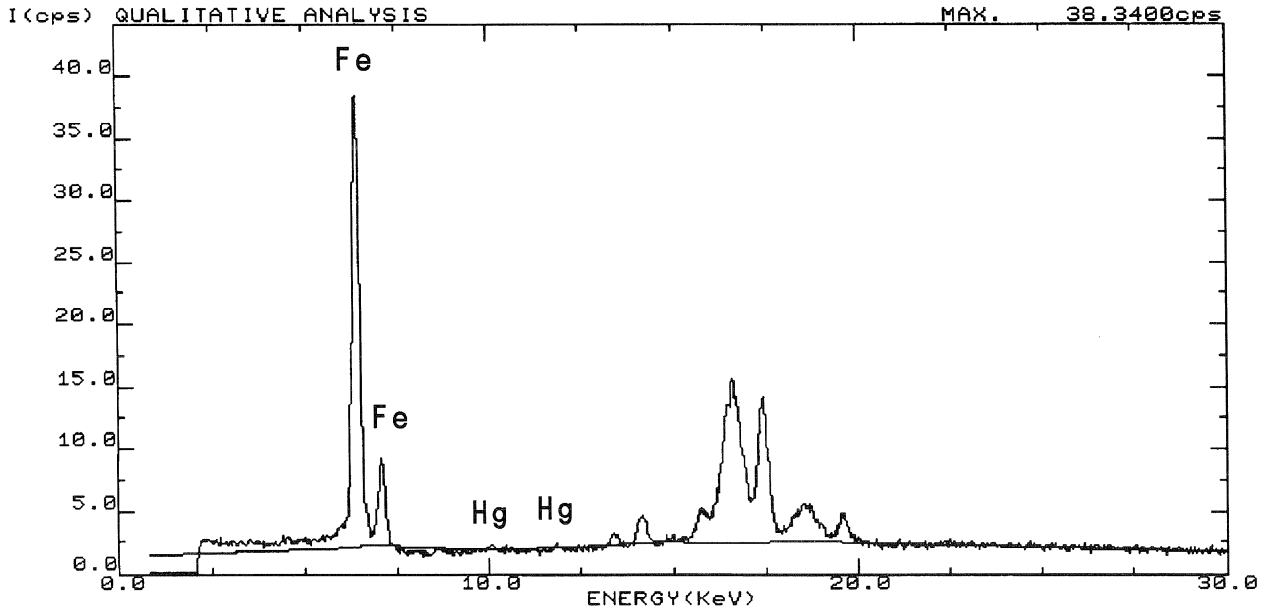
第14表　赤色顔料付着遺物一覧



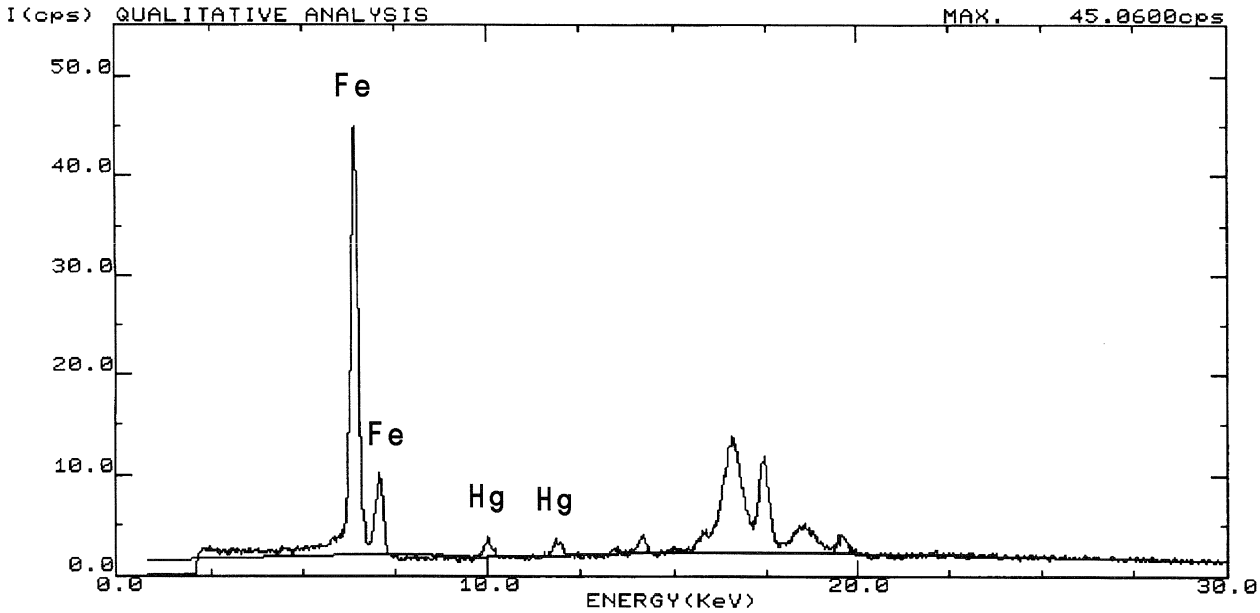
第41図　試料２外面赤色顔料付着部分蛍光Ｘ線分析結果



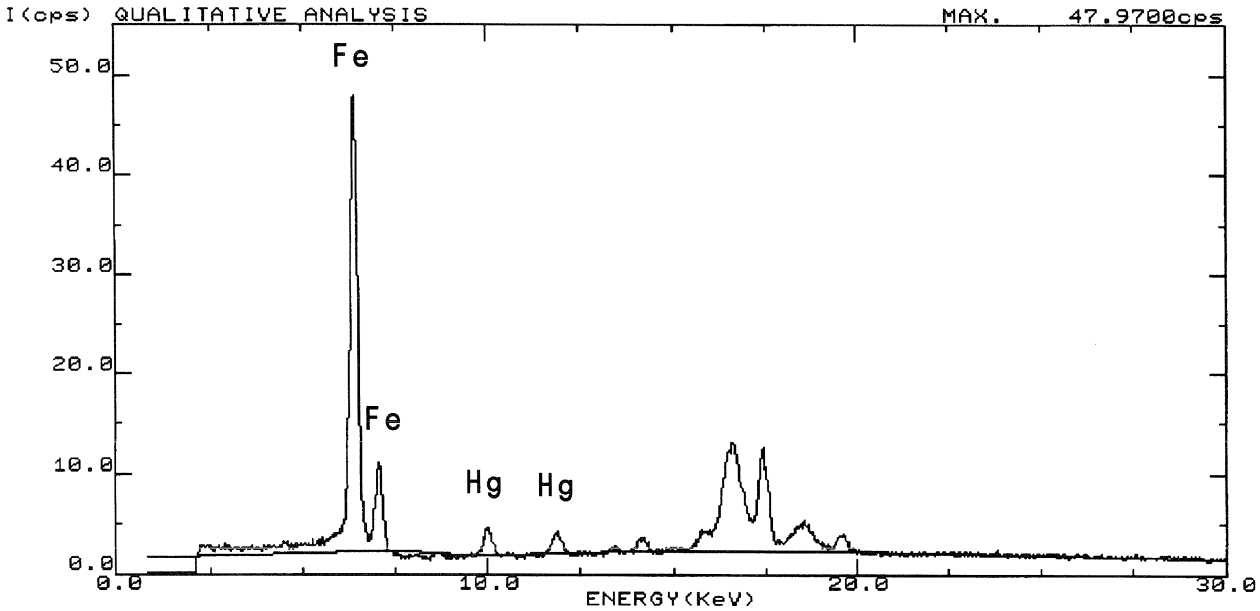
第42図　試料３外面赤色顔料付着部分蛍光Ｘ線分析結果



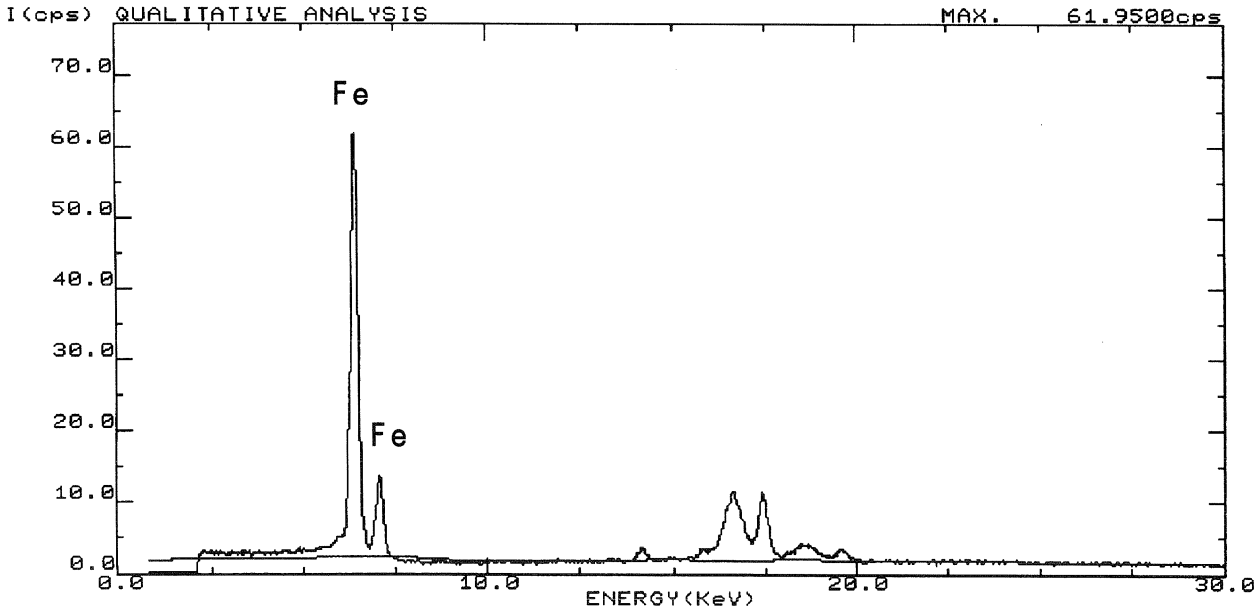
第43図　試料５赤色顔料付着部分蛍光Ｘ線分析結果



第44図　試料６赤色顔料付着部分蛍光Ｘ線分析結果



第45図　試料８赤色顔料付着部分蛍光Ｘ線分析結果



第46図　試料４赤色顔料付着部分蛍光Ｘ線分析結果

第３節　香川県高松市東中筋遺跡出土縄紋晩期土器付着物の^{14}C年代測定

小林謙一[1)2)]・坂本稔[2)]・陳健立[2)]・今村峯雄[2)]・松崎浩之[3)]

[1)]総合研究大学院大学　博士後期課程　日本歴史研究専攻
[2)]国立歴史民俗博物館　情報資料研究部
[3)]東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門

香川県高松市東中筋遺跡出土縄紋晩期突帯文土器および居石遺跡出土晩期前葉土器の、土器付着炭化物の^{14}C年代測定を試みた。試料番号はKGTとした。

今回、21点の縄紋土器から、測定用の炭化物を採取したが、一部の土器は充分な炭素量が見込めなかったため保留し、13点について^{14}C年代を得た。以下に、採取試料の状況、処理方法、測定及び暦年較正を報告する。

1　測定対象資料と炭化物の状態（図版10）

東中筋遺跡　自然河川跡より突帯文土器がまとまって出土している。

KGT 7－1　口縁外面付着。突帯文の下位に、スス状に付着していた。

KGT 13-43　浅鉢の口縁内面及び胴部外面に煮焦げ状に付着。今回は内面付着物を処理した。

KGT 11-26　口縁外面付着。突帯文の上位から下位に、吹きこぼれ状に付着していた。

KGT 8-12　口縁外面付着。突帯文の下位に、スス状に付着していた。

KGT 8-10　口縁外面付着。突帯文の下位に、部分的に口唇から雨だれ状に付着し、吹きこぼれと思われる。

KGT 8-11　口縁外面付着。突帯文の下位に吹きこぼれ状に付着。ミネラルが多く含まれているため、重液で遠心分離器を用い、分離を試みたが、結果的には、炭素量が少なく、年代測定はできなかった。

KGT 11-27　口縁外面付着。突帯文の上位から下位に、吹きこぼれ状に付着していた。

KGT 11-31　口縁外面付着。突帯文の上位に、吹きこぼれ状に付着していた。

KGT 16-77　底部内面に煮焦げ状に付着。

居石遺跡（山元1995）　自然河川跡であるSR03の、6・7層出土土器である。一括性の高い遺物と報告されている。KGT７（報告22図7）は深鉢形ＡⅠ類、KGT50・54（報告25図50・54）および64（報告26図64）は深鉢形ＡⅡ類、KGT75（報告27図75）は、深鉢形ＢⅠ類と報告されている。

KGT 7　胴部外面付着。胴部外面にスス状に付着。

KGT 50　口縁外面付着。口縁外面にスス状に付着。

KGT 53　口縁外面付着。口縁外面に吹きこぼれ状に付着。炭素量が少なく、年代測定はできなかった。

KGT 54　口縁外面付着。口縁外面に吹きこぼれ状に付着。土器が削れたためか、ミネラル分が混入した。

KGT 64　口縁外面付着。口縁外面に吹きこぼれ状に付着。

KGT 75　口縁外面付着。口縁～胴部外面にスス状に付着。

2　炭化物の処理（図版11～13）

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林、(2)(3)は、坂本・陳が行った。ただし、炭素量が少なかったため、KGT54は、(3)の作業を、またKGT7-1、8-12、11-26、13-43は、(2)(3)の作業を、地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。

(1) 前処理：有機溶媒による油脂成分等の除去、酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。
　まずアセトンに浸け振とうし、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA

処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で試料に含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（0.1N-NaOH）でフミン酸等を除去する。4回処理を行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに充分（180分）に酸処理を行い中和後、水により洗浄した（5回）。各試料は、採集総量、AAA前処理を行った量、前処理後回収した量、ガス精製に供した量、二酸化炭素の炭素相当量をそれぞれ測定してある。基本的に前処理した試料の半分を精製したが、KGT54および7-1、8-12、11-26、13-43は、量が少ないため、ほとんど全量を処理した。前処理のうち、最初のアルカリ溶液を保存してある。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄（またはコバルト）触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともにバイコールガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにバイコールガラス管に封じた。これを電気炉で650℃で12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに60kgfの圧力で充填した。

3　測定結果と暦年の較正

AMSによる^{14}C測定は、KGT54、7-1、8-12、11-26、13-43については、地球科学研究所を通してベータアナリティック社（測定機関番号Beta）へ委託した。KGT7、50、64、75は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設(MALT、機関番号MTC)で行った。その他は、加速器分析研究所（測定機関番号IAAA）に依頼して行った。

年代データの^{14}C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した^{14}C年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr BPと記すことも多いが、本稿では^{14}C BPとする）。^{14}Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68％信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C比により、^{14}C/^{12}C比に対する同位体効果を調べ補正する。表には、加速器分析研究所による誤差を付して記してある。ベータアナリティック社は十分な炭素量がある場合、^{13}C用ガス試料を質量分析計により測定した^{13}C/^{12}C比の値を示してある。^{13}C/^{12}C比は通常、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C比）偏差値に対する千分率δ^{13}C（パーミル，‰）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C/^{12}C比から、^{14}C年代値（モデル年代）が得られる（英語表記ではConventional Ageとされることが多い）。

暦年較正

測定値を較正曲線INTCAL98（暦年代と^{14}C年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版）(Stuiver,M.,et.al. 1998）と比較することによって実年代（暦年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95％信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦　cal BCで示す。()内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

試料No. KGT	試料の重量（mg） 採集	処理	回収	含有率1	精製用	ｶﾞｽ*	含有率2	含有率3	
7-1	69	51	22.11	43.4%	9.90	5.09	51.4%	22.3%	1)
8-12	73	57	7.25	12.8%	3.00	1.07	35.7%	4.6%	1)
11-26	17	17	4.33	25.5%	2.10	1.07	51.0%	13.0%	1)
13-43	34	34	13.27	39.0%	6.40	3.38	52.8%	20.6%	1)
8-10	109	78	14.83	19.0%	3.95	2.19	55.5%	10.6%	2)
8-11	94	49	19.67	40.1%	-	-	-	-	4)
11-27	117	57	29.17	51.2%	5.66	3.36	59.3%	30.4%	2)
11-31	25	25	5.38	21.5%	3.81	2.07	54.2%	11.7%	2)
16-77	35	35	17.01	48.6%	5.22	2.61	50.0%	24.3%	2)
7	137	61	24.91	40.8%	4.90	2.44	50.0%	20.4%	2)
50	278	58	27.20	46.9%	5.20	2.88	55.6%	26.1%	2)
53	36	36	11.6	32.2%	7.50	0.23	3.0%	1.0%	4)
54	62	41	13.10	32.0%	7.40	0.49	6.6%	2.1%	3)
64	47	27	7.45	27.6%	4.30	2.09	49.0%	13.5%	2)
75	143	35	18.01	51.5%	6.20	2.86	46.0%	23.7%	2)

*は、二酸化炭素の炭素相当量
含有率1は回収量/処理量、含有率2はｶﾞｽ相当量/精製用重量、含有率3は含有率1*含有率2。
-は、炭素量不足で測定できず。
1)は、(1)を小林・(2)(3)をベータアナリティック社、2)は(1)を小林・(2)(3)を坂本・陳、3)は(1)を小林・(2)を坂本・陳が処理を行った。4)は炭素量不足が予想され、処理・測定は保留した。

番号 試料No.	機関 Beta	炭素年代 $\delta^{13}C$	^{14}C BP (補正値)	暦年較正cal BC（2σ）(%) は確率
KGT7-1	184567	-26.2‰	2580±40	820-750(59.4%),690-650(10.8%), 640-540(24.9%)
KGT8-12	184568	-26.0‰	2550±40	800-740(33.6%),720-530(60.4%), 520-520(0.6%)[2]
KGT8-10	187218	-25.0‰	2560±40	810-750(40.3%),720-530(54.4%), 520-520(0.5%)
KGT11-26	184569	-25.9‰	2550±40	800-740(33.6%),720-530(60.4%), 520-520(0.6%)
KGT11-31	187217	-25.8‰	2590±40	830-750(69.3%),680-660(8.2%), 640-580(11.9%),580-540(5.9%)
KGT13-43	184570	-24.8‰	2590±40	830-750(69.3%),680-660(8.2%), 640-580(11.9%),580-540(5.9%)
KGT54	183449	-	3120±40	1490-1470(3.3%),1450-1290(88.6%), 1270-1260(2.6%)
KGT50	MTC-03790	-28.2‰	2985±60	1380-1320(11.8%),1320-1030(82.9%), 1030-1020(0.5%)
KGT7	03789	-25.9‰	3010±40	1380-1320(18.0%),1320-1180(62.8%), 1180-1120(14.6%)
KGT64	03791	-26.8‰	3015±40	1380-1320(20.5%),1320-1180(62.3%), 1180-1140(9.0%),1140-1120(3.4%)
KGT75	03792	-27.5‰	3065±40	1420-1420(0.6%),1410-1250(87.3%), 1240-1210(5.9%),1190-1190(0.7%),1130-1130(0.7%)

註

1) 加速器分析研究所でのδ^{13}C値は、加速器による測定であり、報告された誤差を付す。
KGT54は、炭素量不足のため、ベーアタナリティック社においてδ^{13}C値は測定されず。

2) 620-620cal BCは、620-615cal BCの暦年較正年代であることを示す。

4　年代的考察

居石遺跡SR03-5～7層出土土器については、報告者である山元敏裕氏により、主に平井勝氏による岡山県域での晩期土器編年に対比されている。それによれば、居石ＡＩにみられる口頸部及び胴部境界の爪形文は谷尻式に多く見られ、一方、バケツ状底部の居石ＢＩや居石ＡⅡにみられる二枚貝条痕は、一段古い舟津原式の新しい時期までしか存在しない、などの特徴がまとめられる。岡山県域と香川県域では、多少の地域差が考えられるが、おおむね晩期前半の末頃、すなわち舟津原式の新しい時期～谷尻式に相当すると捉えられている。

暦年較正年代を見ると、居石遺跡出土土器付着部の測定結果は、後述するKGT54をのぞき、紀元前1300-1100年前頃を含む、おおむね一定した年代が示される。KGT54は、若干古く、これまでの筆者の測定から見れば、後期後・末葉頃の年代が測定されている。KGTの資料を観察すると、ミネラル分がかなり多く混入しており、処理の際の炭素含有率は他の資料に比べ低い。特に、炭素含有率2は他の資料が35%～60%の炭素が含まれるのに対し、KGT54は6.6%と、測定を断念したKGT53に次いで低く、お焦げやススなどの炭化物ではなく、２次焼成により剥落した土器胎土や土壌からの汚染物が多く付着していた可能性がある。それによって試料に炭素を含む鉱物が混入し、その古い炭素が測定に影響を与えた可能性がある。よって、KGT54は除いて年代的考察を行っておく。

上記のKGT54をのぞき、炭素年代の上では、KGT50・7・64・75の順に古くなるが、仮にこれらの土器が同一の時期に属する土器群であり、較正曲線の変動に応じて幅が生じているのみであるならば、これらの土器付着物の重なる年代が、この土器群の使用された年代である可能性が高いことになる。４点の較正年代が重なる年代は、1380-1210、及び1190,1130cal BCであり、これらの土器が縄紋時代晩期前半に属することを考慮すると、1200cal BCよりは新しい可能性が高く、1130cal BCを含む年代である可能性が高いことになる。なお、やや古い年代を示しているKGT75を除くと、残り３点の測定結果からは、1320-1120cal BCの範囲が、最も可能性のある年代となり、上記と同様の理由から、1130-1120cal BCころに近い年代を含んでいる可能性が高い。この年代は、東関東地方の筆者らの測定結果と対比させると大洞B1式からB2式にかけての時期と考えられる（小林他2003）。

東中筋遺跡出土土器は、すべて突帯文土器の中葉頃の時期、岡山県南溝手遺跡１の河道１・第１低位部出土土器に相当し、平井泰男氏による南溝手１と仮称される土器（平井泰男ほか1995、1996）か、津島岡大式に近い土器群と考えられ、居石遺跡出土土器より新しい土器群である。暦年較正年代をみると、紀元前800年から530年cal BCの年代の中に含まれる確率が最も高い場合が、各試料に共通してみられる。このなかでも、紀元前800～750年の間の期間が、もっとも確率が高い。紀元前750- 400cal BC年頃、炭素年代で2450^{14}CBP頃は、炭素濃度の変化に乏しく、年代の上では、いわゆる「2400年問題」、辻誠一郎氏が「ミステリーゾーン」と呼ぶ時期に当たり（辻2002）、暦年代を絞りにくい。東中筋遺跡の測定結果は、この期間よりは古い可能性が高く、弥生時代前期よりは古く、九州地方の弥生時代早期に並行する可能性が高い（春成他2003）。

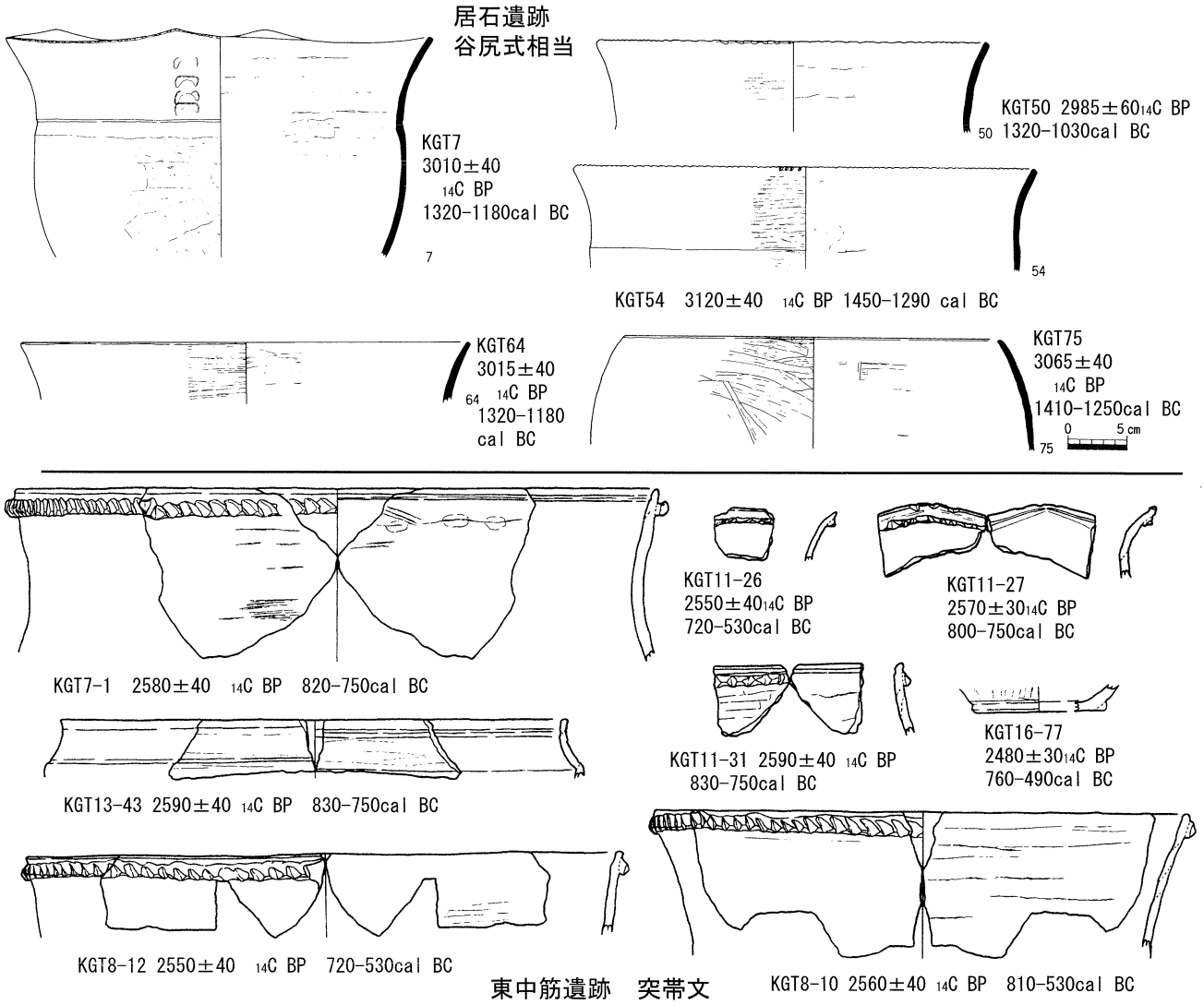
この分析は、日本学術振興会科学研究費　平成15年度基盤研究(A・１)（一般）「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（課題番号13308009）の成果を用いている。試料処理においては、東邦大学野田稔、舛田奈緒子両君の協力を得た。記して謝意を表します。

参考文献

小林謙一・今村峯雄・坂本稔・西本豊弘2003「AMS炭素年代による縄紋中期土器・集落の継続時間の検討」『日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

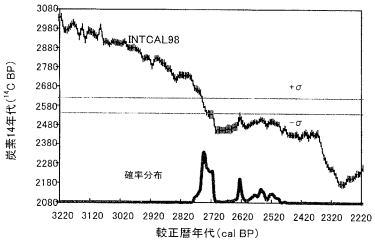
辻誠一郎2002　「青田遺跡の暦年代を知るために－放射性炭素年代の測定－」『財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団設立10周年記念公開シンポジウム「よみがえる青田遺跡」資料集　川辺の縄文集落』財団法人新潟県埋蔵文化財調査

事業団 86-91
春成秀爾・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔　2003「弥生時代の開始年代　－^{14}C年代の測定結果について-」『日本考古学境界第69回総会』研究発表要旨　日本考古学協会　65-68
平井勝1995「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『第６回　中四国縄文研究会　縄文晩期の土器編年の諸問題―突帯文の発生と展開を中心として―』資料
平井泰男ほか1995『南溝手遺跡』1　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100
平井泰男ほか1996『南溝手遺跡』2　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107
山元敏裕1995『居石遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第30集　高松市教育委員会　1-245.図版41
Stuiver,M.,et.al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration,24,000-0 cal BP.Radiocarbon 40(3),1041-1083.



第47図　居石遺跡・東中筋遺跡試料採取土器（縮尺　居石遺跡1/6、東中筋遺跡1/4）

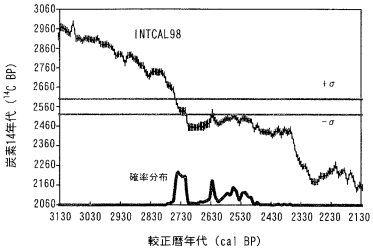
KGT7-1 2580 ± 40 (1σ) 14C BP



解析結果

t_{median} =	2720 cal BP
95% range	
820 cal BC ～	750 cal BC (59.4%)
690 cal BC ～	650 cal BC (10.8%)
640 cal BC ～	540 cal BC (24.9%)

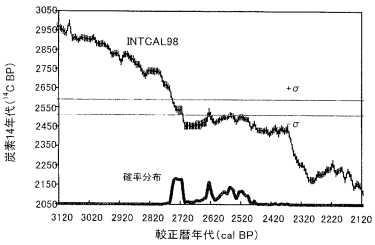
KGT8-10 2560 ± 40



解析結果

t_{median} =	2630 cal BP
95% range	
810 cal BC ～	750 cal BC (40.3%)
720 cal BC ～	530 cal BC (54.4%)
520 cal BC ～	520 cal BC (0.5%)

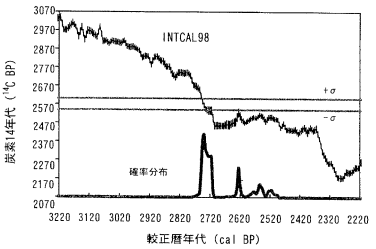
KGT8-12,11-26 2550 ± 40 (1σ) 14C BP



解析結果

t_{median} =	2620 cal BP
95% range	
800 cal BC ～	740 cal BC (33.6%)
720 cal BC ～	530 cal BC (60.4%)
520 cal BC ～	520 cal BC (0.6%)

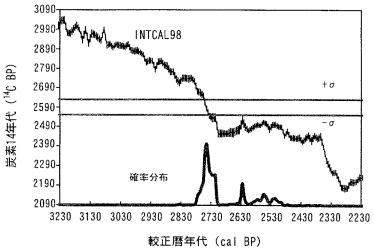
KGT11-27 2570 ± 30



解析結果

t_{median} =	2720 cal BP
95% range	
800 cal BC ～	750 cal BC (66.5%)
680 cal BC ～	660 cal BC (10.8%)
630 cal BC ～	580 cal BC (12.5%)
580 cal BC ～	540 cal BC (5.6%)

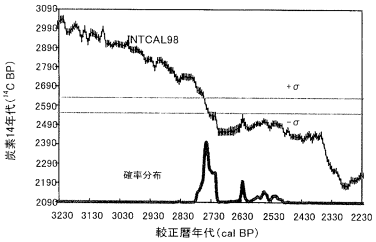
KGT11-31 2590 ± 40



解析結果

t_{median} =	2730 cal BP
95% range	
830 cal BC ～	750 cal BC (69.3%)
680 cal BC ～	660 cal BC (8.2%)
640 cal BC ～	580 cal BC (11.9%)
580 cal BC ～	540 cal BC (5.9%)

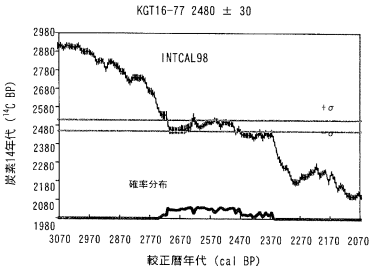
KGT13-43 2590 ± 40 (1σ) 14C BP



解析結果

t_{median} =	2730 cal BP
95% range	
820 cal BC ～	750 cal BC (68.9%)
680 cal BC ～	660 cal BC (8.2%)
640 cal BC ～	580 cal BC (11.9%)
580 cal BC ～	540 cal BC (5.9%)

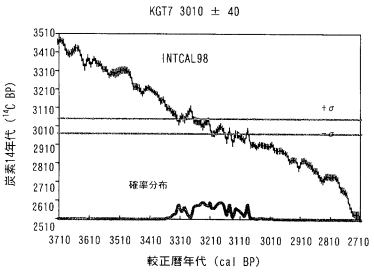
KGT16-77 2480 ± 30



解析結果

t_{median} =	2570 cal BP
94% range	
760 cal BC ～	490 cal BC (85.6%)
490 cal BC ～	480 cal BC (0.8%)
460 cal BC ～	440 cal BC (4.2%)
440 cal BC ～	420 cal BC (2.8%)
420 cal BC ～	410 cal BC (1.1%)

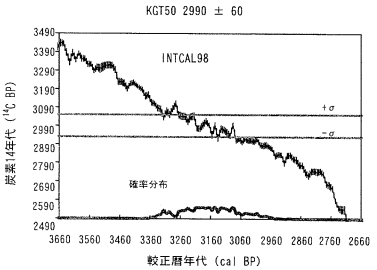
KGT7 3010 ± 40



解析結果

t_{median} =	3210 cal BP
95% range	
1380 cal BC ～	1320 cal BC (18.0%)
1320 cal BC ～	1180 cal BC (62.8%)
1180 cal BC ～	1120 cal BC (14.6%)

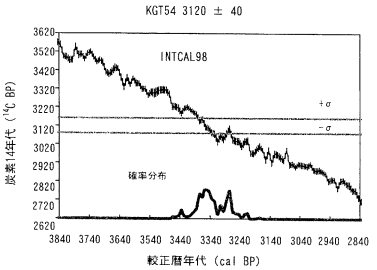
KGT50 2990 ± 60



解析結果

t_{median} =	3160 cal BP
95% range	
1380 cal BC ～	1320 cal BC (11.8%)
1320 cal BC ～	1030 cal BC (82.9%)
1030 cal BC ～	1020 cal BC (0.5%)

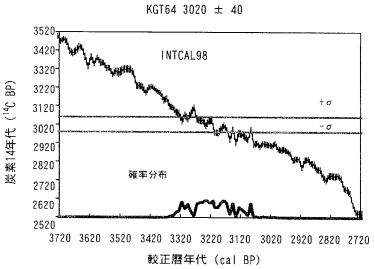
KGT54 3120 ± 40



解析結果

t_{median} =	3340 cal BP
95% range	
1490 cal BC ～	1470 cal BC (3.9%)
1450 cal BC ～	1290 cal BC (88.6%)
1270 cal BC ～	1260 cal BC (2.6%)

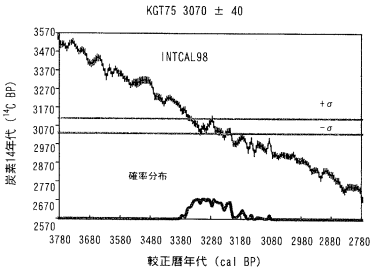
KGT64 3020 ± 40



解析結果

t_{median} =	3220 cal BP
95% range	
1380 cal BC ～	1320 cal BC (20.5%)
1320 cal BC ～	1180 cal BC (62.3%)
1180 cal BC ～	1140 cal BC (9.0%)
1140 cal BC ～	1120 cal BC (3.4%)

KGT75 3070 ± 40



解析結果

t_{median} =	3280 cal BP
95% range	
1420 cal BC ～	1420 cal BC (0.6%)
1410 cal BC ～	1250 cal BC (87.3%)
1240 cal BC ～	1210 cal BC (5.9%)
1190 cal BC ～	1190 cal BC (0.7%)
1130 cal BC ～	1130 cal BC (0.7%)

第48図　暦年較正確率分布

第5章 まとめ

本遺跡は，旧香東川から派生する旧河道域に位置するとともに，海からの影響を受ける三角洲に近い環境にあるとも想定される。このことから，縄文時代晩期以前は，河川の活発な活動により不安定な土地条件にあったと推測される。これ以後において，遺物がまとまって出土していることから，河川の活動が比較的治まったと想定され，その埋没期には遺構が散在しながらも認められる。それでは，今回の調査結果と第１次調査の結果を併せて，東中筋遺跡の発掘調査成果を時期別に概観し，まとめとしたい。

【縄文時代後期】

第２次調査Ｓ区の旧河道より当該期の土器片が出土した。小片であり磨滅も著しいことから，本遺跡に集落等があったとは考えられないが，高松平野での出土例は珍しい。対岸の岡山では平野において遺跡数が多いが，高松では前田東・中村遺跡など平野南東部の丘陵周辺に見られるのみである。

【縄文時代晩期中葉】

旧河道の河床まで掘削を行った第１次調査では，突帯文土器（晩期後葉）以前となる当該期の遺物が河床より出土している。磨滅が少ないことから，本遺跡または近辺に当該期の遺構が存在する可能性がある。本遺跡から約２キロ南には居石遺跡が所在し，打製石斧（土掘り具）や伐採用と考えられる石斧の柄が出土しており，高松平野において開墾（農耕？）がこの時期には実施されていたと推測される。より海岸に近い本遺跡でも同様の状況が看取できることは重要である。

【縄文時代晩期後葉中頃】

第２次調査Ｓ区の旧河道埋土より，突帯文期の遺物がまとまって出土した。磨滅が少なく，また石器等に接合資料が見られることから，旧河道に隣接する微高地上から投棄された可能性がある。なお，突帯文期とした土器群には，壺といった新しい器形も含まれるが，深鉢・浅鉢ともに古い要素を残すものも認められることから，当該期のものと考えられる。開墾用である土掘り具や炭化物が付着した煮沸具といった日常道具がある一方，多数の彩色された浅鉢や石棒等があり，これらは当時の儀礼やハレの場面を復元する上で重要な資料と考えられる。

また，本遺跡出土突帯文土器の年代が，^{14}C年代測定により紀元前800～750年の間である確率が高く，九州地方の弥生時代早期に並行する可能性が高いことが判明したことは，縄文から弥生時代にかけての変遷を研究する上で，貴重な成果となった。

【弥生時代前期中葉～末】

第１次調査南部微高地の末端部で土坑４基がまとまって検出された。いずれも平面は楕円形で，小形品を含む完形に近い土器が出土している。

【弥生時代前期～後期】

黒褐色土が，安定した微高地上および河川内に堆積する時期である。第２次調査では，微高地上で小区画水田を，流路の北岸では大畦畔を検出している。なお，小区画水田については，プラント・オパール分析で採取地点により含有量にばらつきが認められることから，水田遺構と断定するには慎重を期すべきだが，遺構の状況や他遺跡の事例から考慮すると水田遺構で誤りないと考えられる。なお，小区画水田の時期については，土壌層から弥生前期の土器が，被覆している土層からは弥生後期の土器が出土しており，弥生時代の中で捉えられるものである。

【弥生時代後期～古墳時代】

河川がほぼ完全に埋没する時期で，第１次調査の旧河道南岸で多量に廃棄された土器が出土した。プラント・オパール分析では含有量がもっとも多い時期で，旧河道内において広範に水稲耕作を行っていたと考えられる。古墳時代後期には，第１次調査区南端の微高地末端部で，旧河道に沿った用水路が掘削されている。

【奈良・平安～鎌倉時代初頭】

条里地割に沿った溝が検出された。香川郡三条十九里二・十一坪界線にあたり，SD01・03が併走している。この条里地割に沿った溝以外の遺構は検出されなかったが，SD03からは瓦器椀をはじめ中世土器がまとまって出土しており，当該期の集落が近くに存在していた可能性を指摘できる。

【中世～近世】

第１次調査で，近世の小規模な掘立柱建物を検出した。また，当該期の噴砂痕が調査地全域で認められた。

図版1

S区 第1遺構面 条里溝
（SD01～03，東から）

N区 全景（北から）

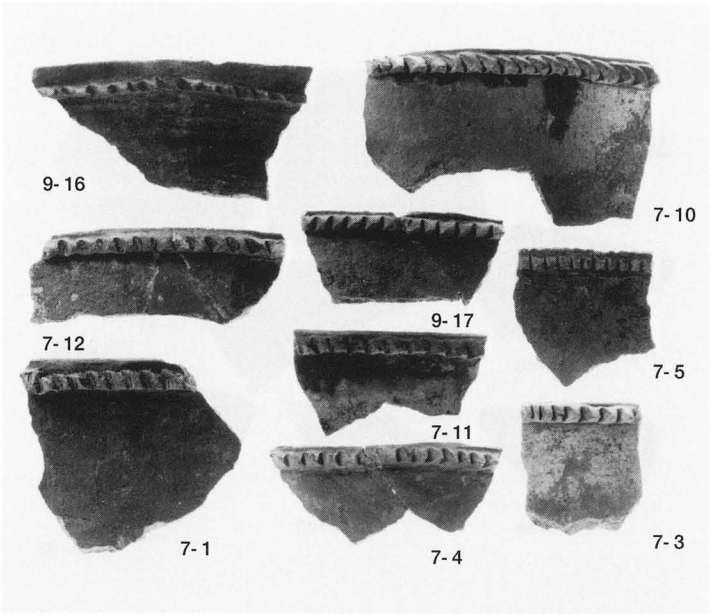
S区 第2遺構面全景（南から）

図版2

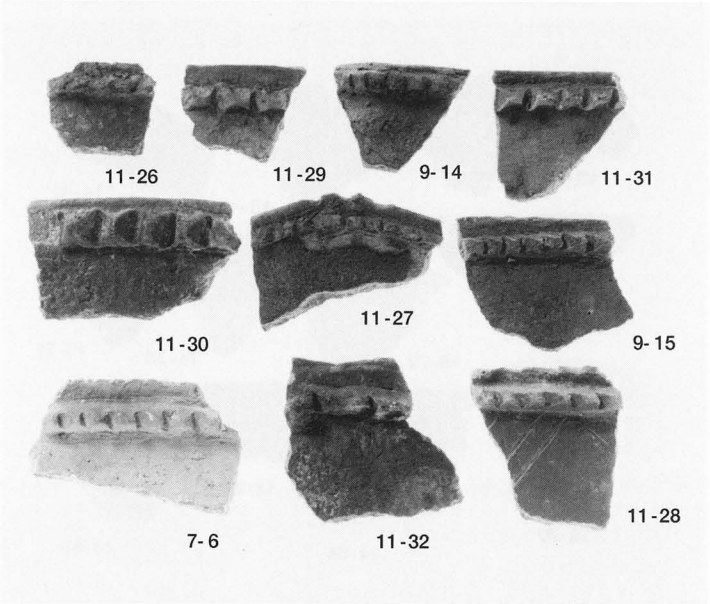
S区 第2遺構面 SK03（西から）

S区 SR01下層部 土器出土状況

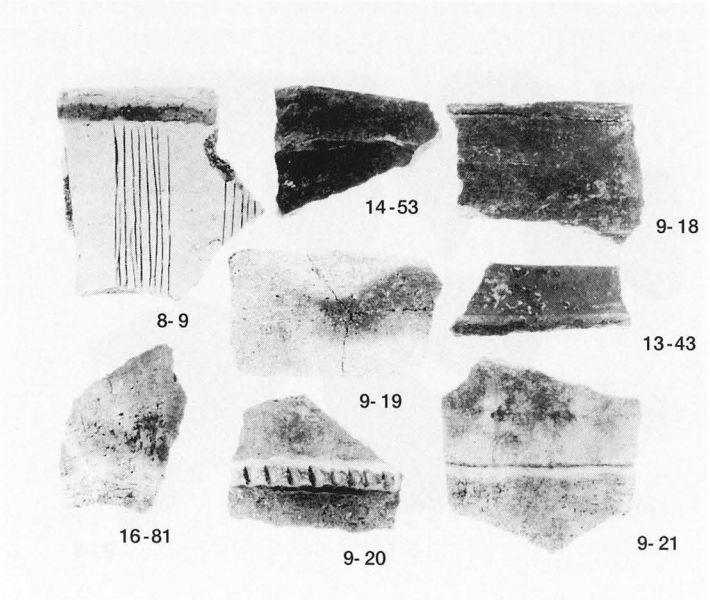
S区 SR01下層部



SR01 E層出土土器

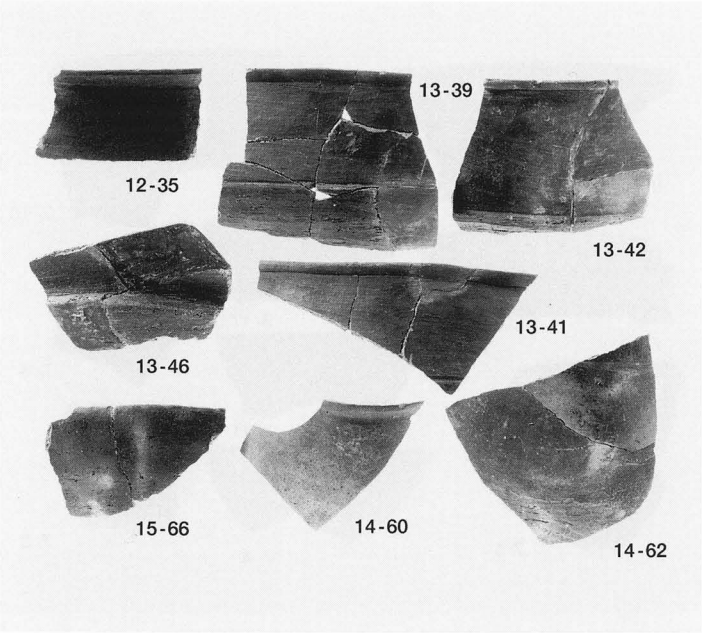


SR01 E層出土土器

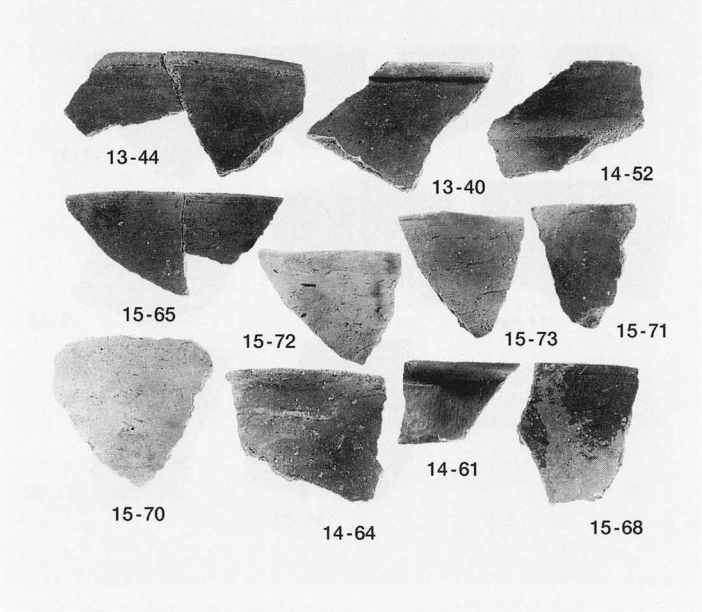


SR01 E層出土土器

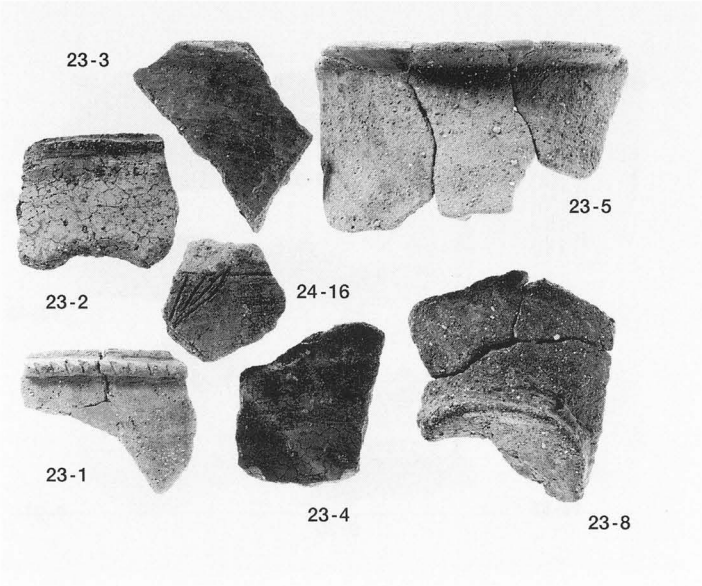
図版4



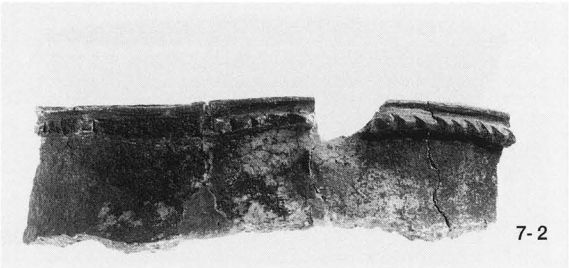
SR01 E層出土土器

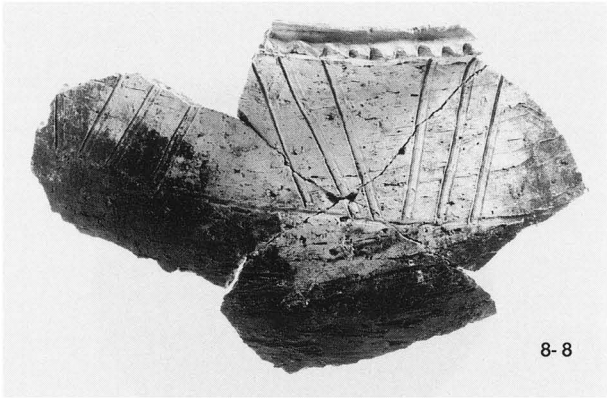


SR01 E層出土土器



S区6-②層出土土器

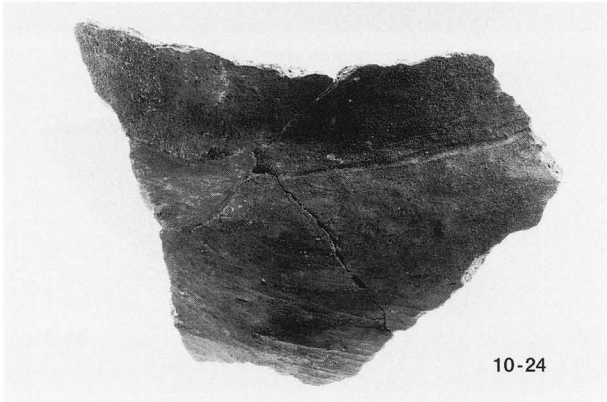

7-2


8-8

12-37

7-7

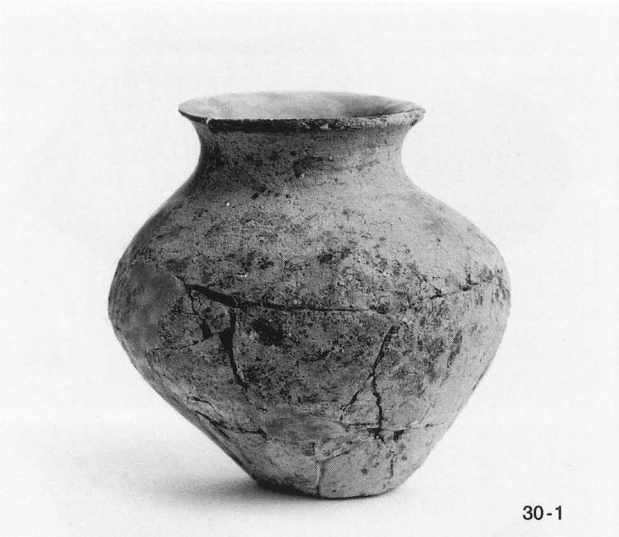
12-36


10-24

15-74

10-25

図版6


30-1

35-2

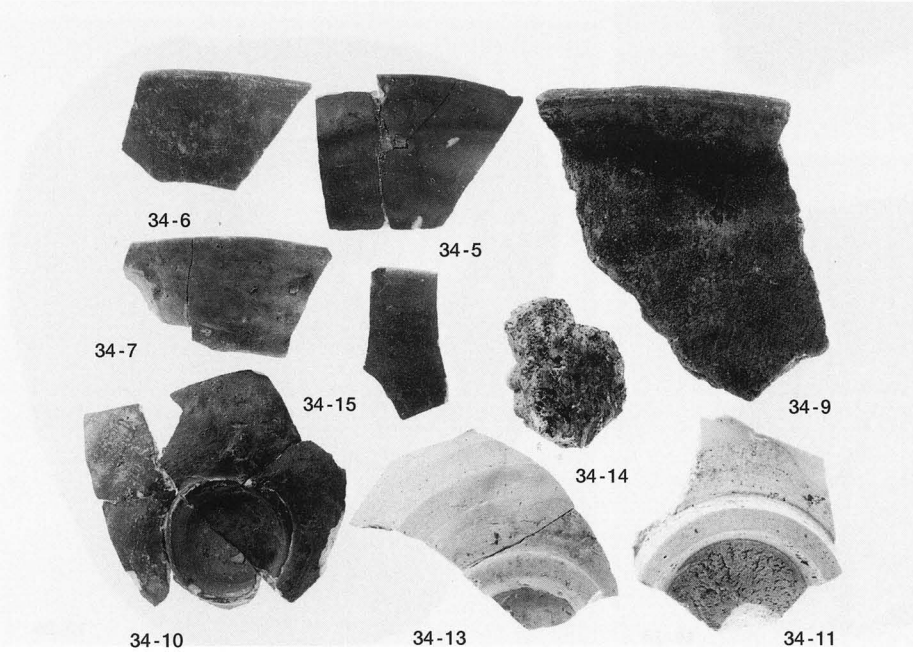
35-3

34-4

35-1

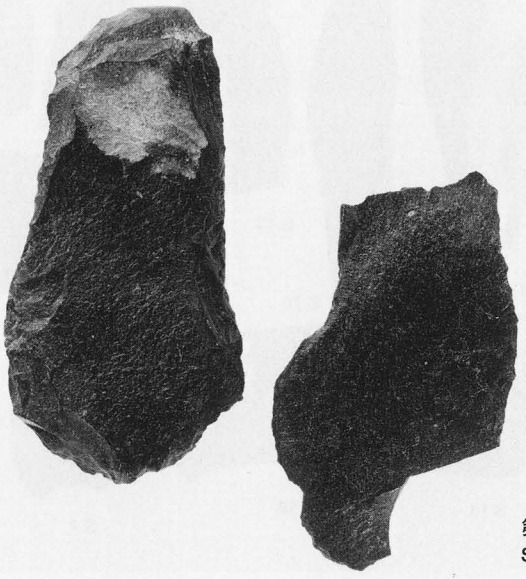
34-3

11-33



SD03 出土土器

第19図
S9+10①

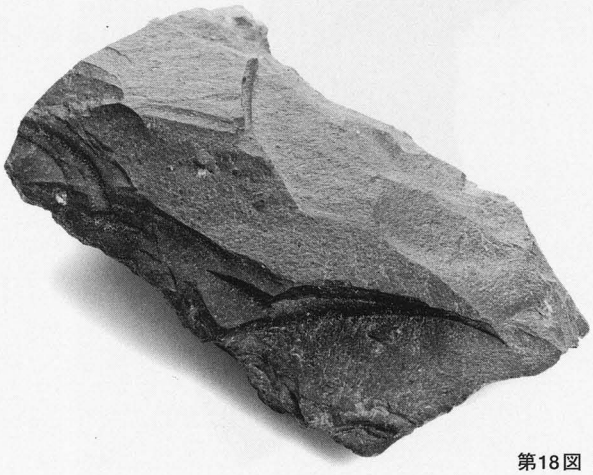


第19図
S9+10②

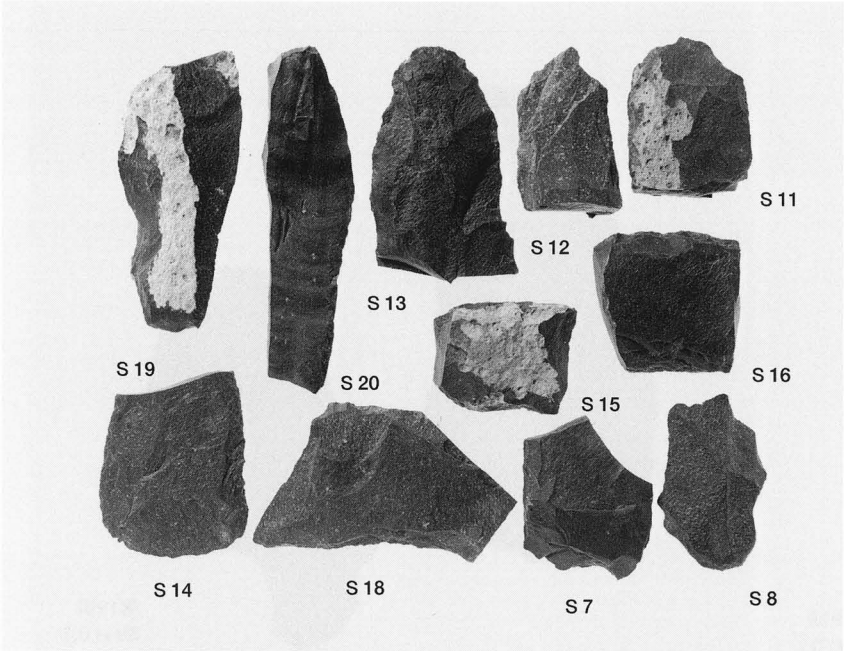
第18図 S1

第18図 S3

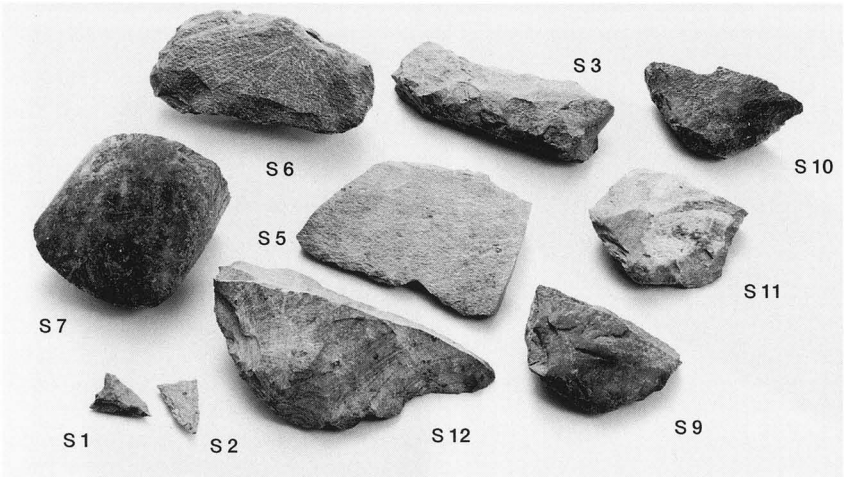
第25図 S7



第18図 S4



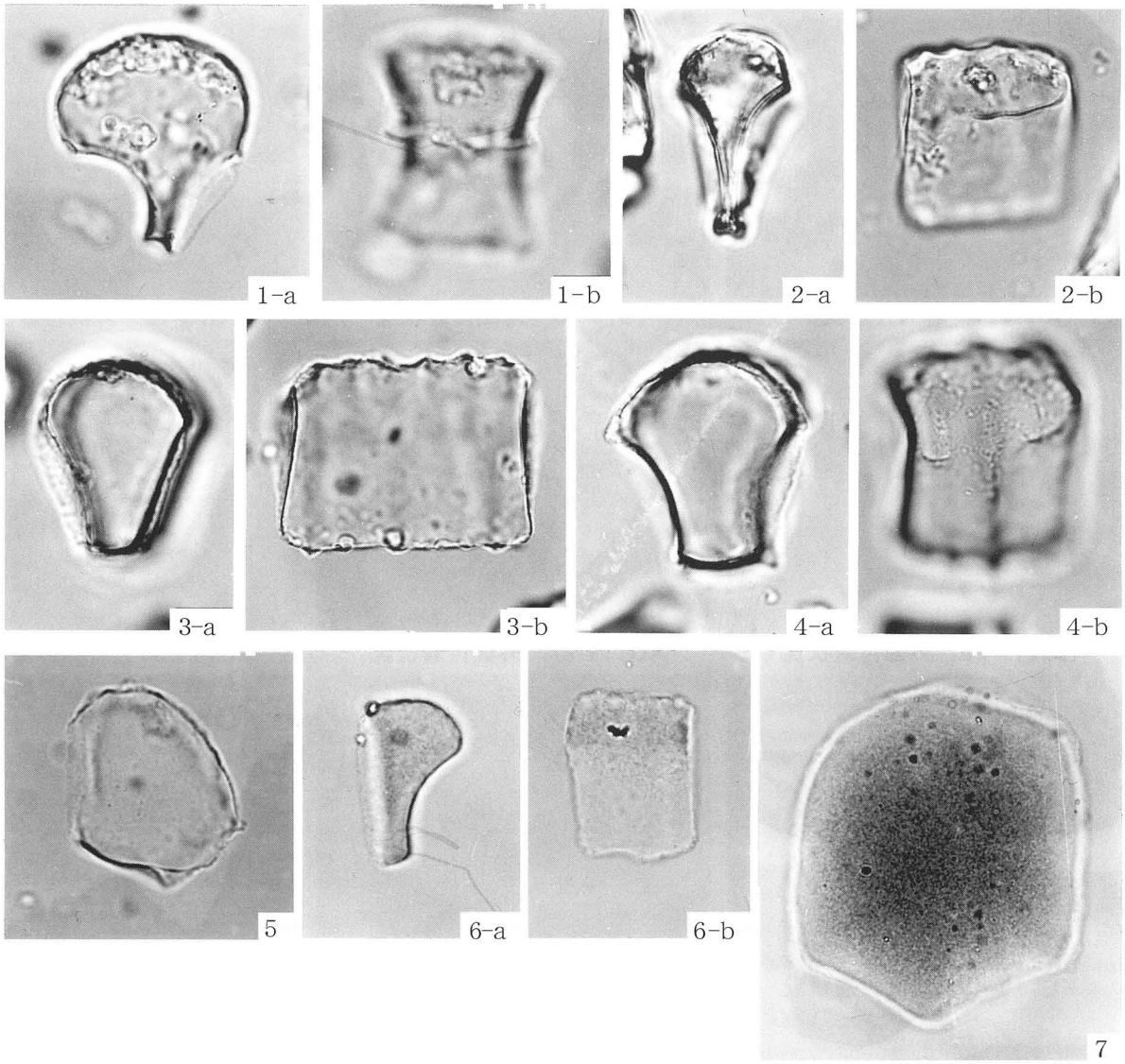
第17～20図
SR01 E層 出土石器



第25・26図
S区6-②層 出土石器

第26図 S13+14①

第26図 S13+14②



図版　東中筋遺跡断面資料のプラント・オパール（scale bar : 30μm）

1、2：イネ（a：断面、b：側面）　1：No. 2，　2：No. 4

3、4：ネザサ節型（a：断面、b：側面）3：No. 2，　4：No. 4

5：クマザサ属型（断面）No. 5

6：ウシクサ族（a：断面、b：側面）No. 2

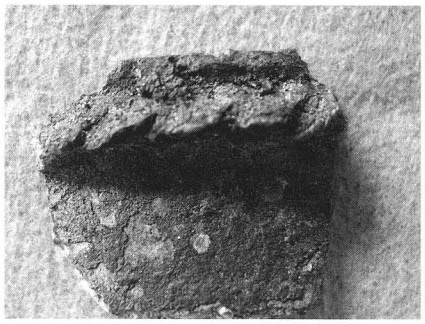
7：ヨシ属（断面）　No. 5

図版10

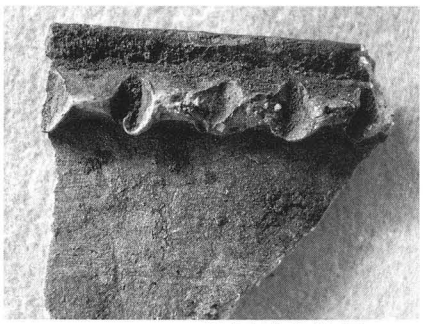
KGT7-1　外面付着状況

KGT8-10　外面付着状況

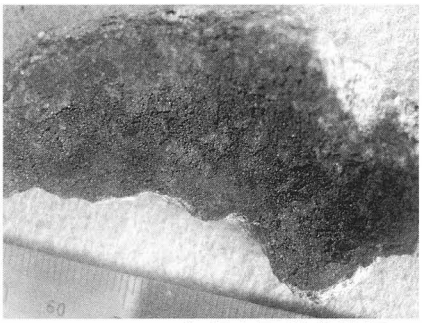
KGT8-12　外面付着状況


KGT11-26　外面付着状況

KGT11-27　外面付着状況

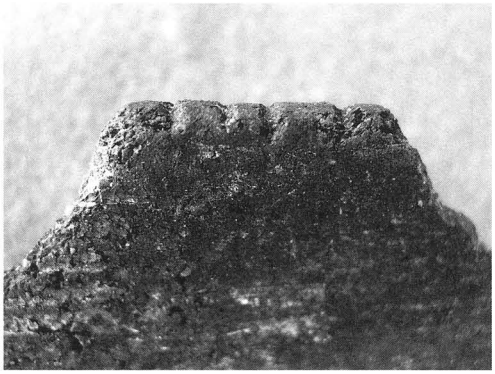

KGT11-31　外面付着状況

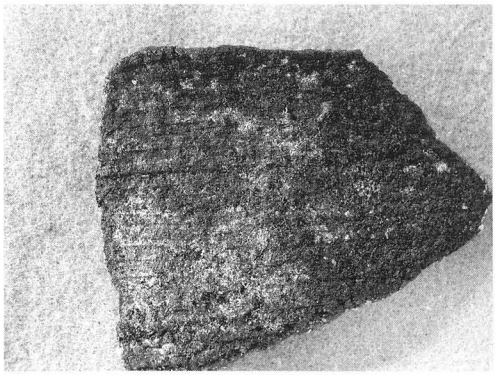
KGT13-43　内面付着状況


KGT16-77　底部内面付着状況

KGT7　外面付着状況

KGT50　外面付着状況

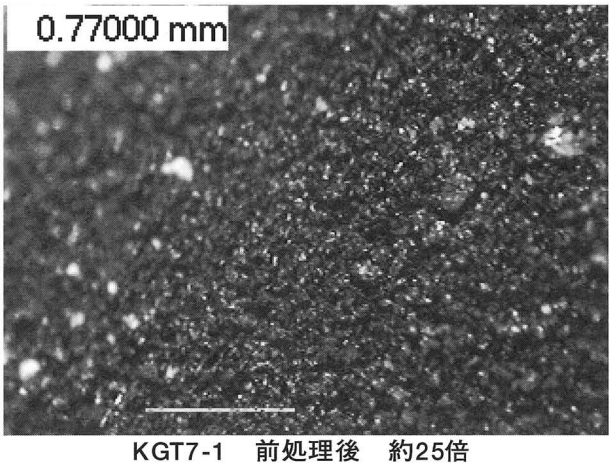

KGT54　外面付着状況


KGT64　外面付着状況

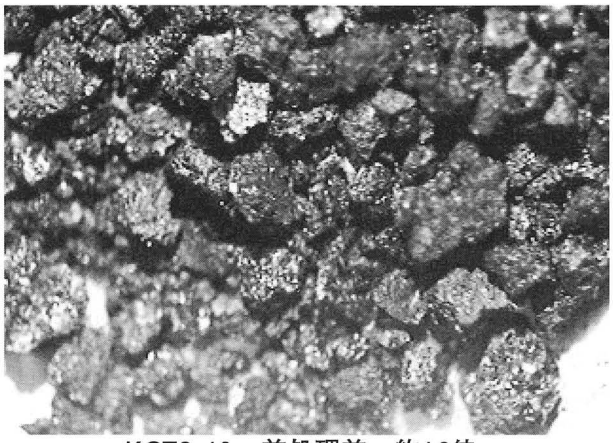
KGT75　外面付着状況

図版11

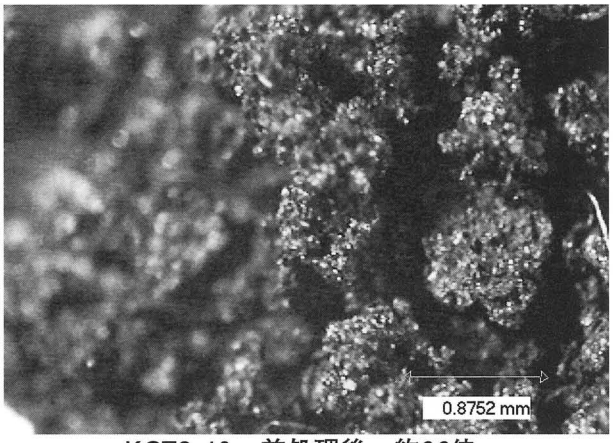
KGT7-1　前処理前　約12.5倍



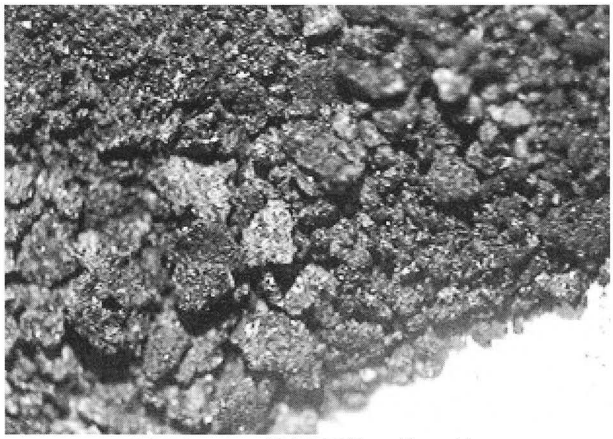
KGT7-1　前処理後　約25倍



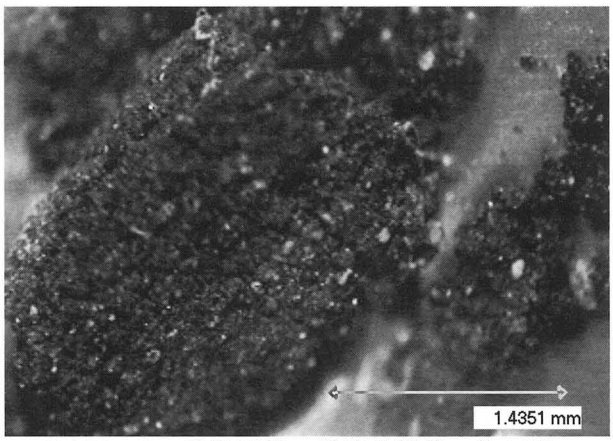
KGT8-10　前処理前　約10倍



KGT8-10　前処理後　約22倍

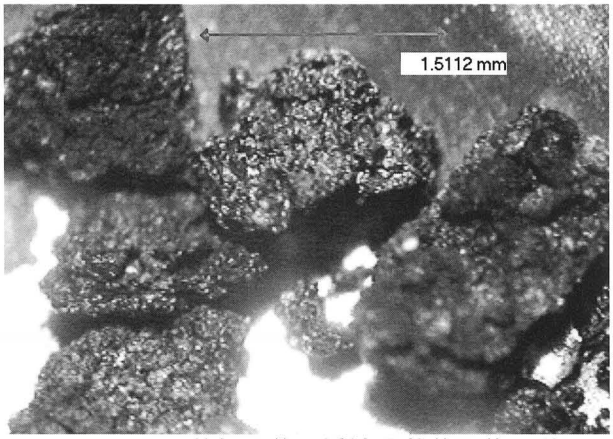


KGT8-12　前処理前　約11倍



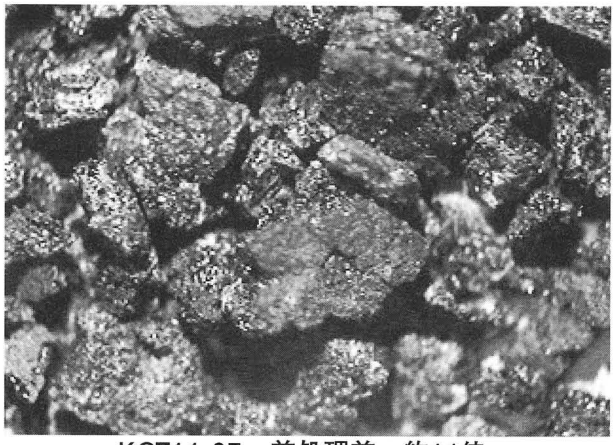
KGT8-12　前処理後・重液分離後　約22倍

KGT11-26　前処理前　約11倍

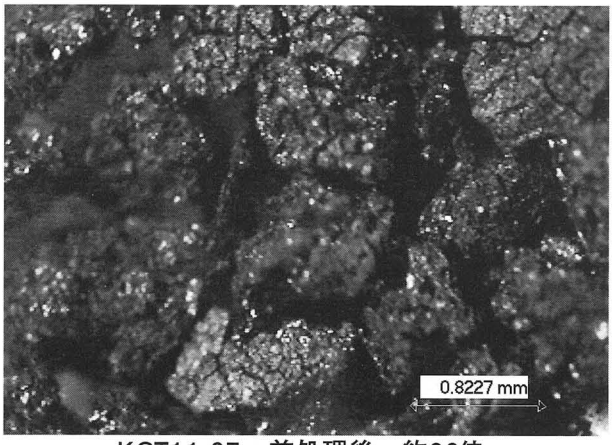


KGT11-26　前処理後・重液分離後　約22倍

図版12

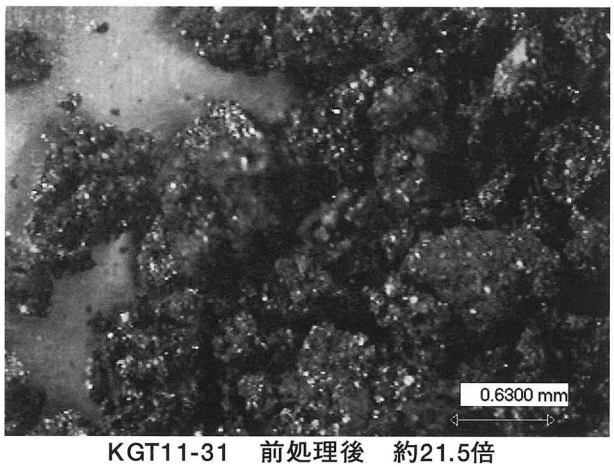


KGT11-27　前処理前　約11倍

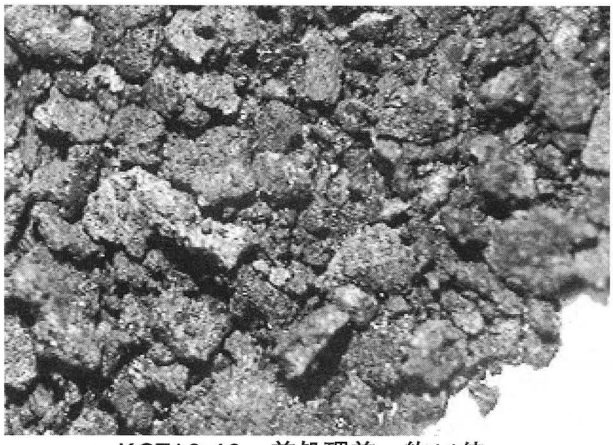


KGT11-27　前処理後　約22倍

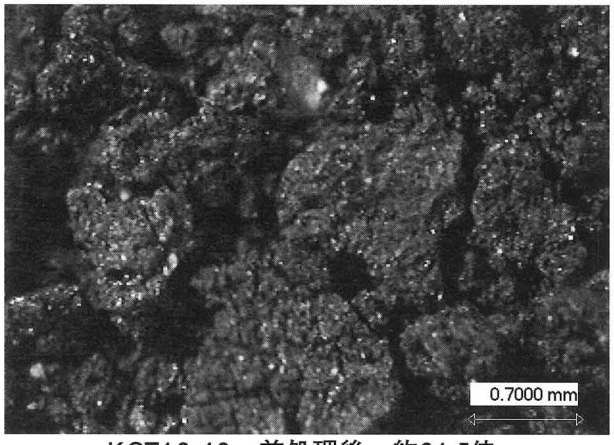
KGT11-31　前処理前　約11倍



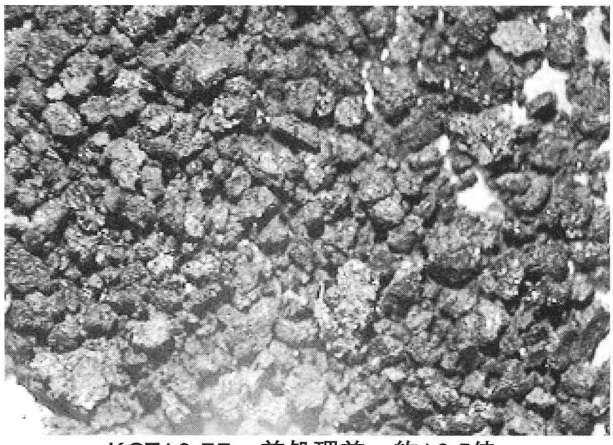
KGT11-31　前処理後　約21.5倍



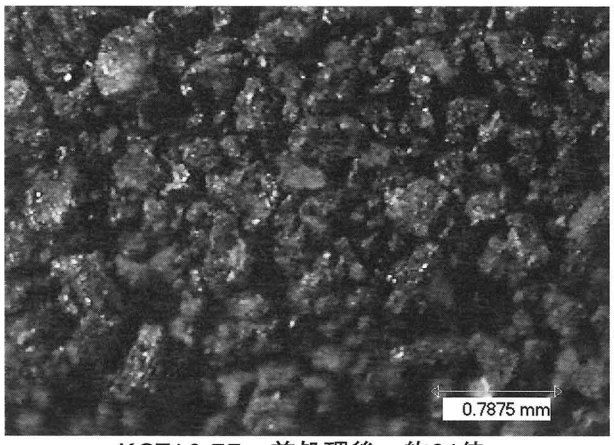
KGT13-43　前処理前　約11倍



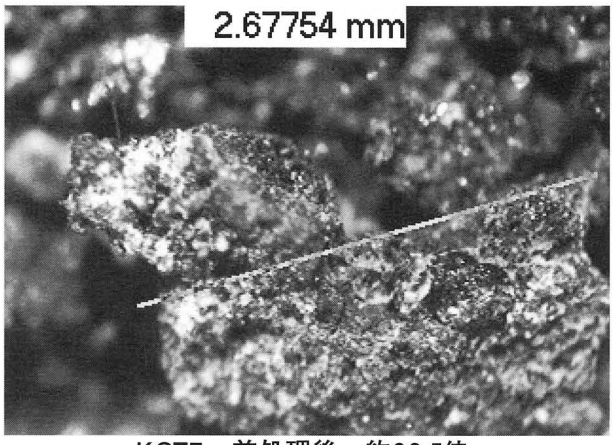
KGT13-43　前処理後　約21.5倍



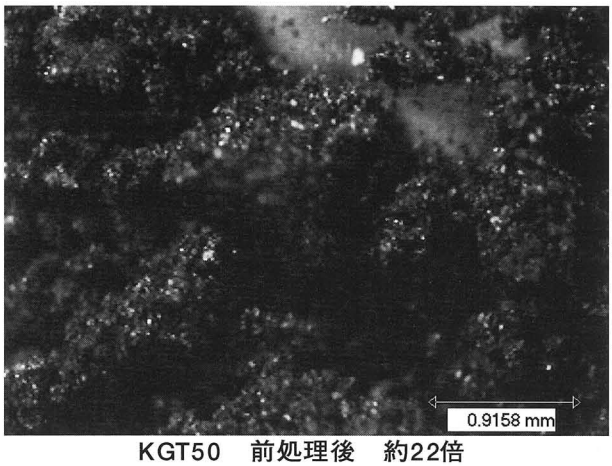
KGT16-77　前処理前　約10.5倍



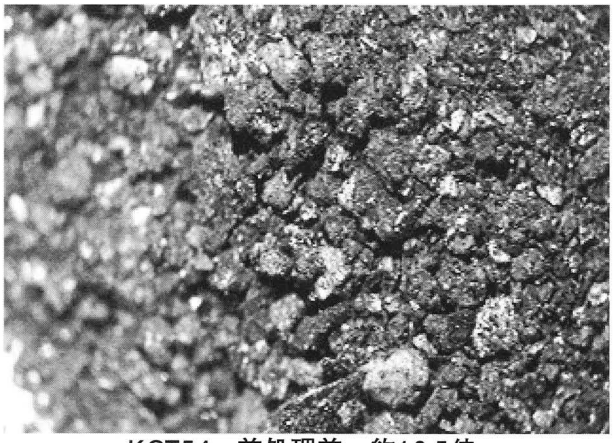
KGT16-77　前処理後　約21倍



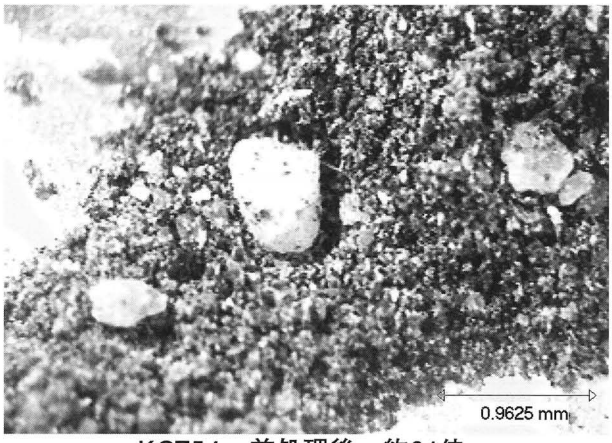
KGT7　前処理後　約23.5倍



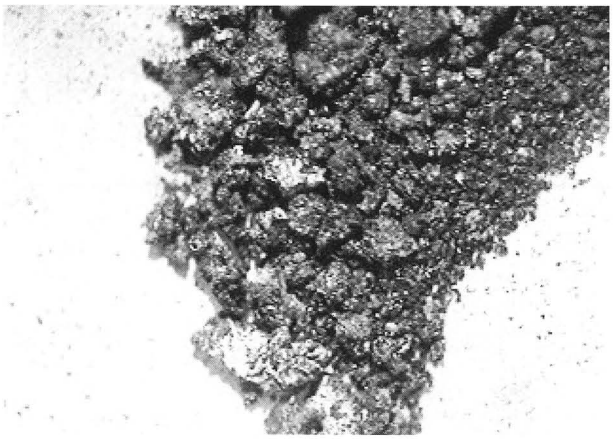
KGT50　前処理後　約22倍



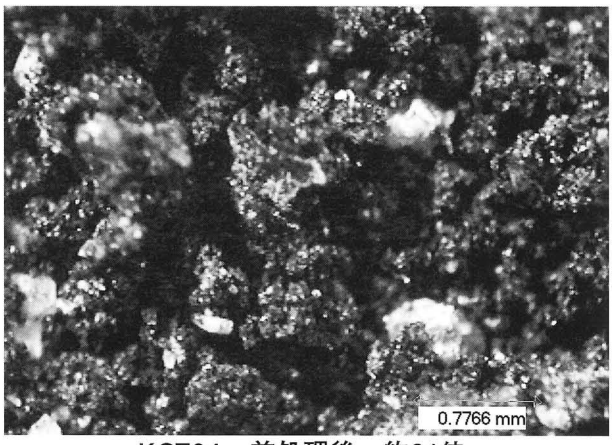
KGT54　前処理前　約10.5倍



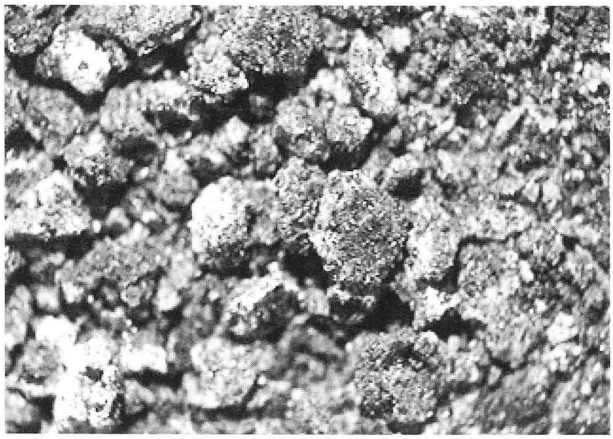
KGT54　前処理後　約21倍



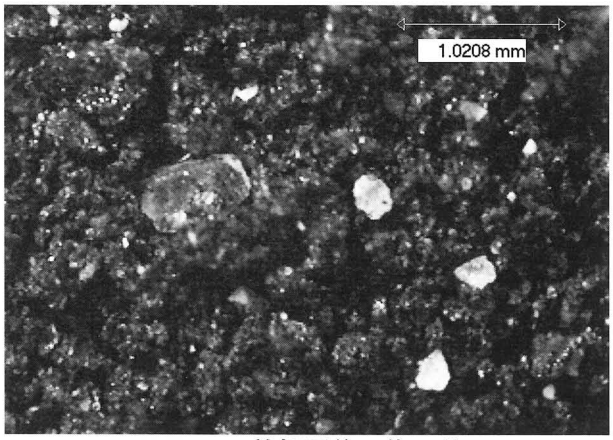
KGT64　前処理前　約10.5倍



KGT64　前処理後　約21倍



KGT75　前処理前　約10.5倍



KGT75　前処理後　約21倍

報告書抄録

ふりがな	ひがしなかすじいせき
書名	東中筋遺跡 －第２次調査－
副書名	都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第二冊
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第７０集
編集者名	小川　賢
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760-8571　香川県高松市番町一丁目８番15号　TEL 087(839)2636
発行年月日	平成１６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひがしなかすじ 東中筋 いせき 遺跡	たかまつし 高松市 さくらまち 桜町二丁目	37201		34° 19′ 14″	134° 3′ 14″	H.12.7.5 ～ H.12.9.28	700 ㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東中筋遺跡	集落	縄文時代晩期～弥生時代	旧河道，小区画水田，土坑	縄文土器，弥生土器，石器	赤色顔料が付着している縄文土器
		平安～鎌倉時代	溝	土師質土器，須恵器，瓦器	条里地割と合致する溝跡

東中筋遺跡－第２次調査－

都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　第二冊

編集・発行　高松市教育委員会
高松市番町一丁目８番15号
発行日　平成１６年３月３１日
印刷　有限会社 中央ファイリング